

インフィニット・デモン
ン・ストラトス (I・
D・S)

フラッシュファントム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アーセナルを駆ける青年は世界の存亡をかけた戦いの末、別世界に姿を消した。傭兵の彼が紡ぐ血と鋼鉄の物語は何を齎し、その行きつく先は何か……誰にも分からない。

ISとデモンエクスマキナのクロスオーバー作品です。宜しく願います。

この作品の一夏はDXMのルーキーに相当する立ち位置です。

ISの原作12巻の設定を入れております。

※恋愛、お色気要素等は一切ありません。

※現在は番外編に相当するEXオーダーを執筆しています。

目次

本編

オーダー0：プロローグ	1
オーダー1：適性検査	8
オーダー2：準備	16
オーダー3：入学と貴族の驕り	25
オーダー4：試合	34
オーダー5：決定と実践	42
オーダー6：転校生とクラス代表戦	49
オーダー7：ソロモン	57
オーダー8：2人の転校生	65

オーダー9：黒兎と貴公子の秘密	73
-----------------	----

オーダー10：学年対抗戦	81
オーダー11：偽りの暮桜	89
オーダー12：戦闘記録	97
オーダー13：林間学校	104
オーダー14：紅椿と福音	110
オーダー15：亡霊の再来	118
オーダー16：帰還	126
EXオーダー編	
EXオーダー1：霧纏の淑女VS黒鷲	133
EXオーダー2：もしもクラス代表決	

	定戦で一夏が白式を使ったら	140			
	EXオーダー3：福音VS亡霊	148		EXオーダー9：発狂する筈	191
	EXオーダー4：ゼルクロアが乱入したらどうなるか	154		解説と余談	
	EXオーダー5：イモータル総進撃(前編)	161		解説その1	195
	EXオーダー6：イモータル総進撃(中編)	169		一夏に関するIS学園の評価	203
	EXオーダー7：イモータル総進撃(後編)	177			
185	EXオーダー8：探査オーダーI				

本編

オーダー0：プロローグ

俺は織斑二夏、戦闘用外部装甲乗りでフリーの傭兵だ。コールサインはイーグルである。

18歳の時、何かの行事で展示されていた試作機のアーセナルに触れたらそれを起動させてしまった。その後でアウターの適性検査を受けた結果は合格、解放旅団の一員となった。

新人類とは量子物質によって特殊能力等に目覚めた者たちで解放旅団はアウターによる傭兵集団である。

彼等の目的は壁^{オーヴァル}という領域に侵攻する敵性AI^{イモータル}の根絶と共同体^{ネイション}と称される組織が活動する為に必要な資源^{フエムト}の採取である。

解放旅団は様々な組織がある。有名な組織は七つあり歴戦の勇士である准将が率いる『バレットワークス』、オービタルが旅団制度を導入した時から存在する『テラーズ』、構成員が全員女性だが他の傭兵団と同等の実力を有する『装甲の王冠』^{バンツァークラウン}、実刑判決を受けた犯罪者で構成された『西の七人』^{ウエストセブン}、長く続く貴族の血族ヴァランティン家によって構成

され、全て彼らの私財で賄われている旅団『Sheer』、兄であるデヴァと弟のゾアという二人の兄弟のみで構成された旅団『鋼鉄の騎士』^{スチールナイト}、どんな困難な作戦にも果敢に乗り込んでいき任務達成率はやや低いながらも部隊を登録してからの欠員数はゼロであり100%の生還率を誇る『不死隊』^{イノセンス}だ。

俺の様にフリーで活動する傭兵もいるがそれはごく少数で殆どの傭兵たちは何処かの組織に所属しているらしい。

これらの存在が生まれた理由は突然、月が崩壊してその半分が地上に降ってきたからだ。これは後に『目覚めの日』^{THE FIRST DAY}と呼ばれるようになった。

これによりフェムトの発見、復興のために使用されていた無人機がイモータルに変異してしまったのだ。

アーセナルはイモータルの脅威に立ち向かうために作られた人型兵器でアウターにしか稼働できないが外科手術や投薬により動かすことはできる。

アーセナル乗りになった俺はフリーで他の解放旅団と協力しながらイモータルの排除と同時にイモータルに汚染されたアーセナルから武器やパーツを回収して自機の強化と改良、ある時は解放旅団の傭兵同士による争いの日々を送っていた。

傭兵になってから2年後、とあるアウターを中心とした解放旅団による野望を阻止

すべく解放旅団を中心とした大規模な任務に俺は身を投じた。

その戦いは苛烈を極め、全ての元凶というべき神々しくも禍々しき存在を目の当たりにする。

「これが、全ての元凶なのか……」

その存在を見て戦慄したが命をかけて道を切り開いた仲間と明日の希望を掴むために恐怖心を振り切って戦った。

互いに傷つき武器を失いながらも一進一退の激しい攻防を繰り返す。

その果てに双方、満身創痍となりあと一撃で倒せる状態になった。

俺は愛ブラックイーグル機の右手に持った太アミノムラクモ刀で止めを刺す為に斬りかかる。

「これで……終わりだ!!」

そう叫びながら奴の体に刃が触れる寸前で重力場を展開した。横一閃の一太刀浴びせると同時に発生した重力場に吸い込まれて意識を失った。

意識を取り戻した俺は気が付くと何かの格納庫らしき場所に仰向けで倒れている事に気付いた。あの時、アーセナルに乗っていたが見当たらない。通信機で仲間呼び

掛ける。

「ここは……俺はブラックイーグルに乗っていたはずだが……。」

こちらイーグル、ジョニー上等兵、少尉、准将！ 応答してください！ くっ、駄

目か……」

仲間との通信が取れない事が分かった。体を起こして愛機を探すために周囲を見渡す。そこでパワードスーツらしき物が置かれている事に気付く。

そこで俺はパワードスーツに歩いて近づき、観察する。

「これは……ブラックイーグルじゃないな」

新型のアーセナルと思つたが、見た感じだと人が乗り込むと言うより着用する方があうような物だった。

自分が探している物では無かったので後ろを向いた。ブラックイーグルが何処に消えたかを考え始める。

その時、俺の右手首に黒を基調とした黄色とオレンジの線と青い点らしき物が刻まれている腕輪を嵌めている事に気付いた。

「なんだこれは？ 俺はこんなものを付けた覚えは無いぞ。ブラックイーグルの色にそっくりなのは気になるが……」

そう呟いた時、格納庫の扉が開いてこの場所の職員らしき数人が入ってきた。取り敢

えず敵意が無いことを示すために両手をあげた。案の定、数人は退路を塞ぐかのように取り囲んだ。

「お前は何者だ?!」 答える!

目がつり上がった厳つい雰囲気女性の女性に問われた俺は口を開く。

「私は解放旅団、フリーの傭兵、イーグルだ」

そう名乗ったが厳つい女性は俺を睨み付ける。何となくだが俺と顔が似ている気がするが…気のせいか。

「解放旅団、フリーの傭兵、何のことだ……?」

女性は俺の言った事が理解できないのか警戒心を顕にしている。気になることがあるとすれば俺を何か見て困惑しているような気配が僅かだが感じとる事ができる。

「この通り、一切抵抗はしません。貴女方の指示に従います」

俺は降伏しながらそう言った。それを見た職員達は俺の言うことを信じたのか格納庫らしき部屋から別の場所に案内をする。その前に俺の所持品を全て没収された。

身元確認と危険物が無いかどうかを確かめるためなので問題なければ返却してくれるようだ。

俺が案内された所は個室で中央に机と対面するように配置された椅子が2つ用意されており部屋の奥に1人用のベッドが置かれている。俺は出入口が近い所にある椅子

に腰を掛けた。

職員から部屋で待つように指示されたので考え事をしながら待つことにした。その時に窓から見た光景の事を思い出す。

（窓から見えた海が青かった。俺のいた所の海は赤かったが、これはどういうことだ。まさかとは思うが……）

どうやら平行世界に流されてしまったのではないかと思った。突拍子も無い仮説だが……。表面では冷静を装っている。内心では動揺しているが表に出さないようにした。

その時、個室の扉が開き厳つい女性がトレーを持って部屋に入ってきた。トレーには俺の所持品がある。しかしあの腕輪が無いことに俺は気づき女性に質問する。

「私がついていた腕輪が見当たらないのですが……忘れてきたのですか？」

俺がそう問うと女性から予想外の言葉が出る。

「あの腕輪からISの反応が出た。あれを何時どこで手に入れた!？」

ISの反応、俺には全く分からなかった。そもそも俺はISという言葉すら知らない。そこで俺は自分の仮説が合っているのか確認するためにある事件について尋ねる。

「IS反応とは何の事ですか？ あの腕輪について私は一切知らないです。こちらでも確認したいことがあります。目覚めの日は何か分かりますか？」

俺は目覚めの日が何を意味しているかを問いかけた。

「目覚めの日、何のことだ？ 本当にあの腕輪の事は知らないのだな」

「どうやら自分の仮説が正しい事が証明された。ここは月の崩壊が無かった地球のようだ。」

「あの腕輪は気付いたら持っていました。間違いは無いです」

俺は改めてそう言った。あの腕輪に関しては気になることがあるが後で調べよう。

「そうか……。私は織斑千冬、ここI S学園で教師をしている」

「私は織斑一夏、コールサインはイーグル。名字が同じとは奇遇ですね」

女性の名前、織斑千冬と聞いて同じ名字だなと思った。自分の今いる場所はI S学園という事が判明した。

この時、織斑千冬から動揺らしき何かを感じ取ったが……その理由は分からなかった。

こちらのことについては明日詳しい調査を行うとの事で今日はここの個室で休めとの指示が出た。

「さて……。この世界の事を詳しく知る必要があるな」

そう呟いた俺はシャワーを浴び、個室に用意されたシャツと半ズボンに着替えてベッドに仰向けになり眠りについた。

オーダー1：適性検査

一夏が眠りについた頃、I S学園の地下にある極秘の研究施設でI Sと思われる黒い腕輪について解析されていた。それは全く進んでいないようだ。

機体の情報にアクセスしようにも拒絶されてしまいデータの閲覧が一切できないのだ。

「反応しない。どういうことだ……」

「こんなことは初めてです！」

「うむ……どうしたものか……」

解析を進めていた織斑千冬はそう呟いて悩んだ。そこに同席していた教員の山田麻耶とI S学園の学園長も同様だった。この後、いくらアクセスを試みようとするも全く反応が無かった。

翌日、起床した一夏はアウターのスーツに着替えると千冬と教員と思わしき人物が2人が部屋に入ってきた。千冬は昨日、一夏から押収した黒い腕輪を持っている。

「おはようございます。昨日は眠れましたか？」

私はIS学園の教師をしている山田麻耶です。宜しくお願ひします」

緑色の短髪と眼鏡を掛けている童顔の女性が自己紹介をした。それに続いて千冬が口を開く。

「昨日、お前の腕輪を解析をしたが全く反応しなかった。もしかしたらお前なら反応すると思った。起動する可能性を考慮してここ来た」

彼女は説明を終えると2人は一夏をある場所に連れて行く。案内された場所に着くとそこは広いアリーナだった。千冬は黒い腕輪を一夏の前に差し出す。

「この腕輪か」

一夏は千冬が持っていた腕輪を受け取った。すると全く反応しなかった黒い腕輪から眩い強烈な光が発せられ、彼の全身を包み込んだ。

「今のは一体……!?!」

光が消えて周囲を確認した一夏は全身装甲フルスキンを身に纏っていることに気づいた。彼は中世の騎士を彷彿させるような鎧を纏っており黒を基調としている。また所々に黄色とオレンジの線、青の短い線が確認できた。

それを見た千冬と麻耶は困惑したが千冬は直ぐに冷静さを取り戻した。麻耶は驚き戸惑ったままだった。

「やはりISだったか……。織斑、状況を伝えろ」

彼女がそう問うと一夏はありのままに感じた事を述べる。

「この感覚は……。黒ブラックイーグル 鷲に乗っているみたいだ」

一夏はそう伝えて黒鷲から降りようとした瞬間、彼の乗っていた黒鷲が赤い光の粒子を放出しながら消えて黒い腕輪に変化した。

「腕輪になった。どうなっている……?」

彼は一連の出来事に困惑していたが千冬はそれに構う事無く一夏をアリーナ内にある個室に連行した。

その際に黒い腕輪は彼女が没収した。

「織斑、あれをアーセナルと言ったがどうみてもISだ！正直に答えろ!!」

一夏は千冬から厳しい口調で問い質された。彼はそれに臆することなく冷静に答える。

「分かりました。その代わり、この世界の事について教えていただけますか。恐れ入りますがここ事情を私は全然分からないもので……」

「……良いだろう。まずお前はそれを何処で入手した。どう見てもお前の物みたいだが
 どういう事だ」

千冬は少し考えた後に口を開き、厳しめな口調で彼に昨日と同じ質問をする。

「これはある適性検査に合格して支給されたアーセナルです」

一夏はそう答えた後、アーセナルとそれらに関わる事象について簡潔に説明した。

「つまりお前はこの世界に存在しない人間という事か……。そんな話、信じられん！」

「そう仰りたいのは理解できます。その前に私が提示した条件をお忘れですか？ 今度は貴女から情報を頂きたいのですが宜しいですか」

話を聞いた千冬は机を叩きながら怒鳴るが一夏は冷静な態度で応対する。それを見た彼女は平常心を取り戻し、この世界の事情について話をした。

インフイニット・ストラトス

I S の登場、

それによる女尊男卑の風潮が広がった事等を語った。

「そうか……。私にとつては今聞いたこと全てが初耳だ。これは私が別世界から来た何よりの証拠だ。反論したい事があるのなら言っていたきたい」

この世界の事情を知った一夏はどんな世界にもそれ相応の厄介事が存在していると思つた。

「今の私はI Sに極めて近い物を所有している。兵器それは本来、女性にしか動かせない物を男性である私が起動させた。この認識で間違いが無いか確認をお願いします」

彼は自身の現状についてそう述べると千冬は彼の理解力の高さに内心では驚きながらも返答をする。

「それで間違いはない」

「今後についてですが私は何をすれば宜しいですか」

一夏は警戒心を抱きながら質問をする。もし一夏を研究材料にしようものならば機密保持の為に黒鷲と共に自爆するつもりだ。幸いなことに黒鷲は千冬が持っているので強奪する事はできる。

「世界初の男性IS操縦者……この事は上に報告せざるを得ない。恐らくデータ収集をすることになると予想されるからこの学園に入学をしろ」

「分かりました。そう仰るならその指示に従います。但し、私がこれから提示する2つ要件を受け入れる事が条件ですが宜しいですか」

一夏は入学する条件として2つの条件を提示した。

1つ目は敵の襲撃等の有事が発生した際は最前線に立って活動ができるようにする事。

2つ目は黒鷲の情報は最低限の情報だけを此方側から開示する。その代わりに学園側での情報解析は一切しない事である。稼働データの収集に関しては構わないという事も加えた上だ。

彼がこれらの条件を提示した理由はイモータル襲撃等における立ち回りを自分が現時点で最も理解している事、アーセナルの情報はこの世界で悪用される危険性は十分にある事を念頭に置いた上での事だ。

「分かった。その前に適性検査を受けてもらう。ついてこい」

一夏は交渉内容があっさり受け入れられた事に内心驚きつつも適性検査を受ける為に再びアリーナにやってきた。彼はアリーナのカタパルトデッキに立っている。

「これから適性検査を開始する。ISを展開しろ」

「分かりました」

千冬からの指示を受けた一夏は彼女に渡された腕輪を持った。すると腕輪から光が放たれ、彼の全身を包み込んだ。光が消えると先程と同じように一夏は全身装甲を纏っていた。

「全システムを確認、問題は無いです」

彼は画面に表示されているシステムに異常がない事を確認してそう告げた。

「分かった。織斑、カタパルトデッキに移動して山田先生の指示に従って行動しろ」

「分かりました」

千冬の指示を受けた一夏はカタパルトデッキに足を進めた。それを見た山田先生は驚くが彼は気に留めなかった。

「カタパルトの固定を確認。射出をお願いします」

射出機に機体を固定させた一夏が報告した。それから直ぐに射出された彼はアリーナの中央上空まで黒鷲を動かして待機、武装を確認する。

(武装を確認。ライトパイロンに突撃銃、レフトパイロンにグリムリールパイ盾タイタンフレートか…。あの時と同じだな)

そう思った一夏はライトパイロンにある突撃銃を右手、レフトパイロンにある盾を左手に装備した。

『織斑君、今から出るターゲットを全て撃つてください』

「分かりました。イーグル、これより任務を開始する！」

山田先生は管制室から一夏に指示を出した。彼はそれに従って最小限の動きで全ての標的を突撃銃で黙々と撃ち抜いた。彼の手慣れた動きを見た千冬と麻耶は驚きを隠せなかった。

「標的を全て撃った。次はどうすればいい？」

撃ち終えた一夏は管制室の山田先生に次の指示を仰ぐと意外な返答が来た。

「ええつと……検査は以上です。お疲れ様でした」

今ので検査が終了との事だった。もう少し実戦的な事があると考えていた彼は拍子抜けしたがアリーナのカタパルトに戻った。

一夏は戻って黒鷲を解除すると千冬と山田先生がやって来た。

「検査の結果だが合格だ。IS学園に入学してもらおう」

「ありがとうございます」

千冬から合格を告げられた一夏は御礼を言った。

「念の為に体に異常が無いかを確認の為に血液検査をする。その後は部屋に戻れ。

入学まであと3週間はあある。明日はパソコンと生活に必要な物、資料を持ってくるから読んでおけ。以上だ」

「分かりました」

一夏は千冬の指示に従って血液検査を受けた後、自身がいた個室に戻った。

(これから忙しくなりそうだな……)

部屋に戻ってシャワーを浴びた一夏はそう思いながらベッドの布団に入り、眠りについた。

オーダー2：準備

翌日、俺は起床して着替えると部屋のドアからノックをする音が聞こえた。

「どうぞで」

俺はその場からドアに向かって一声掛けてこちらからドアを開けた。短髪で髪の毛が水色で瞳の色が赤が特徴の女性が大きなダンボール箱を持って入室した。

「貴方が織斑一夏君ね。私は更識楯無、IS学園の生徒会長宜しくね」

「私は織斑一夏、20歳です。ご迷惑をかけることは沢山あると思いますが宜しくお願います。その箱は私がお持ちします。荷物を持って来ていただきありがとうございます」

その女性、更識楯無は自己紹介をしたのでこちらも改めて自分の名前と歳を名乗って彼女が持っていたダンボールを持った。今の立場は下なので丁寧な挨拶をした方が得策だと判断した。

「そんなに畏まらなくていいわよ。私の事は好きに呼んでいいからね」

「何というか私の癖のようなもので……生徒会長と呼ばせてもらいます。その方が私としても呼びやすいです」

俺はそう言ったが生徒会長はご不満な様子だった。そこで楯無さんと呼ぶ事を提案すると彼女は渋々ではあるが了承してくれた。

自己紹介の後に彼女は千冬からの指示で昨日、支給すると言っていた物品が入ったダンボールを渡し来たのだ。

「支給された物品の内容を確認をしました。問題は無いですが、ありがとうございます」
届けられた物はノートパソコンとケーブル類、生徒手帳と学生証、ISに関する資料と参考書類と制服等のこれからの学園生活に必要な物だ。問題が無い事を確認して楯無さんにお礼を言った。

「どうやら彼女は挨拶がてら俺に物品を支給するために来たとの事だ。俺に会ってみたいという私的な考えがありそうだが気にしない。」

その後、彼女から学園生活に関する規則等の説明を簡潔にしてもらった。規則に関してはオーヴァーリンクで活動していた時と比べたら外出に関しては制限はあるが特に問題は無いと判断した。

「説明は以上だけどこで何か質問はある？」

楯無さんは説明を終えると俺に質問が無いかを確認する。そこで俺はある事を訊ねる。

「あります。入学までに私は量産型のISを動かしたいのですが現状でどれだけ時間が

確保できるか教えて頂けますか。それとその申請した時間内で私のブラックイーグルを稼働させても問題は無いですか」

「そうね……今から申請書類を書いて提出しても量産機は約1時間ね。今の時期だと施設の点検の関係で3週間の内で動かせるチャンスは一度だけね。

貴方の専用機は所定の場所や緊急事態以外での展開は許可されていないわ。けどその時間内で専用機を使う事は問題ないからね」

それを聞いた量産機を動かす時間が確保できると分かって内心、ホッとした。

このまま動かす事ができなければISの使い勝手や対策を考案するのは困難だからだ。実際に物を動かしたりしないと分からない事が多くある。

「ありがとうございます。荷物の整理が終わったら申請用紙の記入をします」

お礼を言つて急いで取り掛かる。早く書いて提出した方がお互いに助かると思ったからだ。

「どういたしました。そんなに急がなくて良いのよ。用紙は私が取りに行くから大丈夫よ」

「お気遣い、感謝します。恐れ入りますがその類いの書類は今後、自ら取りに行く事が多くなると思います。自分で行けるようになっておきたいので代わりに場所への案内をお願いします」

彼女に任せても良いかもしれないが自分で出来るようにした方が安心だ。俺はそう思つて提案した。

「整理が終わつたら声をかけて。廊下で待つわ、でも急がなくていいからね。その前に一つ、貴方に訊きたいことがあるけどいいかな」

「私の申し上げられる内容でしたらお答えします」

楯無さんが俺に確認したいことがあるので聞くことにした。

「貴方は織斑千冬の弟ですか？」

彼女にそう聞かれた俺は少し考えた後に答える。

「いえ、私の身内に姉はいないです。確かに同じ名字で顔つきが何となく似ているとは思いました。しかし改めて申し上げますが織斑先生の弟ではありません」

自分の感想を交えてそう述べた。生憎だが俺に姉はいない。あの世界の孤児院で育つた。

「そう……分かつたわ。ありがとう」

楯無さんはそう言つて部屋から出た。すぐに物の整理を開始する。ノートパソコンは机の奥に配置、貴重品類は衣服のポケットに入れて資料は机の上に重ねて置いた。

「とりあえずこんな物にしておくか。楯無さん呼びに行こう。……警戒するに越したことは無いな」

楯無さんは表面上は物事を親切に教えてくれる頼れる先輩に見えた。しかし裏では俺に対して強い警戒心を抱いている事を感じ取った。それにテラーズに似た黒い感覚もあつた。

一旦、その事を考えるのは止めて部屋の外に出た。

部屋を出ると廊下に楯無さんが待つていた。そのまま彼女は俺を職員室に案内し、そこに在中している教師に話をして用紙を受け取った。

「これが申請書よ。職員室の先生に声をかけたら貰えるわ」

そう言つて楯無さんは申請書を渡してくれた。

「ありがとうございます。申請書は今日中に書いてそちらに提出します。分からないはこちらで確認します。失礼します」

楯無さんと対応してくれた教師にお礼を言つてから職員室を出て自室に戻り書類に必要事項を記入する。分からない所は特になかったので必要事項を全て書いて職員に提出、不備が無いか確認してもらつた。

「不備は無いですね。申請書を受理しました。結果が出るまでお待ちください」

幸い、不備は無かつたようだ。書類は書き間違い等があつたら面倒なことになるから早い内に見つけて直したいと思つていたが杞憂だつた。

申請の結果が出るまでの間に俺は支給された資料を読む傍らで世界情勢の調査、ア

セナルと量産型 I S のスペック表の作成をした。其々のスペック表を作った理由はアーセナルと I S の違いを確かめて I S の理解を深める為だ。

それから 1 週間後、アリーナと量産機の使用許可が出たので即座に行動を取る。

山田先生の監視下で I S と黒鷲を動かすのだ。フィールドに立った俺は最初に黒鷲を起動させて地上と空中、合計で 5 分程度で基本動作と飛行を終わらせた。

「感覚は今までと同じだから問題は無しだな」

これに関しては今まで腕輪に変化する前の黒鷲と変化後に違いは無かった。管制室に目をやると山田先生はデータ収集をしていた。直ぐに切り上げてカタパルトデッキに入りこむ。

「本命はこれだな」

黒鷲を解除してデッキに置いた侍の甲冑を模した量産型 I S 『打鉄』を着用、カタパルトデッキからフィールドに飛び出した。

黒鷲で先程行った基本動作を全て実行した。感覚としてはアーセナルに近いが微妙に違うような物で具体的に表現するのは難しい。慣れるのに少し時間がかかりそうだ。

残りの時間は武装を確認、銃器は試射をして刀剣類は素振りを行い、フィールドの周

辺を飛び回った。飛行についてはアーセナルでしている事をイメージしてやってみたら大きな違和感は無かった。

『織斑君、あと5分で終了時間になります』

「分かりました。イーグル、任務を終了する」

山田先生が残り時間を告げた。必要な情報がとれたのでカタパルトデッキに飛行して戻り、打鉄を解除した。そこに山田先生がやって来た。

「山田先生、お忙しい所をお立合いいただきありがとうございます。今回収集できたデータについてですが内容はこちらでまとめて提出した方が宜しいですか」

俺は念の為に彼女に確認を取った。

「いえ、大丈夫です、稼働データはこちらも記録しているので私から提出します。なので織斑君は入学まで勉強に専念してください。それと打鉄もこちらで回収します。ゆっくり休んでください」

「分かりました。ありがとうございます。私はこれで失礼します」

山田先生にそう言つてアリーナを去った。部屋に戻り、今回のアリーナで得られたデータをまとめた。

「ISとアーセナル、カタログスペックと使用した感覚に大きな違いは無しと……。大まかな違いはあるがそれは明日改めてまとめるとするか」

大まかなまとめを終えてそう眩きながらパソコンの電源を切ってシャワーを浴びた。それから着替えて直ぐにベッドで眠った。

その日の夜、職員室で織斑千冬と更識楯無は一夏の事について話をしていた。

「DNA鑑定の結果が今日の夕方に届いた。私と一夏は姉弟だ。あの時は疑っていたが……生きていて良かった！」

千冬は涙声をあげながらも喜んだ。ここで楯無が疑問を投げ掛ける。

「けど……彼のあの反応はおかしいわね。まるで織斑先生は存在していないような言い方だった」

千冬は当初、一夏が記憶喪失で自分の事を忘れていると思った。自分から確かめられたが冷静さを保てないと考えて結果が来るまで待った。

だから楯無に物を持っていかせた。もしも結果を待つことなく千冬が荷物を持っていつて尋ねたら酷く動揺している自分の姿が目に見えかぶだろう。

「そうだな。最初に会った時、それから何度か話をしたが他人行儀みたいだった。家族なのに……何故だ」

今までのやり取りを思い出した千冬は落ち込んでいた。

「今は様子を見るしかないですね……」

楯無はそう言い残して職員室から出た。千冬が誰もいない職員室で抑えていた涙を流した。

オーダー3：入学と貴族の驕り

2週間後、IS学園で入学式が予定通りに行われた。入学式に俺は参加せず、自室で待機している。

「今のところは異常無しだな」

世界初の男性IS操縦者が入学式に参加していたら確実に目立ち混乱が起きる事を危惧したが故の判断だ。

その後はこれといったトラブルもなく入学式は終わった。解散した生徒達が全員いなくなつた。予定通りに入学式が終了して全生徒が教室に入ったと報告を受けた俺はこれから授業を受けることになる教室の扉の前で山田先生の指示を待った。

教室では生徒の挨拶や自己紹介が行われているようだ。全員の自己紹介と挨拶が終わり、山田先生に呼ばれた俺は教室のドアを開けて入室、山田先生の前に立つて挨拶をする。

「私は織斑一夏と申します。年齢は20歳です。

先に申して置きますが私は織斑先生と名字が同じですが家族や親戚等ではございません。ISに関して私は未熟者でございます。ご迷惑をおかけになりますが宜しくお

願ひ申し上げます」

この教室にいる生徒に挨拶と一礼をした。正直言うと俺はこの中で立場が一番下だと考えている。

織斑と聞いたたら千冬の家族では無いかと疑う生徒がいると考えて先に無関係だと言っておいた。

一々探りを入れられても困るからだ。大抵の場合だとここで歓声が響くと予想したが俺の余りにも丁寧な挨拶にどう反応すれば良いのか戸惑いを俺は感じた。

少しすると織斑先生が教室に入ってきたので教壇前の空席に着席した。

織斑先生が教壇の前に立つと歓声上がるも彼女はそれを直ぐに黙らせた。生徒の中には彼女を崇拜する様な声を上げる者がいたが関係ない。

1限目の授業が始まった。授業内容自体は問題なく理解できた。気がかりがあるとなればこちらに対して強い戸惑いと疑いを向ける生徒がいる事を感じ取ったこと程度だ。

1限目終了後、俺は次の授業準備を開始する。先程から例の気配を感じ取っていた問題の生徒が声をかけてきた。

「ちよつと良いか？」

「私は今、次の授業の準備をしている所です。少々お待ち頂けますか」

俺に声を掛けてきたのは黒髪のポニーテールと釣り目が特徴的な女性だった。こちらは丁寧な返答をしたが彼女はそれに驚いた表情を見せる。それに構う事無く準備を終わらせ、改めて問いかける。

「お待ちせしました。用件を伺います」

そう問いかけると女性に引つ張られて教室から出て、屋上に連行された。抵抗しても良かったかもしれないが相手の出方を探るために大人しくした。

屋上に連行された俺は彼女から怒気を交えた口調で質問を投げかけられた。

「一夏、今までどこにいた!? 心配していたんだぞ!」

「恐れ入りますが私は貴女の事は存じておりません。誰かと間違えてはおりませんか。失礼ですが貴女とは初対面です」

本来なら荒い口調で返しても良いだろうがここは冷静に相手が間違っている可能性を指摘する。ここで相手を刺激するのは得策ではないからだ。こちらの予想に反して彼女は更に怒気を交えて叫ぶ。

「なっ……初対面ではない! 私はお前の幼馴染、篠ノ之箒だ! 忘れたのか!? どうなんだ!」

それを聞いて俺は少し考え込んだ後に篠ノ之に答えを述べる。

「幼馴染ですか……。申し訳ございませんが私は貴女のような幼馴染がいた記憶等は—

切無いです。

私と同姓同名の誰かと勘違いをしていると思われる。私は貴女が認識している人物ではございません。用件が以上でしたら私はこれで失礼します」

呆然としている篠ノ之にそう告げて屋上から去った。篠ノ之から独り言が聞こえたが気に留めなかった。貴重な時間を無駄にしまった。そう思いながら教室に戻って2限目にする授業内容の確認と予習を進める。

「ちよつとよろしくて」

「用件があるなら手短かにしてくれ」

そこに金髪の長いロール髪が特徴的な女性が偉そうに声をかけてきた。篠ノ之の件で腹が立っていた俺は少しぶつきら棒な返事をしてしまった。

「まあ!? 何ですその態度は!? この私が態々声をかけているのに失礼ですよ! 先程の応答をされるのが普通ではなくて!」

「これは失礼致しました。それでご用件がありましたら仰つただけですか」

この手の輩は厄介だな。貴族特有の傲慢な感じがひしひしと感じる。ヴァランタイン家の当主、セイヴィアーに近い感じだったが彼女は彼の足元にも及ばないな。

こちらの物言いに気に入らなかつたのか彼女は怒鳴ってきたが敢えて無視して授業内容の確認を進めっているとチャイムが鳴つたので彼女は捨て台詞を吐いて席に戻った。

2限目の授業が始まるチャイムが鳴り終わると共に織斑先生が教室に入り、教壇の前に立って授業を始めようとする。

「2限目の授業を始める前にクラス代表を決める。自薦、推薦は問わない。誰かやりたい者はいるか」

「どうやら授業を始める前にクラス代表を決めるようだ。クラス代表とは学級委員みたいな物でISの試合や学年会議に出席する人のようだ。」

殆どの場合は今日の授業終わりに決める事だろと俺は思った。しかし大事な役職等は早く決めるに越した事は無いなど勝手にそう解釈しておいた。すると生徒の1人が俺を推薦する。

「はい！ 私は織斑君が良いと思います！」

「私も織斑君を推薦します！」

予想通り、こちらを推薦する者が大勢いた。一見するとピンチだと思われがちだが俺はチャンスと考える。クラス代表はISを動かす機会が多くあり、生徒の会合で有力そうな情報を集める良いチャンスと思つたのだ。

これに便乗してクラス代表に立候補しようとしたが先程まで俺に絡んでいた女性がそれに異議を唱える。

「納得がいきませんわっ!!」

そう叫んだ女性は机を両手で思い切り叩いて立ち上がった。そこからイギリス代表候補生セシリア・オルコットによる俺への侮辱が始まった。俺だけが対象ならまだ良かったが残念ながら彼女の侮辱は1人に留まることなく何故か日本人や日本への侮辱に拡大していた。

オルコットの侮辱を敢えて止めなかった。何故なら平行世界から来たこちらにとつては関係が無いからだ。腕を組んでオルコットが話している事を黙って聞く。

貴族は偉そうにしている者は多いがそれ相応の実力を持ち、率先して最前線で戦っているから納得している。

「貴方、人の話を聞いていますの!?!」

「話は聞いています。一つ確認したい事があります。

貴女は何故、立候補をしなかったのですか?」

大抵の場合は自分から役職に立候補するはずですが、何故、立候補しなかったのか答えで頂けますか」

反論していなかった態度が気に入らなかつたのか俺に返事を求められたのでそう返すと共に立候補しなかつた理由を問い質す。周囲も質問内容に納得して頷いく。

その質問に答えられなかつたオルコットはヒステリックな口調で叫ぶ。

「よくも私に恥を欠かせましたわね!?! 決闘ですわ!」

オルコットから決闘を申し込まれたので敢えて渋々とした態度を見せながら口を開く。

「織斑先生、オルコットさんは私のクラス代表推薦に納得されていないようです。なので私は彼女の仰る通りにI Sの試合をしますが宜しいですか」

織斑先生にそう訊ねた。意図的に相手の要求を受け入れたのは立場が一番下であるが故の対応だ。自ら事を大きくしないように気を配った。

「良いだろう。1週間後にアリーナで織斑とオルコットによるクラス代表をかけたI Sによる試合を行い、勝者に代表をもらう」

織斑先生はそう告げてクラス代表の決定を保留した。俺からすればI Sのデータを収集できる絶好のチャンスだ。そして残りの授業を受けたが問題は特に無かった。

代表決定戦迄の1週間、オルコットのI Sに関する情報収集と対策に時間を費やす。使える手段は全て使って勝つ。そうして1週間を過ごした。

入学式を終えた日の放課後、千冬は寮長室で箒に一夏の事について話をしていた。「千冬さん、一夏に何があったのですか!？」

箒はそう叫びながら千冬に問い質した。彼女にとって一夏は大切な幼馴染だという

のに記憶にすらないと彼の口から直々にそう言われたのだ。

「分からん。DNA鑑定を見ても一夏は私の弟だ。けど一夏は私を赤の他人としか思っていない……。記憶喪失だと判断して様子を見ているが……」

私がああの時、一夏をドイツに連れていかなければこんなことには……」

「そんな……」

千冬からそう言われた筈は膝から崩れ落ちて酷く落ち込んだ。織斑一夏は中学生の時に開催されたISの世界大会モンド・グロッソの開催地であるドイツに連れていったら誘拐されていた。決勝戦開始間際に知った彼女は決勝戦を放棄して彼を助けに向かった。この時、ドイツ軍が何故か彼が誘拐された場所を知っていた。

彼女は一夏が誘拐された場所に到着するも一夏の姿は見当たらない。周辺を必死に探すも結局、発見できずに捜索は打ち切られた。

それから数年後に一夏に極めて似た人物がIS学園の格納庫で発見、千冬は対面した。

当初は行方不明の年数と発見時の年齢的な外見が釣り合わなかったので確信が持てなかった。そこで血液検査と併せて密かにDNA鑑定をした。結果は血縁者だったが一夏の反応を見ると彼女達の事を赤の他人としか見ていないのだ。

事の経緯を涙を堪えながら話した千冬は箒に告げる。

「今は私も様子を見るしかないんだ。分かったら自室に戻れ」

千冬は酷く落ち込んでいる箒にそう告げて部屋から出させた。部屋から出て寮の自室に戻った箒は涙を流した。部屋に誰もいないのが幸이었다。

一夏はそれに気づく事もなく、黙々とやるべき事を進めていた……。

オーダー4：試合

クラス代表決定戦当日、俺はアリーナの簡易ハンガーで黒鷲の最終確認をする。

「全システムと武装を確認、問題なし」

システムと武装の確認を終えて直ぐに黒鷲を纏った。普段と同じ感覚で安心感を覚えた俺は追加した武装に目をやる。

「銃火器は兎も角、近接武器は投げることに使えそうだから持っていつても損は無さそうだ」

パイロンに打鉄の日本刀型の近接ブレード『葵』を格納して試合に挑む。武装は突撃銃と盾、ブレードの4つだ。ISの武装がアーセナルでも使用できるか確認も兼ねている。

「イーグル、準備できました」

そう告げてアリーナのカタパルトデッキに黒鷲を固定させると直ぐに射出された。空に飛び出した俺は既に待機していたオルコットと対峙する。

「逃げずによく来ましたわね。その度胸は誉めて差し上げますわ!」

オルコットは挑発するがのるつもりはないので無視して相手の情報を再度確認する。

その反応が気に入らなかつたのか怒気を交えて捲し立てる。

「無視とは無礼ですわね！ 私が一方的な勝利を得るのは当たり前のこと。ですから、惨めな姿をここで晒したくなくれば、今ここで謝るといふなら許してあげないこともなくつてよ」

オルコットの挑発を無視して専用機の情報や脳内でまとめてデータの測定内容と実行を照らし合わせる。

ブルーティアーズ、6つのビットとレーザーライフルが主力武器だな。格闘武器の短剣もあるがほぼ飾りに近いと判断する。

「イーグル、これよりオーダーを開始する！」

試合開始を告げるブザーと共にオルコットはレーザーライフルのトリガーを引いた。銃口から青色の光線が発射されるが俺は体を反らして難なく回避する。

「今のはまぐれですわ！ 次こそ当てますわ!!」

オルコットはそう叫びながらレーザーを連射するが全て回避する。弾その物は速いが狙いが分かっており容易に回避可能でフェイント等といったテクニックを使っていないので尚更簡単だ。

回避し続ける俺に苛々を募らせたオルコットは御得意のビットをスカートアーマーから4つ射出する。

「この私のブルーティアーズで円舞曲ワルツを踊りなさい！」

オルコットはそう宣言して4つのビットによる攻撃を開始する。4つのビットは死角に配置されると同時にレーザーで砲撃を開始する。

次々と発射されるレーザーの嵐を回避、左手に持った盾で防御するが背部からの攻撃に対応できずダメージを受けた。

ここでオルコットからの砲撃を警戒したが何故か彼女は狙撃をしてこない。棒立ちしたままビットの制御に集中しているようだ。

それを見た俺は彼女がビットの制御と狙撃が同時に出来ないと判断した。

「オーダーを続行する」

そう呟いた右手に持ったアサルトライフルをライトパイロンに格納している太刀に持ち変えてビットの砲撃が終わるまで耐え凌ぐ。左手の盾で防御と回避を続けていくがオルサの性能が低くて被弾が増え始める。

オルコットは俺が被弾している姿に笑みを浮かべているように見えたが構う事無くチャンスを待つ。4つビットの砲撃が終わった瞬間を見て行動を開始する。

「そこだ！」

一瞬のチャンスを見つけて太刀でビットに斬りかかる。俺が振り下ろした太刀はビットを真つ二つに切り裂くと共に爆発した。そこから近くのビットに突進して横一

閃に太刀を振ってまた破壊する。更に近くのビットへ近づいて縦一閃に太刀を振り下ろして両断、その残骸が地面に落下した。

「くっ!?!」

オルコットは残ったビットの1つを破壊される前に慌てて戻した。近接ブレードの形状が太刀に酷似しているならそれに分類される事が分かった。太刀の攻撃は出が早く、近くに別の敵がいたら続けて攻撃が可能な近接武器である。近くの雑魚を一掃したり素早く攻撃したい時に活用できる武器だ。

「今だー!」

俺はオルコットがビットを戻した瞬間に背中中のブースターの出力を上げて突進、その勢いを利用して斬りかかろうとする。それをみたオルコットは口角を斜め上に動かして宣告する。

「お生憎様、ブルーティアーズは6つありましてよ!」

2つのミサイルがスカートアーマーから射出された。罠に掛かったとオルコットは認識しているようだが残りの2つがミサイルという事は既に知っていた。

迫りくるミサイルに対して左手に持っていた盾を投げつけるとミサイルが激突、同時に爆発と煙が生じた。

「仕留めましたわ! ……なっ!?!」

オルコットが堂々と宣言した瞬間、左のスカートアーマーにブレードが刺さった。ミサイルが迫っていた時、俺は盾を投げて直ぐに右手のブレードも投げつけてそれが突き刺さったのだ。オルコットは酷く動揺しているようだが隙だらけだ。

右手に突撃銃、左手に太刀を持って黒鷲のブーストの出力を最大にして追撃を仕掛ける。右手の突撃銃で牽制しながら接近、太刀を縦一文字で振り下ろしてオルコットのシールドエネルギーを削り取る。

「もう許しませんわ！ ティアーズ!!」

俺の攻撃で正気を取り戻したオルコットはそう叫びながら残った一つのティアーズと右スカートアーマーのミサイル射出、撃ち落とそうとする。

俺は咄嗟に粒子兵装フェムトを通常からシールドシフトに切り替えて防御する。

そこからアサルトシフトに切り替えて突撃銃を連射してミサイルビットを破壊、飛び回るビットを太刀で両断した。アーセナルはフェムトの配分を変える事で攻撃と防御、機動力が一時的に強化されるのだ。

アサルトシフトは攻撃、シールドシフトはバリアによる防御、ウイングシフトは機動力をそれぞれ強化させることが可能でそれらを駆使して戦っている。

オルコットに残された武器はレーザーライフルのみだ。彼女は後退しながらレーザーを放つが俺は軽々と回避する。

「この私が…。代表候補生の私が…！」

オルコットが恨めしそうに何かを呟いているがアサルトシフトから機動力を強化するウイングシフトに変えて彼女との間合いを詰める。

「速い!？」

急接近してきた俺にオルコットは驚き声をあげる。間合いを詰めた勢いを利用してすれ違う瞬間に横薙ぎに太刀を振った。彼女は咄嗟にライフルを盾代わりにして何とか防いだがライフルに深い斬り傷が刻み込まれた。

「そこですわー！」

オルコットはそう叫びながらライフルを構え、背中を晒している俺に狙撃をする。ウイングシフトからシールドシフトに変えてレーザーをバリアで防いだ。その瞬間、オルコットのライフルがスパークを起こして壊れた。どうやら先の一撃が効いたようだ。

アサルトシフトに切り替えて残っている突撃銃の弾を全て彼女に浴びせようとした。しかし半分がかわされた。オルコットは予備のレーザーライフルを出して撃とうとした。

「させるかー！」

俺は彼女がライフルを展開する寸前、弾切れになった突撃銃を奴に向けて勢いよく投げつけた。投げた突撃銃はオルコットが展開したライフルに直撃、銃口が逸れてレ-

ザーは当たらなかつた。その間に俺はウイングシフトに変更して彼女に再び接近して太刀の横一閃を浴びせた。

この一撃が決定打となりオルコットのシールドエネルギーは尽きて試合終了のブザーがアリーナに響いた。

『勝者、織斑一夏!!』

アリーナから歓声が沸きあがるが気にせずにピットに戻って黒鷲を解除した。戻った俺は織斑先生と山田先生に声をかける。

「オーダーは達成しました。私がクラス代表になりますますが宜しいですね」

「あ、ああつ…それで良い」

「はい！ 織斑君、お疲れ様です」

要件を満たしてクラス代表の就任の同意を確認した。2人はそれに同意して山田先生は労りの声をかけてくれた。

「山田先生、ありがとうございます。今回の稼働データについては私でまとめて提出します。月曜日の授業も宜しく願います。私はこれで失礼します」

俺は山田先生にそう告げてアリーナから去った。黒鷲に關しては事前に情報はこちらで開示できる物はした上でその情報範囲内の能力を活かして戦った。

支給されたばかりの機体の低い性能でここまで戦えたのは良しだ。しかし機体の性

能頼みで戦っていた事を痛感する。

こちらも腕も上げないと厳しくなるなど思いつつ今日得られたデータを自室でまとめた。

「これは……」

稼働データを分析、纏めていた俺は機体からの知らせがある事に気づいた。それを確認すると新たな武装のデータが表示されていた。

シオルダーウエポンのミサイル『サンダーバード』、近接武器のブレード『バスタードウム』が追加された。更に他の情報を確認すると頭部のパーツにレギオンが追加されていた。

「どうやら戦っていく毎に俺が収集した機体の武装やパーツが解禁されるのか」

そんな仮説を考えて今後、積極的に模擬戦等をやっつていこうと思った。早く機体のデータを解禁して本来の姿に戻したい。

オーダー5：決定と実践

試合が行われた日の夜、千冬は寮長室で今日の試合内容について考えていた。

（二夏が使っていたアーセナル……。性能を一時的に変えられる能力があるのか。

しかしこれが単一仕様能力では無い事が気になるな。提出された資料を見るとこれがアーセナルの特徴と書かれているが……）

試合記録の映像を見ながら彼女はそう思案する。ISは単一仕様能力という形態移行と共に発現する機能がある。それは基本的に第二形態から発現する事例が多い。

しかし彼女が使っていた黒鷲はそれらしき機能が備わっていないのだ。資料を内容と実際にその機能を目にするのでは感覚が異なると彼女は解釈した。

更に資料を詳しく目を通していくとISなら必ず備わっているコア等が全く無いのだ。シールドバリアーや絶対防御、イグニッションフェースト瞬時加速、武器を量子化させて保存できる特殊なデータ領域である『拡張領域』等の機能が存在しない。

シールドバリアーはシールドシフト、瞬時加速はウイングシフトと彼女は勝手に認識していたのだ。無論、ISと同等の反応が待機状態から最初の段階で発せられていたの

で詳細な事は見ていなかった。

千冬はここにきて漸く、一夏がISとは全く異なる物を扱っている事を実感したのだ。因みに山田先生は一夏がISに酷似した何かを使っていると認識、資料を詳細に見ていたのだ。殆ど動揺は無かったようだ。

彼女は行方不明だった実の弟がISらしき物を使っていることに囚われていた事とIS反応が発せられた事がここまで動揺を見せた要因だった。

「……もう少し様子を見るか」

千冬はそう呟きながら再生されていた映像を閉じた。

同時刻、自室にいるオルコットは一夏に敗北したことで自分の過ちを悔いていた。

彼女はクラス代表を決める話し合いの際に一夏だけでなく日本人、日本という国そのものを蔑む様な事を感情任せに言ってしまったのだ。あれだけの大口を叩いたにも関わらず試合は敗北という結果を突き付けられた。

(クラスの皆に謝らないといけませんわ。最悪、無視されることも覚悟しなければなりませんわね……)

オルコットは心の中でそう呟いた。彼女は幼少期に両親を亡くし、彼等が残した財産を汚い大人達から守る為に必死に努力を重ねて代表候補生になったのだ。その腕を磨

くためにI S学園に来たのだが男という理由だけでそこにいる彼が目付いた。そんな彼に試合前に度々つかかって自分が如何に凄いと豪語してきたのか……考えただけで彼女は醜い嫉妬を晒した事を後悔するが手遅れだった。本国にこの事が知られたらどうなるか分かったものではない。

恐怖に支配されていた彼女は殆ど眠れなかった。

月曜日、山田先生が入室してS H Rが始まった。

「クラス代表は織斑一夏さんに決まりました。織斑君、宜しくお願います」

山田先生は教壇の前に立つてそう告げると一夏は立つて挨拶をする。

「この度、クラス代表を務める事になりました。皆様の期待に応えられるように精進していきます。」

この場で急ではございますがクラス副代表を決めたいですが宜しいですか」

一夏が挨拶と共にそう言うのと教室は騒がしくなるがそれに構う事無く彼は口を開く。

「クラス副代表をオルコットさんに務めて頂きたいです。理由は私的な都合で学会議等に出席できない可能性があります。その時に副代表に出席して頂きたいですが：オルコットさんは宜しいですか。無理等は申しません。副代表は私の勝手な任命なので断つて頂いても大丈夫です」

彼はオルコットを見ながら提案をする。彼の狙いはデータ収集等の都合で会議に出

席できないことを考慮して独断ではあるが副代表に任命したのだ。仮に断られたとしてもこちらの勝手な提案という形で流れるので大きな問題は無い。

クラスの副代表に任命（仮）された彼女はチャンスと言わんばかりに勢いよく起立して口を開いた。

「私、セシリア・オルコットはクラス副代表を御受けいたします。先週、織斑さん並びに日本に対して侮辱をしてしまった事にお詫びを申し上げます」

オルコットはそう言った後に深く一礼して謝罪をした。それを見た一夏は副代表を務めてくれてありがとうという意味を込めて拍手を送った。クラスメイト達も謝罪の受け入れと副代表任命を祝す意味を込めて彼に続いて拍手を送った。

クラス代表と副代表が決まった後、一夏達は外で授業を受ける事になった。専用機を持つている一夏とオルコットが前に出てクラスメイトの前で実践をするようだ。

「オルコットはブルーティアーズ、織斑は黒鷲を展開しろ」

前に出たオルコットと織斑は其々が持っている機体を千冬の指示通りに展開するが一夏の方が僅差だが速かった。彼女はそれに少し驚きながらもその場で上昇するように指示を出した。

一夏とオルコットは同時に上昇するがブルーティアーズの方が上昇速度が速かった。一夏は粒子兵装をウイングシフトに変更して上昇を再度行った。先程よりも速くは

なったがそれでもブルーティアーズには及ばなかった。

「ではそこから地上から10cmの所まで急降下して停止だ」

指示を受けたオルコットは指示通りに地上から10cm地点で止まった。続いて一夏もオルコットと同様に急降下、10cmの所で停止させた。これには周囲も驚きを見せるが一夏はそれを構う事は無く次の指示を千冬に仰いだ。

「次は武装の展開だ」

彼女はそう指示するとオルコットは構えをすると共にレーザーライフルが展開された。その後、近接武器のナイフ『インターセプター』は名前を言わないと展開できなかった。

それに対して一夏はアーセナルの性質上、武器展開は出来なかったが格納している武器を瞬時に交換、粒子兵装の変更をいつも通りにやった。

「織斑に関しては仕様だから仕方ないが……。オルコット、お前は実戦でそんな展開をするのか？ 間合いを詰められたら終わりだぞ」

「じ、実戦では間合いに入る前に撃ち落としますわ！」

「ふむ、相手を侮った事を加味しても間合いに入った相手を落とせなかったのは誰なのかな」

千冬はそう言ってオルコットを睨んだ。オルコットは千冬の正論に言葉を詰まらせ

てしまった。そうして授業は終わった。

その日の放課後にクラス代表と副代表就任のパーティーが開かれた。主役の一夏とオルコットは当然ながら出席している。

「みなさん、私のクラス代表就任の祝賀パーティーを開催していただきありがとうございます。クラス代表として優勝を目指します。それでは乾杯！」

一夏は爽やかな笑顔を見せながら挨拶をして乾杯の音頭を取った。クラス一同が祝ってくれているので彼は大いに楽しんでいた。そこにIS学園の新聞部の取材が入った。

「新聞部の薫子です！ 織斑君、クラス代表就任の一言をお願いします！」

「クラス代表として恥じぬよう全力を尽くします！」

一夏は取材にそう答えた後、クラス代表と副代表で記念写真を撮ったがそこに皆が入ってきたが彼は特に気にしなかった。

パーティーが終わった日の夜、一夏は自室のPCで黒鷲の解析を進めていた。今回の稼働データに収穫があるか確認をしたが特に無かった。

授業等で軽く動かすだけではデータが解禁されない事が判明したのだ。

「やはりあの程度の稼働データだけでは駄目か……。模擬戦等で武器を扱わないと解禁さ

れないのか」

「画面を見ながら一夏はそう呟いた。現にオルコットとの代表決定戦ではデータが解放されたがこの日は何も変化が無かったのだ。

（明日は武器を使った訓練を試してみるか）

彼はそう考えながらベッドに入り、眠りについた。

オーダー6：転校生とクラス代表戦

祝賀パーティーから数日後、教室では中国から転校生が来る噂が広まっていた。

「今日、2組に転校生が来るんだって！」

「中国っていう事は代表候補生かな？」

「大丈夫よ！ 専用機持ちは1組と4組だけだから一組で優勝は決まりね！」

俺はこの時期に来る転校生に対して警戒心を抱く。男性IS操縦者のデータ狙いという可能性がある。特に中国からというのも気にかかるところだ。そこに誰かが教室の入口から姿を現した。

「その情報古いよ！」

背の低い少女がそう宣言した。恐らく彼女が噂の転校生だと推測を立てた。

「2組の代表も専用機持ちになったから簡単に優勝はさせないわ！ 久しぶりね、一夏！」

「恐れ入りますが私の事を知っておられますか。申し訳ありませんが貴女が認識している一夏ではございません。私は貴女と初対面です」

推測は当たっており、俺の名を口にした。残念ながらあの少女に関する記憶等は一切

無いので俺はそう返した。それに反応した少女は口を開けて呆然としていると後ろにいた織斑先生が出席簿を振り下ろして彼女を退かせた後、S H Rが行われた。

授業後の昼休み、学園の食堂に赴くと2組の専用機持ちの少女が何故かラーメンが入っている丼をトレーを持ち立っていた。

「待つてたわよ、一夏!」

「先程も申し上げましたが貴女の事は一切記憶にございません。

それと待ち合わせをした約束は一切しておりません。約束されるのでしたら事前に報告をお願いします」

俺は少女から発せられた言葉に対してそう返した。それを聞いた少女は唾然としていたが俺はそれを無視して券売機で今日食べる料理の券を購入、空いている席に座って注文した料理を食べる。今日は豚の生姜焼き定食だ。定食は栄養バランスが良いから俺は好んでいる。すると隣に先程の少女が座ってきた。

「本当にあたしの事を覚えていないの!?! 鳳鈴音よ!!」

「何度も申し上げますが私の知り合いに貴女の名前はありません。私は確かに貴女が認識している織斑一夏と全く同じ名前ですが違います」

俺は彼女の質問にそう返してから定食を軽く平らげた。鈴音はそれを聞いてまた唾然としているが俺は気にせずトレーを片付けて食堂を後にした。午後からの授業は全

て座学だったので全て問題なくこなした。

放課後、俺はアリーナに赴いて黒鷲の鍛錬を行う。こいつは稼働データが多いほど、データ解禁が早くなると結論を出してそれを実証させるためにやっている。今日は射撃と解禁されたブレードのテストだな。

俺は映し出された標的に突撃銃の弾丸を難なく撃ちこみ、近接武器で次々と真つ二つに切り裂いていく。更に解禁されたミサイルの性能を確かめる為に一辺に映った標的に狙いを定め、ミサイルを発射した。

ミサイルは俺がロックオンした通りに全弾命中した。ミサイルの性能を確認して問題は無いと判断した俺は武器を持ち替えて射撃、ブレードを振り回した。

自分が考えた練習計画を終えた俺は着替えて自室に戻り、今日の稼働データを黒鷲にPCを接続して表示されたモニターで確認した。

すると胴体パーツのデータが1つ解禁された。見るとそれはレギオンだったので直ぐにオルサと入れ替えた。これで解禁されたデータが1つだけならまだまだ時間が掛かりそうだと痛感した。戦闘が無いとデータ解禁が困難だなど思いながら俺はシャワーを浴びて着替え、眠りについた。

一夏が訓練をしていた頃、鈴音は職員室に千冬に一夏の件を問い詰めていた。自分

の事を全く覚えていない上に口調が不気味な程に丁寧になっていた事である。それを聞いた千冬は鈴音の質問に答える。

「一夏がああなったのは私のせいだ。私がモンドグロツソ決勝戦に出ようとした時、一夏は誘拐された。私は決勝戦を放棄してあいつを助けに行った。けど一夏はどこにもいなくて周辺を捜したが見つからなかった。それからここであいつを見つけたが私の事を一切覚えていなかった。DNA鑑定をしたら私の弟だと分かったが一夏は何一つ記憶ないと断言した」

千冬は鈴音にそう語った。即ち、一夏は自分たちの事を忘れたとすら認識していないのだ。それを聞いた鈴音は驚いていたが同時にあの反応を示した理由に内心、納得していた。その後、鈴音は職員室から去った。

クラス代表戦当日、俺は装備を整えて鈴が待っているアリーナのフィールドに飛び出した。

（成程、主力武器は連結分離できる青龍刀の双天牙月と背中に浮いている衝撃砲の龍咆…。近接戦闘はここぞという時にするのが最善だな）

俺は鈴音が使うIS『甲龍』のデータを確認、そう判断した。今の俺はデータ解禁が

不十分で鈴に対抗できる武器が殆どないのだ。今回使う武装は突撃銃と盾と肩のミサイル、パイロンに格納している近接ブレードと太刀である。自分の使える武器を確認した俺は深呼吸をして鈴と対峙した。

(今の自分が出せる全力を出し切るだけだ!!)

「二夏、手加減は無しだからね!」

「了解した。イーグル、これよりオーダーを開始する!」

試合の開始を告げるブザーが響くと同時に鈴が俺に接近して双天牙月を勢いよく振り下ろしてきた。俺は後方にブーストを掛けて後退、同時に突撃銃で反撃を行う。鈴は左へ滑るように回避すると同時に彼女から視線を感じ取った。俺は咄嗟に左手に持った盾を前に構えると突然、衝撃が走った。

「これは…衝撃砲?!」

見えない弾丸の衝撃に俺は戸惑っていると鈴は味を占めたのか連射を始めた。左手に衝撃が走っておりこのままでは盾が壊れてしまう。そう判断した俺は左に滑るよう移動しながら鈴に狙いを定めてミサイルを8つ発射する。

「二夏、甘いわ!」

鈴はそう叫んで龍咆で4つミサイルを破壊、残りは双天牙月を回転させて防いだ。ミサイルの爆風で煙が起きると共に砲撃が止まった。俺はその隙に左手の盾を近接武器

に持ち替えた。更にウイングシフトで鈴に接近、そこからアサルトシフトに切り替えて彼女に近接戦闘を敢えて仕掛けた。

俺は加速した勢いを利用して左手に持ったブレードで鈴音に斬りかかった。

「えっ!? 速い!」

鈴は双天牙月で咄嗟に防いだがそのまま鏢競り合いに持ち込んだ。俺は左手に持ったブレードに力を込めて鈴を突き飛ばし、競り勝った。

近接戦闘では武器を繰り出すタイミングによつては鏢競り合いが発生する。これに競り勝つことで相手にダメージを与えた上で後方に弾き飛ばせるから俺はそれを狙い敢えて近接戦闘を仕掛けた。

そこから右手に持った突撃銃を連射、弾丸の雨を鈴音に浴びせた。鈴音のシールドエネルギーを確実に削り取っている事を実感する。

「調子に乗るんじゃないわよ!」

鈴音はそう言いながら龍砲で俺に反撃をする。しかし俺は鈴音の視線から外れるように移動して回避する。

彼女は龍砲を使う際に視線を攻撃対象に向ける癖がある事を俺は見抜いた。これなら相手の攻撃が見えなくても回避できるので滑るように移動して突撃銃で応戦、鈴音に攻撃を当ててシールドエネルギーを削る。

「そろそろケリをつける！」

俺はそう宣言して跳躍、落下とブーストした勢いを利用して鈴音に近接戦闘を仕掛けた。そうと勝負をかけた。

その瞬間、俺と鈴の間にアリーナのシールドを貫通したレーザーが地面に打ち抜かれた。その後、黒い何かが地面に衝突して大きな土煙を巻き上げた。

「何だ……」

「何なのよ一体、あたし達が戦っているのにどういうつもり!？」

土煙が晴れると共に落下物が黒い人型ロボットであることが判明した。そいつは右腕が切断されており、体の関節部分から火花が飛び散っている事が分かる。そのロボットは何故か俺達を無視してアリーナの中央に移動をする。まるで何から逃げるみたいだ。

そこにボロボロを纏い両手に2本の小ぶりの刀とパイロンに大振りの刀が2本、合計4本の刀を持った半壊している様に見えるロボットが突然姿を現した。そいつは姿が消えると同時にアリーナ中央に移動していた黒いロボットの前に出現する。

黒いロボットは反撃を試みた。しかしその前に半壊しているロボは右手に持った刀の横一闪の斬撃で黒いロボットの左腕を斬り落とした。

奴は次に左手の刀で黒いロボットの顔面に突き刺し、そのまま勢いよく振り下ろし

た。更にそいつは黒いロボットの腰部を両手に持った刀をX字の描くように振り下ろした。

黒いロボットはバラバラに解体されると共にその残骸が地面に崩れ落ちた。

「こいつは……まさか!？」

俺はあの太刀筋を見て震えた。奴はオーヴァーリンクで語り継がれている幻の存在、

ソロモン
亡霊だ!

オーダー7：ソロモン

黒い人型ロボットをバラバラに破壊したソロモンは標的を俺達に変える。

バラバラになった黒い人型ロボットは残骸をよく見ると人が装着していない無人機である事が分かった。奴の近くに散らばっている機械部品がそれを証明している。

「ソロモン……何故ここに!？」

俺は驚愕する。奴とは嘗て1度だけ戦った事がある。あの時はジョニーさんとリグレットさん、俺の3人がかりでかつ准将とグリーフの救援が来たので何とかなつた相手だ。

黒鷲が本来の姿であれば辛うじてではあるが善戦はできるかもしれない。しかし今の俺の機体は事実上弱体化しているので何処までこの場を持たせられるかどうか分からない。

『織斑君、鳳さん、直ちに避難してください!!』

「山田先生、申し訳ありませんがアレはヤバイ代物です! 私達が逃げたらどうするつもりですか?」

教員の部隊が到着するまで私が時間を稼ぎます!」

幸いにも戦線からの離脱は容易だ。観客席を確認すると人が滞りなく減っている事が分かる。もしもセキュリティがハッキングされて非常口が閉ざされていたら大変な事になっていただろう。

奴に勝てないが時間稼ぎくらいはできると思い対峙する。

「鳳さん、今すぐここから離脱しろ！ こいつはかなり危険な奴だ!!」

「二夏、何言ってるの!? 私も戦うわ!」

鈴音にそう忠告するも彼女は戦おうとする。それを見たソロモンは戦闘態勢に入った。

《汝…ワレニ…チカラヲ…ミセロ!》

ソロモンはいきなり目の前に現れると同時に右手に持った太刀で斬りかかってきた。左手に持ったブレードで咄嗟に防ごうとしたがその勢いが強すぎてアリーナの壁に叩きつけられた。背中に叩きつけられた衝撃が全身に襲い掛かるも俺は何とか堪える。

「二夏! このっ!!」

鈴音は怒りを露わにしながら龍咆で攻撃をするが奴は刀で全て切り伏せる。ソロモンは瞬間移動の如く彼女に接近して両手の刀を振り下ろす。鈴音は分離させた双天牙月が刀を防御したが押されていた。

「きやあっ!?!」

《タリン……ソノテイド……》

鈴音はソロモンの攻撃を受けきれずに吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。鈴音のエネルギーは少ないと考えた俺は少しでも時間を稼ぐために注意をこちらに向ける。改めて確認すると鈴音は意識こそ失ってはいるが今の一撃でエネルギーの殆どを削られたように見えた。

突撃銃の引き金を引いて弾丸を3発撃つて、ソロモンを牽制する。それに気づいた奴は狙いを変えて瞬間移動で接近してきたがあの時と速さは同じだ。

「くっ!？」

左手に持ったブレードでソロモンの斬撃を受け止めて鏢競り合いに持ち込んだ。

しかし奴の力の方が圧倒しており俺は競り負けてしまい攻撃を受けた上に弾き飛ばされてしまった。

黒鷲の耐久値を確認すると半分になっていた。このまま真面に戦っていたら不味い……。

《ホンキヲ……ミセロ……》

奴は瞬間移動をしながらこちらに攻撃を繰り返している。

突撃銃で応戦するもソロモンは銃撃を刀で斬りおとして瞬間移動で再び接近する。

近距離は奴の領域で勝ち目はないがあれをやるしかない!!

「この距離なら……どうだ！」

捨て身の覚悟で刀を振り下ろそうとしたソロモンに突撃銃の弾と肩のミサイルを全弾、撃ちこんだ。更にその直前にアサルトシフトに切り替えたので現状で繰り出せる最大の火力を奴にお見舞いしてやった。爆風と衝撃を至近距離で受けた黒鷲は右腕と胴体をひどく損傷してしまった。

ミサイルで生じた爆発の煙が晴れると多少のダメージを受けた程度のソロモンが目の前に立っていた。そいつは左手に持った刀を横一閃で薙ぎ払うが咄嗟にシールドシフトに切り替えて攻撃を防いだ。

「があっ!？」

バリアで防いだにも関わらず攻撃はかなり重かった。バリアは一撃で粉々に砕け散り、アリーナの中央に弾き飛ばされてしまった。辛うじて受け身を取ることができたが黒鷲の耐久値は10%以下だ。奴は向かって徐々に近づく。

「いつ………「夏!？」

鈴音はボロボロになった俺を見て悲鳴に近い叫びをあげた。鈴音は体を何とか動かそうとするが機体の損傷が酷く、身動きをとることすら困難なようだ。教員部隊の到着はまだなのか……。

「くそっ………ここで終わりなのか……」

そう覚悟したがソロモンは何故か無人機の残骸に近づいてそれを回収、体内に取り込んだ。奴はそれが終わると直ぐに瞬間移動の様な速さでその場から姿を消した。

力を振り絞って立ち上がった俺は奴の奇襲攻撃を警戒するがそれつきり姿を見せる事は無かった。その後には教員部隊が到着するも既に戦いは終わっていた。レーザーで敵影を確認するも全く見られなかったのだ。

「あいつ……何処に消えた……」

静寂に包まれたアリーナで俺はそう呟いた。

ソロモンとの戦闘後、俺と鈴音はアリーナの管制室で織斑先生と山田先生からの事情聴取を受けていた。内容は乱入してきた無人機の事とそれを一瞬で破壊した謎のロボットの件だった。

無人機の残骸はソロモンに全て持っていかれてしまったので解析しようが無いとの事だった。

「織斑、無人機を回収した奴の事をソロモンと称していたがどういう事だ……？ 説明しろ」

「大変恐れ入りますがソロモンの事については我々の機密事項に触れるのでお話できません。その話を聞きたいのであれば山田先生と鳳さんを退室、その情報を誰にも話さ

ない事を約束していただけたら話すことができます」

織斑先生にソロモンの事について問い質された。この質問は必ずすると予想していたので山田先生と鈴音の退室と他言無用を条件として奴話をする^{と交渉を試みた}。

「ちよつと一夏！ あいつの事を知っているんでしょ!? アタシにも話すのが筋でしょ!?」

「良いだろう。鳳、山田先生済まないが席を外してもらえないか」

織斑先生は俺の条件を受け入れたが鈴音は納得できないと俺にそう訴える。しかし山田先生により管制室から出て行った。それを確認した俺は織斑先生にソロモンについて語る。

「今から申し上げる事は絶対に口外しないようお願いします。

ソロモン……私がいた世界では亡霊と呼ばれている謎の存在です。

あれは第一世代アーセナルの試験機、^{アーチトゥエルブ}始まりの十二騎と呼ばれる内の一機です。奴は戦場に突然、姿を現しては無差別に破壊する存在です。

そいつは破壊した物を捕食します。最初に乱入した無人機はソロモンが捕食したのでも残っていないのがその証拠です。私は奴と一度だけ遭遇して戦いました。あの時は仲間が救援を要請したおかげで何とかかなりましたが……。次に奴が襲撃したらどうなるか……分らないです」

俺は記録された映像を改めて見ながらそう説明する。それを聞いた織斑先生は納得していない表情を見せていた。

「情報はそれだけか……？　他にはないのか!？」

「残念ながらソロモンについて私が知っている事はこれが全てです。これ以上は何も知りません」

織斑先生にそう問われたがこれ以上は何も知らないと断言した。俺が嘘をついていないと判断した織斑先生は自室に戻って休めという指示を出したのでそれに従い、自室に戻った。

それから今回の稼働データを確認すると今までよりも多くのパーツと武装データが解禁された。ソロモンとの戦闘が要因だと思うと皮肉な事だと感じた。

(このデータ量なら俺が得意な戦闘スタイルができるかもしれない！)

そう考えて機体と武装の組み合わせを夢中で行った。作業を終える頃には朝日が昇っていたがその日は休みだった事は幸いだった。

一方、何処かの研究室では無人機とソロモンの戦闘記録を見ている者がいた。

「何なのこいつ、いっくんの力を測るために送ったのに平気で壊して取り込んだ……。」

こんなボロツちいロボットに負けるなんてありえない！ しかもあいつ全く本気だしてなかった様に見えるから東ねさん激オコだぞー!!」

不思議の国のアリスに出てくる少女、アリスに酷似した服を着ており、頭に兔耳の力チューシャを付けている女性は激しい憤りを見せていた。自身が作った傑作を壊れかけに見えるロボットに破壊、取り込まれた光景に怒っているようだ。

「こいつ何ものなんだろう……？ 東さんも分からない……不気味ね〜」

女性は映像を見ながらそう呟いた。

オーダー8：2人の転校生

ソロモンとの戦闘から数週間後、ある日の夜に転入生が来るのでこの部屋を2人部屋にしたいと山田先生から相談があったので俺は快く応じた。

(何かあるな……)

ベッドや机を部屋に運ぶ作業を手伝いながら俺はそう思った。作業後、俺はパソコンに細工を施して黒鷲のデータを他者から閲覧不可に改めて設定をしておいた。

翌日、1組に転校生が2人やつて来た。1人目は中世的な顔立ちと金髪が特徴的な少年？、2人目は片目に黒い眼帯、長い銀髪と身長が低い少女である。特に銀髪の少女は軍人特有の威圧感を放っているようだ。

(この時期の転校生は諜報員と考えた方が良さそうだな)

俺は2人の転校生を見て警戒をする。特に銀髪は要警戒だな……こつちを睨み付けているけど俺が何をしたんだ。金髪の男性が山田先生の指示で自己紹介をするようだ。

「フランスから来ましたシャルル・デュノアです、宜しくお願いします。」

同じ境遇の方が此処に居るといふ事なので、僕も転校して来ることになりました」

ふむ……。俺の世界では外科手術がここよりもかなり発達しているので性転換は容易だ。しかしこの世界ではそこまでの技術は確立していないはずだ。体形である程度は誤魔化せているが……決定的な証拠が無いから様子見だな。

教室で叫びが響くが戦場ではこの程度、日常茶飯事なので問題は無い。次は銀髪の軍人らしき少女が挨拶をするようだ。

「ボーデヴィツヒ、自己紹介をしろ」

「はい、教官！」

「私はもうお前の教官ではない。ここでは織斑先生と呼べ」

やはり軍人だったか。織斑先生を教官と呼んでいる光景を見て確信した。

この声……リジツトさんに似ているが気のせいか……。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

名前だけの簡素な自己紹介にクラス中が困惑する。しかし奴はそれに構わず目を閉じてクラスメートと視線を合わせる気は無いという態度を貫く。第一印象最悪だが大丈夫なのかと俺は思った。

ふと目を開けたとき、俺と目が合った。織斑先生と似た目元から間違はなく織斑先生の弟、織斑一夏だと確信したのか真直ぐに俺の前まで歩いて来た。残念ながら他人の空似だ。

「貴様が織斑一夏だな？」

「合っています。しかし最初に申し上げておきますが私は織斑先生の弟ではございません。名字は同じですが赤の他人です。その点は勘違いしないように宜しくお願い申し上げます」

彼女に問いかけられたが俺は牽制の意味も込めて織斑先生とは無関係な人間であると告げた。

「そうか……」

俺の発言を聞いた彼女はそのまま後ろの席についた。デュノアもそれに続いて空いている後ろの席に座り、HRが進んだ。

「1時限目は2組と合同でISの実習だ。着替えてグラウンドに集合しろ！」
「織斑、デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だら」

織斑先生からそう指示を受けた俺はデュノアに軽く挨拶をして更衣室に案内をする。その途中で女子の軍勢が追ってきたが俺はアーセナルの訓練で鍛えた身体能力を最大限に活かして突破した。この状況にデュノアから困惑を感じ取った。何かあると俺は移動中ながらも考える。

更衣室に到着した俺は直ぐに制服を脱いでアウタースーツに着替えた。その時、デュノアはこちらを見るなどと言っていた。やはりこいつは何かあると確信、奴の裏を取ろう

と決意した。

先に着替えた俺は直ぐに更衣室から飛び出してグラウンドに来た。デュノアも俺の後に来たが間に合ったようだ。

1限目が始まるチャイムが鳴ると共にジャージに着替えた織斑先生がやって来た。実機を用いる実習は今日が初めてなので内容は実際に乗って歩く程度の事だけだろう。

「最初はIS同士の模擬戦闘を見てもらう。オルコット、鳳、前に出ろ」

織斑先生からの指示を受けたオルコットと鳳は前に出た。2人はやる気がなさそうな態度をしていたが特に気にすることはなかった。2人が模擬戦をする相手は山田先生のようなようだ。

山田先生対オルコット、鳳の模擬戦のようだ。デュノアはその間に山田先生が使用しているIS《ラファール》を説明するようだ。

俺はデュノアの説明を聞いて更に確信を固める。模範的な解答で素晴らしい：普通なら問題は無い。しかしデュノアが男性だとしてもISの知識がかなり豊富で代表候補生をしている……怪しすぎるな。

今の所、他の生徒は誤魔化せても残念ながらその程度の男装は俺に通用しない。男装するなら性転換をすることだなと俺が考えている内に模擬戦は山田先生の勝利で終わった。

「今の奴らではこんなものか……。諸君らもこれで教員の實力は理解出来ただろう。以後は敬意を持って接するように！」

織斑先生は釘を刺すようにそう宣告した。その後は訓練機を用いた歩行訓練をする。専用機持ちがリーダーとなつて生徒の訓練を見るといふ内容だ。尤も、アーセナルに乗る俺も専用機持ち扱いされているようだが……。

俺とオルコツト、鈴音、デユノア、ラウラがリーダーとなり打鉄2機とラフアール3機の合計5機が支給された。織斑先生は専用機持ちの所へ自由に行くように一般生徒に指示を出した。すると俺とデユノアの所に生徒が殺到してしまった。

「自由に専用機持ちの所へ行けと言つたがな……。均等に分かれる!!」

均等と指示を出さなかつた織斑先生の落ち度だと俺は一瞬思った。彼女の一声で均等に集まつてきたので気に留めることなく俺は歩行訓練を開始する。俺が今回の訓練で使う機体は打鉄だ。

「最初は相川さんですね。今日は宜しく願ひします」

歩行訓練は滞りなく進んだが四十院さんの訓練が終わったところで少し問題が起きた。どうやら彼女が機体を解除する際に前屈みにするのを忘れていたようだ。

仕方なく俺はアーセナルに乗る要領で跳躍、打鉄を装着して前屈みにしてから降りた。

「皆様もISから降りる時は必ず次の人が乗り易いように前屈みにしてから降りて下さい。宜しく願います」

全員が頷くのを確認した俺は引き続き訓練を続ける。他の専用機持ちを見るとボーデヴィツヒ以外の所は順調に進み、授業が終わった。俺は片づけを済ませて更衣室で制服に着替えて教室に戻った。その際もデュノアは後ろを見ないようにと俺に告げる。

授業が終わった放課後、俺はデュノアから模擬戦を申し込まれた。俺のデータ解禁と奴の情報収集を兼ねてそれを受ける事にした。

デュノアが使用するISはラファールのカスタム機体だ。模擬戦が始まると共に俺とデュノアは空中で激しい銃撃戦を繰り広げる。お互い、高速で移動しているので狙いを付けるのは困難だ。

デュノアは高速切替ラピッドスイッチを駆使して遠距離は重機関銃とグレネードランチャーで中距離は突撃銃、近距離はショットガンと距離に応じて武器を自由自在に変える厄介な相手だ。

「これならどうだ！」

俺はシールドシフトに切り替えて接近戦を仕掛ける。デュノアは銃撃がバリアに阻まれてる事に驚くがそれに構わずブーストをして近距離に持ち込んでマシンガンの

弾丸を連射する。

奴は後退して距離を取ろうとするが俺はアサルトシフトに切り替え、肩のミサイルを発射して追撃を行う。デュノアはショットガンでミサイルを撃ち落とすが俺はそこにハンドグレネードを勢いをつけて投擲した。

爆風の勢いで地面に墜落したデュノアが態勢を立て直す前に俺は右手に持っているマシンガンプロミネンスに持ち替えてすれ違う瞬間に横一閃を浴びせた。これにより奴のシールドエネルギーは尽きた。

「それにしても織斑君のＩＳはすごいね！ 攻撃と防御が切り替えられるＩＳは珍しいよ」

「恐れ入りますデュノアさん。しかしながら貴女は距離に応じて自由自在に武器を変えらる芸当は素晴らしいですよ！」

俺は互いの健闘を称えあっていると周囲からざわめきの声が聞こえ始める。

この感覚は……あいつだな。発生源に目を向けると右肩の大型レールカノンが特徴的な黒いＩＳがピットに立っていた。

「織斑一夏、貴様も専用機持ちだったのか。私と戦え！」

「模擬戦をするのは構わないです。恐れ入りますが現在は他の生徒も使っているので日を改めますが宜しいですか」

ボーデヴィツヒから模擬戦を申し込まれた。しかし周囲を見ると一般生徒が訓練機で練習をしている。本気で戦ったら巻き込み事になるので後日に模擬戦をやる事は提案した。

「なら、戦わざるを得ないようするまでだ！」

奴は俺の話を見殺ししてレールカノンで砲撃を仕掛けようとした。その前に俺は右手のプロミネンスを突撃銃に持ち替えて3発、弾丸を放った。

2発は砲弾を相殺して残りの1発は砲身の中に入り自動装填された砲弾に命中、これにより砲弾が暴発して砲身が爆発した。

「周囲を顧みずに攻撃とは……。貴女は教官からこのような事を教わったのですか。だとしたらその教官は無能ですね」

俺は織斑先生の教え子がこんな野蛮な奴を生み出した事に呆れてそう呟いた。彼女は懲りずに攻撃をしようとするが管制室から注意を受けてその場から去った。

「部屋に戻ったら今回の模擬戦で得られたデータを確認しないとな……」

今日の訓練を終えた俺はそう呟きながらアリーナを後にした。

オーダー9：黒兎と貴公子の秘密

自室に戻ろうとした俺は道中でボーデヴィツヒと織斑先生の話し声が聞こえた。俺は近くの物陰に隠れて様子を伺う。

「教官、何故こんな所で教師をしているのですか!？」

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「どうやら、ボーデヴィツヒと織斑先生が口論をしているようだ。声が明らかに大きい……。できれば他所でやって頂きたいものだ。」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか!？」

話の内容からすると奴は織斑先生がここで仕事をしている事に大層ご不満のようだと云つても俺の知つた事ではないが俺は奴の話を最後まで話を聞くことにした。

「教官! ドイツで再びご指導をお願いします! ここではあなたの能力は半分も発揮できません!!」

「何故だ?」

彼女の訴えに対して織斑先生はそう問いかける。自分の能力が生かされていない理由を知ることにも指導者として必要な事だと俺は思った。

「そもそもこの生徒など教官が教えるにたる人間ではありません！」

意識が甘く、危機感に疎く、ISをファクションか何かと勘違いしています!!」

奴の意見に一理あると思つた。建前では競技用だと謳っているが実際は人を容易に殺せる凶器を扱っているのだ。自動車も使い方次第では人の命を奪う凶器に変わるのを取り扱うのに教習所に通つて試験に合格して初めて免許が与えられる。

尤も、凶器を扱っていると自覚を持っている生徒の方が少なそうだがな。

「そのような程度の低い者たちに教官が時間を割かれるなど……!?!」

「そこまでにしておけよ……小娘!」

彼女は最後に何かを言おうとした時、織斑先生の威圧的な口調の言葉に奴は押し黙つた。流石に教官だからこれ以上は逆らえないようだ。織斑先生が発した覇気をまともを受けたら堪つたもんじやないな。

「少し見ない間に相当偉くなつたな。15歳でもう選ばれし者を気取るとは……」

織斑先生の言葉にボーデヴィツヒは震えて何も言い返せないでいる。奴は織斑先生の元から直ぐに去つた。俺も織斑先生に見つかると面倒なので自室に戻つた。

自室に戻つた俺はデュノアが戻ってくる前にフランス代表候補生について調査を進める。あの反応は怪しすぎるからな。

「予想通りだったか……」

フランスの代表候補生リストを確認したところ、シャルル・デュノアという人物はいなかった。その代わり彼に極めてよく似た人物『シャルロット・デュノア』が目にとまった。

他人の空似と俺は一瞬そう思ったが不自然な点が多くリスクが大きすぎる。

万が一、奴が工員等だとしてそれが発覚しようものなら大事になるのは確実だ。こゝも簡単に分かる事の筈なのに何故IS学園は見逃しているのか。それに不信感を抱いたがそれを奴の尻尾を掴むチャンスに変える。

意図的に稼働データの記録を机の上に置いたままにする。次に奴が端末で確認して持ち去る瞬間を映像で記録する。最後に生徒会長と教師を同伴させて奴がスパイをする決定的証拠を押さえる事にした。ダメ押しとしてデータと性別偽装等を突き付ければ終わりだ。スパイ目的で来たと思われるデュノアを捕える計画を脳内で組み立てた。

データ確認は後でも問題は無いと判断して奴の様子を伺ったが今の所は変わった動きは無いようだ。

翌日、その準備を進める為にこの計画を生徒会長と学園の教師とその上層部に伝えた。

本来ならこの時点で奴を捕える事もできるそうだ。しかしスパイをした証拠があれ

ば有利になると上層部が考えたのか俺の計画を了承してくれた。

生徒会長と教師陣は早急に捕まえた方が良いと主張したがそれは退けられたようだ。上層部はこのスパイ活動を名目にフランスから多額の賠償金が欲しいようで現場の事は殆ど考えていない連中だ。

これに関しては俺の管轄外だが直ぐに実行することになった。

その翌日、小物に偽装した超小型隠しカメラを机の怪しまれない所に設置した。次に初期の稼働データが入っている端末をPC近くに置いて罍を仕掛ける。

罍を設置後、自室から出て別の部屋に待機した。

デュノアは罍に呆気なく引つ掛りスパイ活動と戸籍偽装等の罪で強制送還と退学処分が下された。

奴はこちらの罍を警戒して行動するかと思っていたが無警戒だったようだ。

彼女は本国で諜報活動の訓練等を明らかに受けていない証拠だ。学園上層部の狙い通り連中はフランスに多額の賠償金の支払いを求めて訴訟をするようだ。

この件で一番の決め手となったのはデュノア社と国が共謀していた事が致命的だった。デュノア達の末路は知らんがあの方だと表に戻ることとは無理だと思った。

デュノアが退学した日の夜、俺は後回しにしていた稼働データの分析を行う。デュノ

アとの模擬戦で得られたデータは俺のデータ解禁に役立った。それを基にして俺はパーツと武装の組み合わせをしていく中である事に気付いた。

(そういえばフェムトを使っているのに誰もアウター症候群を発症していないのは何故だ?)

フェムトに毒性がある事を思い出した。それは新たなエネルギー源でもあるが同時に劇毒でアウター症候群を発症し病気に適応した者以外は死亡する筈だ。しかし今の所は誰も発症していないので念の為、黒鷲が使用するフェムトの性質を確認した。

(マジかよ……!?)

黒鷲が使っていたフェムトにアウター症候群を引き起こす毒物反応が無かった。俺はその要因を平行世界を飛び越えた影響だと推測したが詳しい事はこれ以上は分からなかった。

(どうしたものか? アーセナルを使うのは控えるべきだが…。稼働データが無いとパーツ解禁ができないからフェムトの変化を随時、確認だな)

そう考えて機体と武器の組み合わせを一晚中考えた。それで大丈夫なのかと思う人達もいそうだが経過観察と称するしかない。

機体を組み終えた翌日の朝、俺は第3アリーナに一番乗りで到着、黒鷲に乗り込んでピットからフィールドに飛び出す。ここに奴が来る事を感じ取ったからだ。

予想通り、ボーデヴィツヒが俺から見て正面にあるピットから姿を現した。

「待ってたぜ。模擬戦を希望するなら受けて立とう！」

「貴様の望み通り、受けて立つ!!」

ボーデヴィツヒがフィールドに着地すると同時に模擬戦を開始する。

奴の武器は右肩のレールカノン、背部にある6つのワイヤーブレードと両腕のプラズマ手刀で実験機に相応しいな。先制攻撃として俺は左手に持っている突撃銃アストライオスの弾を3発、奴に向けて発砲した。

彼女は銃撃に対して体を軽く反らして回避と同時にワイヤーブレードを3つ射出して接近する。俺は右手に持ったシルバーレイヴンで牽制しつつブーストで後退と同時に跳躍して空中戦に持ち込もうとする。

「ふっ、馬鹿め！ 逃がすと思うな！」

ボーデヴィツヒは口角を釣り上げて残り3つのワイヤーを空中に飛ばした。奴が出したワイヤーに囚われてそのまま地面に叩き落とされた。彼女は右肩のレールカノンで追撃を仕掛けようとしたが俺は咄嗟に奴に向けてハンドグレネードを投げつけた。

ボーデヴィツヒは右腕を突き出してそれを空中で制止させた。奴は制止させたグレネードを左腕のプラズマ手刀で両断、レールカノンで砲撃した。

「中々やりますね…。しかしこの程度では私を倒せませんよ！」

砲撃の直前にシールドシフトに切り替えて砲弾を辛うじて防ぐことが出来た。しかし代償として暫くシールドシフトが使えなくなつた。

左手の突撃銃をLPに格納している太刀アメンハバキリ持ち変え、シルバーレイヴンで牽制しつつ彼女にブーストで接近する。

「愚か者！ 私の シユヴァルツェア・レーゲン S の力を思い知れ!!」

奴はそう叫びながら右腕を突き出すと攻撃が届く前に停止させられた。これは……スタン攻撃のように思うが違うと感じ取つた。ボーデヴィツヒは俺が身動きが取れない状態を利用して決着をつけようとする。

「それはどうかな？」

俺が意味深にそう告げると同時に奴は背部からの攻撃を受けた。それと共に俺は停止状態が何故か解除された。

ボーデヴィツヒに接近する前に予めブリッツを射出して正解だつた。

こちらの使用しているブリッツ『グレイスラスト』は遠隔操作型のシオルダーウエポンドで子機を射出、それにマシンガンが内蔵されており自動的に接近して攻撃する武器である。

奴が子機に気を取られている隙をついて太刀で横一閃の一太刀を浴びせ、ブーストによる後退と同時にシルバーレイヴンを連射。ハンドグレネードを投げつけて直ぐに子

機を回収した。

ボーデヴィツヒは迫るグレネードを先程のように制止させたが俺は奴が停止させたグレネードにマシンガンの弾を撃ちこんだ。

弾はグレネードに着弾と同時に爆発を起こして彼女を巻き込んだ。これにより奴のシールドエネルギーは尽きて勝負が決まった。

「俺の勝ちだな」

「ちっ……覚えていろ！」

俺が勝利を告げるとボーデヴィツヒは舌打ちをしながらその場を逃げるように去った。

それから俺達の後にここに来ていたオルコットと鈴音に模擬戦を申し込んだ。

俺は1人で鈴音とオルコットのペアで戦うように所望した。複数で戦う訓練の一環だと彼女達に説明した上で模擬戦をした。

結果、2人を相手に何とか勝利した。

この調子でデータ解禁を進めて学年對抗戦に備えよう。模擬戦を終えた俺は稼働データを確認するために自室に戻った。

(戦果は上々、この調子で戦っていこう)

心の中でそう呟いた。

オーダー10：学年対抗戦

模擬戦を終えた後、俺は自室に戻って稼働データの分析を開始した。今日は2回戦ったおかげでデータ解禁された量がとても多かった。

「なるほど、これなら機体の組み合わせが沢山作れそうだな」

今回得られたデータを基に機体の構築を行う。俺は基本的に全距離対応できる組み合わせが好みだ。

それらの中には近距離戦闘や長距離戦闘、対大型イモータル戦向けといった攻撃対象に適した機体だけでなく操縦者の得意分野を活かした戦闘スタイルを可能とする組み合わせ等、無数にあるのだ。

稼働データの蓄積が一定量に達した事で黒鷲は機体データの保存ができるようになった。この機能は機体データの組み合わせを記録、必要に応じて即座に組み替えられるのだ。最大でも10個まで保存できるが今の所は3つが限界のようだ。

現状は俺があの世界で愛用していた機体が再現できるのでパーツはその構成をして武器は全距離で対応できる物を4つ選んだ。

残りの2つだが火力重視の装備、近接格闘重視の装備を登録した。

「これでよし。後は学年対抗戦に備えるだけだな」

作業を終えた俺は学年対抗戦のルールを改めて確認する。今回は2人1組のトーナメント方式で戦うようだ。しかし俺は今までの戦闘記録と実力差を考慮した結果、特例で単独出場する事が通達されている。不利な状況で戦う程、データの解禁が捗るので都合が良くて助かる。

俺はそう考えながら学年対抗戦の当日までデータ解析と組み合わせの試行錯誤を行った。

学年対抗戦当日、俺は黒鷲の状態を確認する。

「全システムを確認、問題なし！」

黒鷲の確認を終えて対戦相手を見ると打鉄を使う篠ノ之、専用機持ちのボーデヴィツヒだった。

ボーデヴィツヒが篠ノ之と連携したら厄介だがそれをする可能性は低そうだ。奴はこの生徒と比べて思考や意識が段違いで単独で戦おうとすると思ったからな。

「一度は勝ったが対策は確実にしてくるはずだ。それなら……これで戦おう」

俺はデータをロードして展開、ピットからアリーナのフィールドに飛び出した。地面

に着地した後、正面からボーデヴィツヒと篠ノ之がこちらに来た。

ボーデヴィツヒは敵意を剥き出しにしておりこちらを睨みつけている。一方、篠ノ之はそれにドン引きしているようだ。

俺はそれに構う事無く戦闘態勢に入る。相手の方がこちらよりも人数で勝っている時は簡単に倒せる敵から落とした方が良さそうだ。

「織斑一夏、模擬戦の雪辱はここで果たす!!」

「イーグル、オーダーを開始する!」

ボーデヴィツヒが宣言した後、俺はそう返すと試合開始のブザーが鳴り響いた。俺が最初に狙うのは篠ノ之でブーストと同時に後退しながらRWとLWに装備しているグリムリバー突撃銃を発射する。

「くっ!?!」

篠ノ之は迫りくる弾に回避を試みるも間に合わず、全弾命中した。更に俺は跳躍してSWのミサイル『ランペイジハンマー』を2つ射出した。

奴は咄嗟に後退したが2つの弾は弾速こそ遅いが誘導性は高く、後退した程度では逃れられない。

「私を忘れてもらっては困るな!!」

ボーデヴィツヒは篠ノ之に攻撃している俺が隙だらけと判断して攻撃を仕掛けよう

と接近する。

「忘れてないよ」

俺はそう告げると同時にミサイルを2つ奴に向けて追加で発射した。彼女は咄嗟に左腕のプラズマ手刀で1つ目を溶断したが2発目は手刀で斬る前にミサイルが起爆、派手に爆発した。その直後に篠ノ之に向けて発射したミサイルも派手に爆発する。

「まだまだ……なにつ!？」

篠ノ之は爆炎に包まれながらも態勢を立て直すのがシールドエネルギーが急速に減っている事に気付いた。俺が使用しているミサイルは爆発した後、相手を炎上状態にする。これは本来、アーセナルのスタミナと耐久力を減らすものだ。

しかし異常な高温の状態は生物や精密機械にとっては最悪の環境だ。ISはその状況から操縦者の命と自身の機能を守る為に絶対防衛を発動する。

これによりシールドエネルギーが急速に減少する理由だと俺は推測したが当たりだった。

俺は奴がエネルギーが減少し続ける事に動揺している隙をついてLWの突撃銃をLPに格納したバズーカに持ち替え、篠ノ之に狙いを定めて砲弾を1発だけ放った。

奴はそれに気付いて慌てて逃げようとするも手遅れで砲弾が直撃すると同時に衝撃で彼女はアリーナの後ろに吹き飛ばされた。これにより奴のエネルギーは尽きて戦闘

不能になった。

「まあ、こんなものか。さあ……かかってこい!!」

篠ノ之を軽く倒した俺は爆風から抜けたボーデヴィツヒに宣言した。奴は俺の挑発に乗ってワイヤーブレードを3つ発射する。

俺は迫るワイヤーブレードに対してブーストで後退しながらRWの突撃銃を連射して牽制する。彼女は銃撃を避けることなく俺に接近して右腕を突き出そうとする。

「同じ手は通じないぞー!」

俺は粒子兵装をウイングシフトに切り替えて後方へ更にブーストして奴から距離を取った。ボーデヴィツヒが使うあの停止状態は自身の近くにいる敵にしか使えないと推測したが当たりだ。俺は奴にバズーカの砲弾を2つ発射した。

「甘いなー!」

奴はそう言つて右腕のプラズマ手刀で1つ目の砲弾をプラズマで串刺し、2つ目を横薙ぎに振り溶断して防いだ。

砲弾を撃つた俺は直ぐにアサルトシフトに変更、突撃銃を奴に向けて連射した。彼女は銃弾の雨を被弾しながらも接近して右腕のプラズマ手刀を振り下ろす。

俺はボーデヴィツヒの手刀に対抗してLWのバズーカをRPに格納したレーザーブレード『バルダーエッジII』に持ち替えて鏢競り合いに持ち込んだ。

「せいやつ!!」

俺は鏢競り合いに勝って奴を突き飛ばすと同時に一太刀浴びせた。更に俺はミサイル3発とRWの突撃銃による連射で追い打ちをする。

ボーデヴィツヒは態勢を立て直しつつ迫りくる銃弾とミサイルをワイヤーブレードで迎撃するが防ぎきれずミサイル2発と銃撃を喰らった。

奴はミサイルの爆風により機体が炎上状態になってエネルギーが急速に減っているはずだ。このまま突撃銃を連射、止めにバズーカの撃ちこめば勝利できると思った。

俺はボーデヴィツヒに突撃銃の銃身に向けて銃弾を浴びせようとした。

(私がまた負ける……!?!? ありえん! 私教官に鍛えられた兵士だ! こんな男に負けるはずがない!!)

ラウラは機体の激しい損傷により身動きが取れず炎上状態で急速に減っていくエネルギーを見て焦燥する。

彼女の脳裏に敗北の二文字が過った。

こちらが最初こそ数で勝っていた。それにも関わらず相手はそれを苦にすることなく圧倒する。

それだけでなく奴と対抗戦前にした模擬戦で一度は敗北しており彼女は焦燥を更に募らせていく。

ラウラは遺伝子強化体……即ち戦うために生み出された生体兵器であり、彼女は常に軍で優秀な成績を納め続けた。

しかし彼女は強化の一環で行ったI S適合移植手術に失敗、ラウラの成績は底辺に落ちた。

そんな彼女を救ったのは教官をした織斑千冬だった。千冬の圧倒的にして完璧な強さに憧れる共に心酔していたラウラはI S学園にいる事に大きな不満を持っていた。

【汝、比類なき最強の力を求めるか……?】

(最強の力だと……?)

そこに悪魔が囁きが彼女の耳に届いた。ラウラはその言葉の意味に疑問を抱くが悪魔は語りかける。

【汝が求める力を……手にする資格あり……。このまま敗北するか最強の力を手にするか……選べ……】

(最強の力……。私はその力を手にする!!)

【汝の願い、確かに受け取った。

ヴァルキリー・トレース

V T システム……起動】

「うっ……ああああ!？」

ラウラは悪魔が囁く最強の力を手にすることを望んだ。

その瞬間、機体が水色の稲光に包み込まれると同時に爆炎が土煙によって消された。この事態に一夏は驚いて攻撃を中断した。

「これは……何が起きている!？」

そして光が消えると共に不気味な黒い人型の何が太刀を右手に持って立っていた。

「オーダー更新か……」

一夏は変化したラウラを見てそう呟いた。

オーダー111：偽りの暮桜

俺はボーデヴィツヒのISが不気味な黒い人型に変化した光景を見て警戒する。打鉄に酷似しているものの肩の装甲等の細かい部分が異なっていたからだ。

黒い人型は突然、間近に急速接近して刀を勢いよく振り下ろす。

「くっ、なんだ……この重い一撃は!？」

RWのバルターエツジIIで刀を受け止めたが桁違いの威力だった。そのまま鏢競り合いに持ち込むも奴の方が力が圧倒的だ。奴の横一閃を受けてアリーナ後ろの壁へ叩き付けられた。

「何て力だ……こいつを外に出すわけにはいかん！」

俺は何とか立ち上がってバルターエツジIIを構える。そこに黒い人型がまた接近して刀を振り下ろす。

「くっ!？」

左にブーストして何とか回避するも奴は執拗に近づいては斬るを繰り返す。スピードは前に戦ったソロモンよりも弱いが受けたら只ではすまない。射撃をする隙が無い厄介な敵だと俺は戦慄する。

その時、織斑先生から通信が入ったので聞いた。

『織斑、あれはVTシステムだ』

「VTシステム？ 何なんですかあれは!？」

織斑先生が発したVTシステムについて尋ねる。名前からすると碌でもないシステムだと予想できるが当たりだった。

『あれはモンド・グロツソでヴァルキリークラス以上の操縦者の動きをトレースして動かす。』

条約で現在は国家・組織・企業においても研究、開発、使用の全てが禁止されている禁忌のシステムだ。あの姿は私に酷似しているから第一回大会で優勝した私のデータ暮桜を基にしている。教員部隊を今すぐ送るからその間だけ持ちこたえてくれ』

「分かりました。篠ノ乃は……既に離脱していたか。イーグル、オーダーを実行する！」
ドイツは奴のISに違法なシステムを搭載していた。下手な実験動物よりも質が悪いな。そうなると思えば大変な事になると思ったが今は時間稼ぎが最優先だ。

相手は幸い近距離戦闘特化型かつ武器が刀だけなので距離を詰められない限りは何とかなると考えて即席で立てた作戦を実行に移す。

両手の突撃銃で中距離から銃撃を仕掛けて牽制する。しかし偽暮桜は刀で銃弾を切り捨てながらこちらにまた接近する。

「ちっ!？」

俺は粒子兵装をウイングシフトに切り替えて後方にブースト、突撃銃の弾を発射する。ウイングシフトは攻撃すると自動的に解除されてしまう。しかしウイングシフト中は防御が低下するのでその欠点を利用して只管逃げ回る。

目的は鎮圧部隊の到着までの時間稼ぎだ。こいつが観客の所に行こうものなら大きな被害の発生は確実だ。空中に逃げて奴の攻撃を回避すれば余波でバリアが破壊される危険を考慮したら地上戦に徹するしかないと思った。

近づかれないように奴との距離を開けるもそれを見抜いたのか積極的にこちらの懐に飛び込もうとする。偽暮桜にダメージを与えているがその部位が徐々に再生している。

突撃銃とミサイルによる攻撃を行うがその途中でミサイルの弾が尽きた。

「このままではジリ貧だ……」

逃げ回っている間に突撃銃の残弾を確認、僅かしかない事に気付いた。偽暮桜が瞬時加速で刀が届く間合いにまた来た。粒子兵装をウイングシフトに切り替えて距離をとると同時に残弾を全て奴に撃ちこんだ。

「弾切れか……」

俺は弾が尽きた両手に持った突撃銃を見ながら呟いた。その時、偽暮桜がまた接近し

て刀を振り下ろすが空になったRWの突撃銃を咄嗟に手放して攻撃を避けた。そこから奴は刀を振り上げるが今度はLWの突撃銃を盾代わりにして攻撃を防ぐも銃は真つ二つになった。

これで突撃銃は破壊されたがウイングシフトによるブーストで奴から距離を取ることができた。しかし奴はそれに応じて瞬時加速で接近、偽暮桜の攻撃を3回受けてしまった。ウイングシフト中は防御が低下しているのでこれは痛手だ。

「俺にこいつを使わせるとは……。模造品でも世界最強ということか!!」

粒子兵装を解除、ミラーージュ機能を解禁する。これにより機体が緋色に包まれると共にもう一機の黒鷲が俺の前に姿を現した。

「行くぞー!」

分身と共に偽暮桜に近づいて攻撃を仕掛ける。

囷として分身を先行させ、奴が攪乱した隙について死角からLWのバズーカで砲撃をする。分身もそれに応じてミサイルで援護射撃を行う。分身は本体の残弾に関わる事無く無制限に攻撃が可能だ。

俺は更にバズーカによる砲撃を当てて動きが止まった偽暮桜をアリーナの壁端に吹き飛ばす。バズーカは衝撃で相手を後ろに吹き飛ばせる事を利用した。動いている相手にバズーカは使いにくい動きが止まれば当てるのは容易だ。

分身は偽暮桜へ積極的に攻撃を仕掛けており、バルターエッジⅡによる斬撃やバズーカの砲撃、ミサイル攻撃で奴を追い詰めている。その合間にバズーカによる援護射撃をするが途中でバズーカの弾が尽きた。バルターエッジⅡは使う度にフェムトを消費、分身の滞在時間が減るので俺は使わずに奴の様子を見ることにした。

奴の再生速度が先程よりも低下、再生が追い付いておらず破損が目立っているようだ。分身にこのまま攻撃させておこうと思った。

しかし偽暮桜は標的を分身からバズーカで援護射撃をしていた俺に切り替えて接近してきた。本体がこちらであることに思ったよりも早く気付いた。しかもミラーージュをしている間は粒子兵装が一切使えない。

「ちっ、気付かれたか！」

俺は咄嗟にLWのバズーカを盾代わりにして偽暮桜の斬撃を防ぐがバズーカと左腕が破壊されてしまった。

「左腕が大破した。……だが！」

アーセナルのパーツは個々に耐久値がありそれが尽きると性能が大幅に下がってしまう。左腕が破壊された場合、LWが使用不可になってしまうのだ。其々の耐久値を確認するとどれも残り半分以下だった。フェムト残量は尽きそうだったが勝利を確信する。

フェムトが尽きて分身が消滅すると同時に打鉄を纏った5人編成の教員部隊がアリーナに到着した。

「鎮圧部隊の到着を確認、後は頼みます。イーグル、戦線から離脱する」

後始末は教員に任せてピットに向けてブーストする。俺の機体はボロボロで耐久が10%以下、これ以上の攻撃に耐えるのは不可能だ。

あの数なら余程の事が無い限り、問題は無さそうだな。逃げる事に夢中になったせいでスタミナ切れを起こしたが回復次第、離脱しよう。

「VTシステム：とんでもない代物だが、こつちの世界では役に立たないな」

俺はあのシステムと戦って感じたことを呟きながらピットに向かい跳躍地点に着いた瞬間、後ろから近づく物体をレーザーが捉えた。

『織斑！ 暮桜が鎮圧部隊の包囲を抜けてそちらに急速接近している!!』

「なにっ!!」

振り向くと奴が後ろから追ってきていた。敵はこちらを殺さないと気が収まりそうにないと悟った。しかし今、奴と戦ったら確実にやられる。鎮圧部隊も奴を追っている間に合わない。

「くそっ!!」

奴は刃が届くところまで接近している。瞬時加速で鎮圧部隊の包囲網を抜けてここ

まで来たようだ。

(このままでは……死ぬ!!)

俺は咄嗟にRWのバルターエッジIIを奴の胸に突き刺すとレーザーの刃は偽暮桜を貫通、刀が振り下ろされる直前に停止した。俺は直ぐに奴から離れて警戒する。

「敵だから刺した……。それだけだ」

言い訳を咭くと偽暮桜はドロドロに溶けて取り込んでいたボーデヴィツヒが姿を現した。しかし奴の心臓近くに穴が空いており傷を近くで目視したが即死に等しい状況だった。出血こそしてはいないが細胞はレーザー刃で焼かれている事は明らかだ。

彼女は俺と教員によってその場で死亡を確認、学年別対抗戦は中止になった。

偽暮桜を破壊した後、個室で尋問が行われた。その内容はミラージュと何故ボーデヴィツヒを殺したかだ。

あの時、教員部隊の到着と共に撤退した。その途中で奴が包囲網を振り切つてこちらを殺そうとしたから反撃、下手をすればこちらが死んでいた可能性があることも伝えられた。

ミラージユについては最初に提出した資料に掲載済みである事を話した。

ドイツは当初、代表候補生殺害を理由にこちらに身柄を引き渡すように申し出をした。

しかし俺はドイツが違法研究をしていてかつそれによりこちらが危うく命を落としかけた事、何よりもドイツは条約に反した違法研究を何故黙認したのかということも厳しく追及した。

学年対抗戦は各国の代表が集まる行事だ。

大国のお偉いさんが当時、発生した映像の一部始終を見ていたので俺に味方してくれた。そのお陰で罰則等は特に下されなかった。

ドイツはこの件でどうなったかは知らないがあんな醜態を全世界に晒したからお先真つ暗なのは確実だ。しかしこちらの管轄外で知ったことではない。

「人殺しか……。少佐と同じ立場になってしまったなあ……。」

連日続いた尋問を終えた後、自室のベッドで独り言を呟きながら眠りについた。

オーダー12：戦闘記録

暮桜（偽）を倒した数日後、俺はIS学園でアーセナルの稼働データを黙々とまとめていた。

「よし、こんなものかな」

まとめたデータを見て呟いた。パーツ解禁が順調に進み、俺が嘗て愛用していた機体構成が可能になった事に満足している。

あの戦いで殆どのパーツデータが解放されたのは複雑だが存分に活用する。後は細かな調整だがそれは試し撃ちや模擬戦をして今の俺に合わせた戦い方ができるようにしていく。

これまでの戦闘記録を振り返るとあの頃の訓練が活かされている事を実感、アーセナルに乗り立てだった頃を思い出しながらあの世界での戦って来たことを思い起こす。

俺は物心ついた時から『あの世界』デモンエクスマキナに住んでいた。後に出自を尋ねたらオーヴァルリンク内で准将とグリーンフさんがオーダー中に発見、保護したとの事だ。保護された時の推定年齢は1歳で名札と思わしき物品を発見、それに織斑一夏と記されていたそう
だ。

保護された俺は孤児施設に入所、そこで15年間過ごした。高校生になった俺は施設を出て安いシエアハウスに入居してバイトと学業を両立させながら暮らしていた。

シエアハウスに同居していた人は幸いにも良い人だったので暮らしでの問題は特になかった。学業に関しては平凡な成績で今後の事を考慮すると大学進学よりも就職した方が良いと俺は判断した。

高校卒業後はバイトを続けながら就活を進めるが人材を募集する企業に応募するが不採用続きだった。それでも安定した生活を得る為にバイトと就活をしていた。

ある日、共同体の1つであるスカイユニオン主催のイベント会場に赴くことにした。このイベントは一般、就活者対象で就活中の俺にとってはチャンスだった。今思えばこれも仕組まれていた事とは知る由も無いが……。

人材を必要としている企業説明会に足を運び事業内容や将来性等を吟味して入りたい企業を見ていく。俺は幾つか気になる企業を見つけ、面接の日時とシフトを確認して計画を練っていく。

(今の所はシフト関係で問題は無さそうだ……)

そんな事を考えながら試作機のアージェナルに不注意で当たったらそれが起動した。それを運悪く運営スタッフに見られてしまったのでアウター疑惑がかかりスカイユニオンに軟禁された。軟禁後はアウターとアージェナルの適性検査を受けて合格、傭兵になった。

正直な所、戦いとは無縁の生活だったがアージェナルに乗って操縦した時は何処か懐かしくずっと前から動かし続けていた様な気がしていた。そんな感覚のおかげで実戦でも他の傭兵達とは一線を越える成果を上げていた。

オービタルや3つ共同体『スカイユニオン』、『斬』、『ホライゾン』から発注されるオーダーをこなしながら生活費を稼ぐ。その中で解放旅団の最強チームと称されるバレットワークスと共同でオーダーを遂行した。

俺はバレットワークスのメンバーにはお世話になっており、特に俺が傭兵になる少し前にバレットワークスに所属したジョニー・G上等兵とは気が合った。

オーダーの僚機申請を彼によくしていた。上等兵は俺が絡むと大型イモータルと遭

遇する可能性が高くなると愚痴っていたが何だかんだで協力してくれる良い人だった。

受けたオーダーは主にイモータルの殲滅だが時々ではあるが施設の破壊または調査任務もした。その中には新型アーセナルを生身で奪取するオーダーも受けたがあれは本当に命懸けだった。

解放旅団とオーダー中に対立して戦う事もあったがその時に組んだ傭兵と共にその危機を退けたりもした。

印象に残っている任務は存在しないオーダーで俺を誘き出して2人がかりで俺が排除されかけた時、何処からともなくセイヴィアーが駆けつけた。俺は彼と共闘してこの窮地を乗り切った。

セイヴィアーと2度戦った事がある。2度目の戦いは彼の機体に不調が生じたのでそれを見逃したがその借りを返すために来たと思った。

こうして様々なオーダーを遂行する中で2年で熟練パイロットに匹敵する実力を得たが精神面はまだまだ未熟だ。しかし短期間でここまでの力を持ったことに周囲から疑問を持たれたが俺は気にしなかったが准将は注目していたようだ。

20歳になった俺は准将から緊急出撃要請を受け、その招集に応じた。その内容はグリーフの捕獲だったがこの戦いで少佐がグリーフ側に寝返り少尉を殺害しようとするも軍曹が庇った。少尉は無事だったが軍曹はそれが致命傷となり戦死した。

少佐は少尉にとって超えるべき目標だが俺にとっても目指すべき人の一人だったので彼の裏切りは衝撃的だった。

それからバレットワークス指揮の元、ブラックロータス破壊作戦に参加することになった。これは4つ存在しておりそれと同期しているアーセナルを倒さないとブラックロータスは破壊できない。

リジットさんとクロンダイクさん、ネメシスさんと少佐がブラックロータスと同期していたので彼等と戦った。彼等は個々の事情でグリーンフに寝返った者たちだったから俺は各旅団の支援に徹し、決着は各旅団のリーダーが付けた。彼等の死を見届けるしかなかった。

ブラックロータスを全て破壊したが、グリーンフの野望はまだ終わっていない。ムーンフォール地点で彼がいる事を突き止めた俺達は准将の指示で全旅団による全方位から侵攻を開始する。

俺は入った通路の下に床があつたので敵から逃げるように床へ移動して進み、弾薬の消費を抑えた。そこにグルーミーとリグレットが立ちふさがってきた。俺の所に上等兵と少尉が合流した。

奴らにある程度ダメージを与えた所で上等兵と少尉がグルーミーとリグレットを抑えて俺を先に進ませてくれた。俺は彼等の意思に応える為にグリーンフの元に向かった。

奴がいる最深部に到着した。グリーフの機体は性能が桁違いに強化されており禍々しい姿に変貌している。

グリーフはどうやら計画の一環として自身のコピー、即ち俺を使ってそれを進めていたようだ。奴の掌の上で踊らされていた事をここで痛感した。俺はそれに憤りを感じても頭わにしなかつた。

共に戦った仲間がいて、彼等の意思と共にここへ来たのだと言い聞かせて冷静さを保った。どちらが選ばれし者かを決めるべく戦いが始まった。

死闘の末に俺はグリーフに止めを刺せる状態まで追い詰めた。しかし奴は諦めておらず全ての元凶と言える存在と融合した。

それと融合した奴に戦いを挑んだ。こいつは自身をコマの様に回転しての体当たりや大レーザー、周囲に浮遊しているブリッツは厄介だったがそれ以上に面倒なのは強烈な重力子だった。

その重力子は範囲内にいると敵の武器を強引に吸収、破壊してしまうのだ。武装を破壊されないように奴の弾幕と体当たりを避けて太刀の連続攻撃とバズーカの砲撃、突撃銃による銃撃とミサイル攻撃を行った。

激しい戦いの末に奴をあと一撃で倒せる状態にした。互いに満身創痍で武器が太刀しか残っていない俺は止めを刺すために奴に斬りかかって一太刀浴びせた。

しかし奴は同時に重力子を展開しておりそれに巻き込まれた俺は平行世界に飛ばされてしまい、今に至る。

「こうして思い起こすと色々あったが……この先も面倒事が起きそうだな」
そう考えながらノートPCを閉じてベッドに入ると同時に深い眠りについた。

オーダー13：林間学校

学年對抗戦から数週間後、IS学園に入学した生徒の半数が退学または編入した。その理由は俺がボーデヴィツヒを殺したことが原因だった。これが切欠で他の学年や生徒から嫌われる様になったが特に問題は無い。寧ろ危機感が低い生徒ばかりが入学していた事に呆れている。

特に深刻だったのは1年1組でその生徒数は入学時の半分以下になっており空席が目立っている。生徒が大勢いた教室の空席を見ると少し虚しくなったがそれ以上の事は何も感じなかった。今の状況で残っている生徒は篠ノ之とオルコット、10人の生徒だった。

オルコットは代表候補生でこのクラスの副代表を担当しているので理解はできるが篠ノ之は血縁者という足枷で彼女の都合や意思を上層部が無視して残らざるを得ないと思うと同情した。

俺が登校していた数日間、織斑先生は休職をしており他の教師が授業を担当した。織斑先生の教え子を殺した張本人を前にして平常通りに授業できるとは思えないので納得している。

こちらを見て先生が痲癩等を起こして授業が進まなかったら本末転倒だからな。

ボーデヴィツヒは織斑先生に軍の教官として戻って欲しいとお願ひした際に生徒たちを『意識が甘く、危機感に疎く、ISをファクションか何かと勘違いしていた者たちばかり』と言っていたが皮肉にも彼女の死によってそれが証明された。

特に入学していた日に織斑先生に憧れて入学していた生徒が全員、退学ないし別の学校に編入した事については何も思わなかった。

その中にはクラスメイトを殺した俺と一緒に授業を受け続ける事が耐えられないという理由で辞めた生徒もいたがこれは仕方ないと思った。

犯罪者と一緒にいるだけで精神的苦痛を伴う人もいるので自分の心を守る為に学園を去ることは正しいと俺は感じた。自分の身は自分で守るしかないからな。

ボーデヴィツヒを殺した件については罰則を科す事が非常に難しい状況だと言える。鎮圧部隊の到着と共に撤退して戦闘を継続する意思が無いにも関わらず、奴は鎮圧部隊の包囲網を抜けて斬りかかった。

機体がボロボロで油断していた俺は自衛だが止む無く反撃した結果、レーザー刃がボーデヴィツヒの心臓近くに刺さった。正当防衛に当たるかは別としてもしもあそこで死んだとしたら学園上層部はどんな行動をしていたかを考えたが無意味なので辞めた。

この後、口外禁止を条件に知った事だがボーデヴィツヒはドイツの研究施設で生み出された人造人間でかつ兵士として戦う存在で『ラウラ・ボーデヴィツヒ』という名前は識別する為に名付けられた事実に衝撃を受けた。

言葉を選ばずに例えるなら生体兵器を破壊しただけと解釈できる。だからと言って人の命を奪った事実、それが許される理由にならないがある意味で自分と同じ消耗品扱いという事に俺は同情をした。

彼女もまた被害者の様なもので上の人達に搾取され続けて不要になったら切り捨てられる存在だったと思うとボーデヴィツヒが過酷な人生を送ったのか容易に想像できた。

しかしだからと言って誰かを殺して良い理由にはならないがそれでも俺は心の何処かで彼女に少し共感を覚えた。

暫くして織斑先生は職場復帰をしたが俺を見て動揺していた事はよく覚えているが気にも留めなかった。しかし信念は揺らぐことなく授業は進んだ。

数日後、林間学校の一環でバスで海辺の旅館で一泊二日の合宿が決まった。目的地

に行くまでのバスは当初こそ1台で40人乗れるバズが4台用意されていたが半分の2台で事足りた。何故なら1クラス40人で4クラスの計160人だったがボーデーヴィツヒが死んだ事で1年生の生徒数が半数以上減ったからだ。

俺の席の隣に座る生徒は居ないと既に予想していたので予め座席の一番前にある一人用の席に座った。移動中は生徒達の雑談が最初こそ聞こえていたが途中で静かになった。やはり俺と一緒にいる事が気まずいと思う人が多かったのだろう。

バスは予定通りに目的地に到着、生徒全員が下車してこれから旅館でお世話になる従業員代表に挨拶をした。その後は各自に割り当てられた部屋に赴いて荷物を置いた後は自由行動だ。

「俺の部屋は1人部屋だよな」

相部屋を拒否されることは予想済みで驚き等は特に無かった。人殺しの肩書きが如何に重いのか心に押し掛かってくる。とはいえ与えられた自由行動を活かす為に外へ出た。

「海か……。オーヴァルリンクの海は赤かったがこの世界の海は美しい青だな」

外に広がる青い海の光景を見て感慨深く思った。オーヴァルリンクの水と海は目覚めの日にフェムトが大量に降り注いだ影響で汚染されて赤く染まっている。フェムトは水に拡散する性質を持っておりアーセナルはこれにより水に入ると停止して沈んで

しまう。

アウターの俺もフェムトを有しているがフェムト汚染を懸念して海に入らないようにしている。万が一、海に浸かって無毒のフェムトが変質、毒性を持ち環境汚染を引き起こしたら大問題になるからだ。

「部屋に戻るか……」

青い海を見て満足して部屋に戻って持参しておいたノートPCを取り出して機体と接続、パーツと武装の組み合わせを行った。前回の戦いで保存できるデータ数が増えて10個になったので4つは愛用していた黒鷲の初号機、四号機の再現をした。

残りの6つは高機動中距離射撃型と近接格闘特化型、狙撃戦用型と重装甲高火力型、重装甲格闘特化型と特殊攻撃特化型にした。これを主軸として任務や戦う敵に応じて武装を変えて戦う。

それだけでなく俺は元の世界に帰還する事を想定して現時点で作成できる稼働データを兼ねた報告書を作成した。帰還できる可能性は限りなく低いかもしれないが備えておいて損は無いと考えた。

報告書を作成し終わると夕食の時間になった。夕食は大広間で食べる事になっていたが生徒に考慮して自分の部屋でたった一人で食べることにした。

「アウターはこんな時に不便だが仕方ないな」

俺は大浴場を使わずに個室に用意されたシャワーを浴びた。俺が浴槽に浸かってフェムト汚染が発生したら大変な事が起きる可能性がある事を考慮して使わなかった。

「明日は何か起きそうな気がするな……」

そう呟き、今日のやる事は全て終わったので布団を用意して眠りについた。

オーダー14：紅椿と福音

林間学校2日目の朝、俺と3人の専用機持ち（オルコット、鳳、簪）は一般生徒と別の場所に呼ばれて浜辺から離れた所に集合したが何故か一般生徒の篠ノ之もいた。

本来であれば一般生徒達は浜辺で実習訓練をする事になっており専用機持ちは所属している国からのパッケージ運用で其々の集合場所は異なる。俺は彼女がここにいる理由を織斑先生に尋ねようとした。

「ちーちやーん!!」

その時、織斑先生の後ろから女性の大声が聞こえてきた。そこから兔耳のカチューシャを付けた女性が織斑先生に突進してきたが彼女は片手でそれを受け止めた。何かの茶番だと俺は黙って一部始終を見届けた。

ここに来た女性『篠ノ之束』はISを開発した張本人で事実上、この世界を創り上げた科学者と言つても過言ではない。

彼女の様子を見た所、人づきあいは極端で織斑先生と篠ノ之からの話は応じているがオルコットが話しかけても全く反応が無かった。この分だと俺に話しかける可能性は低いと思ったが彼女はこちらに声をかけてきた。

「いっくんだ！ 久しぶりだね！」

「恐れ入りますが私は貴女が認識している織斑一夏ではございません。それと機体の調査とこちらからの情報開示に関しては部外者の貴女に対してできません。お引き取りをお願い申し上げます」

丁寧ながらも奴を牽制する口調でそう述べたが彼女はそれに反応は見せなかった。アーセナルの情報は部外者に渡す事は出来ないからな。

俺は先程から上空にある物が気になっていたがどうやら妹の為に専用機を準備していたようだ。周囲からは身内だから狡いという声が聞こえたが束は人類は平等ではないと反論して彼女達を黙らせた。

一般生徒の言い分は理解できるがそれ以上に今の篠ノ之が開発者自ら制作した専用機を持つ事に危険を感じ取った。実力に合わない大きすぎる力は本人だけでなく無関係な者達を破滅させる可能性があるからだ。

篠ノ之に受理された専用機『紅椿』で第4世代という最新鋭のISだ。各国では第3世代の開発研究をしているにも関わらず超高性能な機体を身内の妹という理由だけで与えた事に呆れた。

彼女は紅椿の試運転をしているが新しい力に浮かれている事を感じ取った。こんな時に面倒な事が起きなければ良いと俺は思っていたがその思いは呆気なく崩れ去った。

「織斑先生！ 大変です!!」

山田先生がこちらにかなり慌てた様子で走ってきて織斑先生に何かを報告した。織斑先生は全生徒に実習を中止と旅館内で待機、専用機持ちは指定された部屋に集合する指示がでた。

事態の内容はハワイ沖で試験運用中だったアメリカとイスラエルが共同開発した第3世代軍用IS『銀の福音』シルバーイオコズメルが原因不明の暴走を起こした。

福音は一切の制御を受け付けずに日本に急速接近中との事だ。これに対しIS委員会の上層部はIS学園に対処を要請、日本政府及び学園上層部がこれを承諾したという内容だった。

（幾ら代表候補生がいるからと言って、現場の状況を見殺ししてよくこんな無茶を受け入れたな）

上層部がこの無茶苦茶な状況を引き起こした事に対する尻拭いを押し付けられたと思いつつ心の中で愚痴を零して福音のデータを確認する。

こいつは広域殲滅を目的とした高機動の特殊射撃型かつ範囲攻撃が可能な機体だ。しかも速く動くから始末に負えないなこいつは……。

状況を整理すると偵察は不可能でアプローチは1回しかできない。急を要する事態だがこの状況を打破する作戦を俺は頭をフル回転させて思案する。

「織斑先生、確認したいことがあります。日本の自衛隊がこの作戦領域に赴くと仮定して到着までに要する時間は分かりますか？」

「今すぐ出撃しても到着までには最低でも1時間はかかるぞ」

「分かりました。ありがとうございます」

それを確認して作戦を考える。

AUXのヘルメスを使って通過地点に移動して待機、福音に奇襲攻撃を仕掛ける。ここからは持久戦で俺が最前線で現場指揮をこなしつつ専用機持ち達は福音の足止め徹して自衛隊の到着まで粘る。長期戦闘を考慮すると耐久を回復できる装備が必須だな。

「織斑先生、自衛隊が到着するまでに福音の足止めができる作戦があります。宜しいですか」

俺は織斑先生に確認を取って作戦立案の了承を取った。

立案した作戦は俺のアーセナルに装備したAUXの追加ブースター『ヘルメス』を使って作戦地点まで専用機持ち3人を輸送する。ヘルメスのスピードならここから約10分で作戦領域に到着可能だ。

次に福音と戦闘に入った後、2人1組で足止めをしながら福音を作戦領域に留めさせる。この時、反撃は最小限に抑えて回避と防御に専念してエネルギーの消費を最小限に

する事も伝える。最後に自衛隊の到着を確認次第、専用機持ちは作戦領域から離脱するという内容だ。

「これが私の作戦です。質問等がございましたら挙手をお願いします」

「はい！ 自衛隊到着後の離脱ですが何故、専用機持ちだけですか？」

作戦内容を説明した後、質問があるかどうかを確認するとオルコットが挙手して質問した。

「専用機持ちの理由だが私は貴女方の安全を確保する義務があります。故に貴女達が安全領域に到着を確認してから離脱します」

彼女の質問に俺はそう答えた。傭兵は兎も角、代表候補生達は将来を担う貴重な存在で彼女達に何かあつては困ると思つたからだ。

「一夏!! その作戦に私が含まれていないのは何故だ!？」

「貴女を作戦に加えなかつた理由は3つあるのではつきりと申し上げます。

1つ、貴女は専用機を持つて間もない上に訓練機の使用歴を確認したがこちらの信頼に足る実績が全く無い。

2つ、貴女は紅椿の力を過信している判断した。

3つ、貴女はこの中で一番、浮かれているからだ!!」

俺は篠ノ之の質問に対して厳しくかつ威圧的な口調ではつきりと答えたがこの場に

いた人たちは震える。

俺が今まで経験してきた戦場は常に死と隣り合わせで信頼ができる相手と組まない
と自分だけでなく相手の命を奪うことになりかねないからだ。それ故にこの場で取り
除けるリスクは全て除去するのが最善だと思った。

「ぐっ、だが……」

凶星を突かれた篠ノ之は齒軋りをするが反論できなかつた。しかし束が作戦会議中
にも関わらずこの部屋に天井から入って来る。嫌な予感がするけど話だけは聞いてお
こう。

彼女の案によると展開装甲というシステムを調整すれば高速飛行が可能になるので
最適だと言った。しかし幾ら性能が高くて扱う人間が駄目だと機体の性能を発揮す
る前に破壊される可能性が極めて高いと思った。

束は駄々を捏ねて篠ノ之の作戦参加を要求するがこちらの知った事ではない。

「私は篠ノ之の作戦参加を拒否します！」

万が一、織斑先生が彼女の出撃を指示する場合、私は篠ノ之の身柄と命に関する保障
等は一切無い事に同意、彼女にその条件を受け入れた署名の記入を要求します！

篠ノ之が作戦に参加して怪我等をしても私は責任はとりませんが宜しいですか」

篠ノ之が出撃する可能性を考慮した上での提案を敢えて出した。もしも篠ノ之が何

らかな形で出撃してもこちらは彼女を助ける意思は一切無い事をここで明確にした方が良いと思つたからだ。出撃しないなら良いけどするなら……これ以上は考えないにしよう。

「織斑先生、私はその条件に同意して出撃します!!」

「……危険だと思つたら直ぐに逃げろ。」

今回は織斑が立案した作戦を10分後に実行する。各自、作戦の準備を始めろ!」

篠ノ之はこちらが提示した条件を受け入れた上で織斑先生に出撃要請を出した。

織斑先生はそれに反対することなく同意するも彼女に釘を刺した。この緊急事態を起こした人間が誰なのかがはつきりしたが作戦に支障が出ると考え、敢えて言わなかった。奴は紅椿の性能を過信していることがこれで証明された。

10分後、準備を終えた俺は黒鷲を展開するとそれに続いて専用機持ちも各々のISを展開した。

中央は俺で左隣に鳳とオルコット、右隣は簪と篠ノ之で其々の手を繋ぐ。俺はヘルメスで彼女達を作戦領域までの輸送をする。篠ノ之はあの条件に同意の上で作戦に参加するから選別代わりに連れて行くことにした。

「準備完了だ。イーグル、これよりオーダーを開始する!」

そう告げると黒鷲は一定の高度まで上昇、そこからヘルメスを使って作戦領域まで高

速で移動させた。何となく嫌な予感がすると思いながらも目的地まで飛行した。

オーダー15：亡霊の再来

予定より早く作戦領域に着いた俺達は福音が通過する予測地点で奇襲攻撃を仕掛ける準備を開始する。

狙撃が得意なオルコットは福音が通過する真下からの狙撃、鳳は射撃武器による足止めで更識は2人の支援攻撃をする作戦を指示した。

篠ノ之に関しては最新のハイパーセンサーで福音の監視をさせた。この作戦に参加する以上は最低限の役割を果たす必要があると思っただからだ。

「こちらイーグル、全員配置に付いた」

司令部に配置完了の報告をして福音の通過を待っていたが司令部から緊急通信が入った。

『織斑君！ 福音が突如出現した所属不明機と交戦しています！』

約10分後に作戦領域に入ります!!』

福音が所属不明機と交戦……まさか奴なのか!?

「全機に報告！ 福音は現在、所属不明機と交戦しているとの連絡があった!! 警戒せよ!!」

全員にそう報告して嚴重警戒を呼び掛けた。暫くすると福音がハイパーセンサーで確認可能な距離に入ったので状況を改めて確認する。

福音はソロモンから逃げているものの奴は瞬間移動の様に先回りをすると同時に斬りつけた。ソロモンは逃げようとする福音を追い回していて反撃を受けているが全く効いていない。

「最悪だ……」

俺は福音の状況を把握して啞然とする。機体は大破寸前で左翼が無くなっており墜落するのは時間の問題であると悟った。

ハイパーセンサーで得た情報によると作戦領域近くを航行していた謎の船が破壊されていった事も判明した。

「ソロモンと福音の戦闘に巻き込まれたか……」

こちらイーグル、福音を確認。機体は大破および左翼を失っています」

俺がそう呟いた時、福音の右翼が太刀で斬り落とされた。ソロモンはクロス斬りで止めを刺して福音を破壊、そのまま海中に落下していった。落下する福音から一番近くにいたオルコットに指示を飛ばす。

「オルコット、福音を回収して離脱せよ!!」

指示すると同時にオルコットは墜落する福音を受け止めて状態の確認をした。

「織斑さん、福音を保護しましたわ。機体は停止してはいますが操縦者の命に別状はありません。私は指示通りに離脱します」

「了解した。全機、作戦領域から離脱せよ！ オーダー完了だ!!」

全員に作戦終了を告げると同時にソロモンの元に向かった。奴がこちらに攻撃を仕掛ける可能性が高いので、厄役をやることにした。福音を確保したオルコットの離脱と同時に専用機持ち達は作戦領域から全速力で離れた。

『テンヲ……ケガス……オロカモノ……ニガサン!!』

ソロモンは機能が停止した福音に追撃を仕掛けようとするがそこに割り込んだ。

「そうはいかないぜ、亡霊殿」

俺はそう宣言すると同時に突撃銃を3発、発砲するもあつという間に斬りおとされた。

『ジャマヲ……スルナ……!!』

ソロモンは怒りを顕わにして俺に突進してきた。俺はLWのアグニフレイムをLPに格納しているシルバレイヴンに持ち変えて後方にブーストしつつ反撃する。マシンガンは近距離で撃った方が当たりやすく威力も上がるからだ。

「こちらイーグル、現在ソロモンと交戦中。福音を確保した専用機持ち達の安全領域到着を確認、自衛隊の到着までソロモンの足止めをします」

「織斑まで……」

司令室に報告をして通信を一方的に閉じた。

ここからのオーダーは俺の領域……相打ち覚悟で奴を倒す。RWの突撃銃をRPに格納したダインスレイブに持ち変えて覚悟を決めた。

「イーグル、これより亡霊^{ソロモン}を破壊する!!」

俺の宣言と同時にソロモンは接近して斬りかかるがダインスレイブで奴の太刀を受け止めて鏢競り合いに持ち込む。

「あの時とは違うぜー!」

俺は鏢競り合いに勝って奴を突き飛ばすと同時に袈裟斬りを叩きこんだ。クラス対抗戦時は性能が低かったが今は性能が段違いに向上している。更にマシンガンで追撃をしてソロモンに弾丸の雨を浴びせた。

『ツヨクナツテ……イルガ……マダタリン……!!』

ソロモンがそう呼びかけると同時に瞬間移動で近づいて斬りかかる。俺は鏢競り合いを仕掛けずに上昇して回避、奴の上からマシンガンを連射してダメージを与えた。ソロモンがまた攻撃しようとした時、奴の背後からレーザーが飛んできた。

「はああああっ!!」

奴の後ろを確認すると篠ノ之が紅椿でソロモンを攻撃、接近して斬りかかろうとして

いた。

「篠ノ之！ 今すぐ攻撃を中止してここから離脱しろ!!」

篠ノ之に離脱命令を出したが奴はそれに応じることなくソロモンに近接戦闘を仕掛ける。ソロモンは瞬間移動で篠ノ之の攻撃を回避して背後を取った。

このまま攻撃したら彼女に被弾するので迂闊に攻撃できない。

『テンヲ……ケガス……アカイツバサ……オチロ』

ソロモンは篠ノ之にそう告げると同時に太刀を振り下ろした。篠ノ之は紅椿の主衣装である刀の雨月と空烈を交差させて受け止めるもたった一撃で折れてしまった。

「そ……そんな!？」

彼女は武器が一撃で破壊された事に動揺するがソロモンは紅椿のウイングユニットに太刀を突き刺した。俺は奴が篠ノ之を攻撃する隙について斜め上からマシンガンを連射するが瞬間移動で回避された。

『オチロ……!!』

ソロモンは紅椿のウイングユニットを縦一閃で真つ二つに切断、シールドエネルギーが尽きた紅椿は強制解除されてしまった。篠ノ之を排除したソロモンは即座に標的を切り替えて俺に接近する。

「くそっ!？」

鏢競り合いに持ち込むが負けて横一閃の一太刀を浴びてしまった。奴に突き飛ばされた俺は態勢を立て直そうとした。

ソロモンはこちらを突き飛ばした直後に落下する篠ノ之の所に瞬間移動で近づいた。奴は篠ノ之から何かを奪い、彼女を海面に向けて蹴り落とした。

奴が取った物は金と銀の鈴が一对になってついている赤い紐で紅椿の待機形態だと推測する。

「捕食するつもりか!？」

俺はソロモンの捕食を止めようとブーストで接近をするが手遅れだった。奴は待機状態になった紅椿を自身の体に取り込んだ。

すると奴の全身が真紅と漆黒が混じった禍々しいオーラに包まれた。

「遅かったか……」

背中に冷や汗が流れている事を感じた瞬間、奴は今までとは比べ物にならないスピードで接近して斬りかかった。俺は奴の攻撃をまともに受けると共に機体の耐久値が30%以下に減った事に気付いて戦慄する。

「こいつは確か……無人機のコアを捕食していたな。奴はさつき紅椿のコアも捕食して強くなったのか!？」

ソロモンがコアを2つ取り込んで強化されている事に気付くと同時に奴に勝てない

事を悟った。

「やるしかないな……!!」

腹を括ってミラーージュを発動して分身を作った。分身は俺の意思を読み取ったのかソロモンに接近して動きを止めようとするが奴は分身の攻撃を回避しつつ攻撃を仕掛ける。

「動きは既に分かっている!!」

俺は鏢競り合いに持ち込んで動きを止めて分身を背後にいかせて引き分けに持ち込んだ。奴が後退した瞬間、分身がソロモンを羽交い締めにして動きを止める。

「これで道連れだああああっ!!」

奴の胴体にダインスレイブを突き刺すと同時に密着、機体の自爆システムを起動した。奴は逃げようとするが2人で抑えているので簡単に脱出できない。

ソロモンを相討ちで倒そうとした。機体が爆発する直前に奴が取り込んでいた2つのコアが共鳴しと思わしき反応が起きると同時に強烈な光が放たれた。

「なんだと……!?!」

目映い閃光に包まれた光景を最後に意識を失いかける。

(これでオーダーは達成した……。生きて帰れないがやむを得ないな……。)

少尉、私は少佐の所へ一足先に行きます)

俺は満足してあの世に旅立った戦友達の事を想いながら意識を手放した。
その直後、黒鷲と亡霊の反応がレーダーから消えた。

オーダー16：帰還

一夏は意識を取り戻して周りを確認すると見慣れた光景が映っていた。ここはソレムニテイ国立公園跡地で瓦礫等がフィールドに散乱している。

「ここは……元の世界に戻れたのか？」

彼はそう呟きながら立ち上がると近くに黒鷲が横たわっていた。それに乗り込んでシステムを起動、確認したら正常だったので通信機を立ち上げてオービタルに回線を繋いだ。

「こちらイーグル。応答願う」

『こちら准将、貴殿の通信を確認した。』

その声はイーグル!? 生きていたのか……!』

一夏の通信に応えたのは准将だった。彼はバレットワークスの団長で熟練のアーセナル乗りである。准将は行方不明だった一夏の声を聴いて一安心した。

「准将! ご心配をおかけしました。私は無事ですので今から本部に帰還します」

『分かった。念の為、近くに装甲の冠を迎えに行かせるからそれまで現在地に待機してくれないか。また何かあったら困る物でな……』

「分かりました。装甲の冠と合流して本部に帰還します」

准将は一夏の現在地近くでオーダーを遂行していた装甲の冠に彼の迎えと護衛をする伝達をした。一夏は装甲の冠が到着するまでその場で待機をする。

「懐かしいなあ……。あの時とはあまり変わっていないな。ここを離れてからそのまま時間が経っていないのか？」

彼は懐かしい光景に思いを馳せながらも時の経過がそこまで進んでいない事を感じていた。

それから数分後、准将のオーダーで一夏の護衛を受けた装甲の冠のアーセナル3機が彼のいる場所に到着した。

「イーグル！ 無事でよかった……」

彼にいち早く声をかけたエンプレスは一夏の無事を確認、一安心する。彼女は装甲の冠のリーダーで姉御肌の一面がある。

「一夏！ まったく、心配かけさせやがって……！」

エンプレスの後にクイーンは叫んだ。彼女はアーセナル乗りだがその前は会計士をしていた。噂では彼女をオーダーで僚機申請すると報酬が増加するらしい。

「無事で良かった……」

プリンセスは一夏の無事を知ってホッとした。彼女は記憶喪失で彷徨っていた所を

エンプレスとクイーンに保護されたいらしい。プリンセスの狙撃は極めて正確で可愛くて性格も良い。

「ご心配をおかけしました。詳しい話は本部でしますので護衛をお願いします」

一夏は装甲の冠の面々に頭を下げながらお礼を述べて本部に帰還した。彼が生存、帰還したとの報告を受けた解放旅団は大喜びで帰還パーティーを開催しようという話が出た程である。

本部に帰還した一夏は准将に行方不明だった日数、その期間で何をしていたのかという内容を報告した。幸いな事にIS学園で記録していたアーセナルの稼働データにより報告書の作成が予想よりも早く終わり、准将に提出した。

「そうか……報告書の作成、ご苦労だった。君が飛ばされた世界でフェムトの毒性が消えていたのか。このデータを元にして無毒化技術が進みそうだ」

准将は一夏が提出した報告書を読んで呟いた。本来であればオーヴァリンク外でアーセナルとフェムトを使うと処罰が発生するが今回は不可抗力でお咎めなしで済んだ。

彼がこの世界に戻れたのはソロモンが取り込んでいた2つのコアが共鳴して物理法則を超えた現象で生じたと一夏は推測した。

余談だがソロモンは彼が行方不明になっている間は一切、目撃されなかった。

「この報告書に君の出自に関する情報があるのは何故かな。理由が知りたい」

准将は報告書の内容で一夏の出自に関する事が目に入り、その説明を求められた。

「私が飛ばされた世界に関する調査をしていた時にドイツで開催されたイベントで誘拐された人物が行方不明になったという記事を見つけたので調べた所、その人物は私と同姓同名で興味が湧きました。

彼に関する身元を調査しましたが中学までの記録がありました。しかしそれ以降は見つかりませんでした」

一夏は自分と同じ名前の人物が誘拐されて行方不明になっていた事とその人物を調べた情報を話した。准将はそれを聞いて少し考え事をする仕草を見せた。

「世の中には似たような人物がいるから興味が湧く気持ちも分かる。一夏君、後はゆっくり休んでくれ」

「分かりました。失礼します」

准将に報告を終えた彼は部屋から出て行った。

（まさかとは思うが……彼が例の行方不明になった人物なのか？ だとしても彼は彼に変わりない）

一夏が部屋から出た後、准将はそう推測するがこれ以上の事は考えなかった。彼が無事戻ってきたことは事実なのだ。

「俺が行方不明になってから数週間しか経っていなかったのか。まあそんなもんだよな。」

「この世界に青空を取り戻すまで俺は頑張るぞ!!」

一夏は行方不明になっていた間の事をジョニー上等兵から聞いた。この星が青空を取り戻す、その日まで解放旅団と傭兵達は戦い続ける。それを聞いた彼は自分にはこの世界でまだ使命がある事を実感して戦うことを決意した。

それから数年後、一夏が持ち帰った異世界の稼働データからフェムト粒子が有する毒素を無力化する技術が開発と実用化、量産化された事により解放旅団が予想していた年数よりも早く青空を取り戻した。人々は彼を救世主と崇めたいらしい。

「思ったよりも早く取り戻せてよかった。これで俺の役割は終わったな」

一夏はあの世界で見た物と同じ青空を見ながら呟くと准将から依頼が届いた。「オーダーを確認。まだやる事は残ってはいそうだが悪くないな。」

イーグル、これより出撃する」

イーグル
一夏はオーダーを受領した。今日も黒鷲で青く染まった空を駆け回り人々に襲い掛かるイモータルに戦いを挑む。

一夏が行方不明になってからこの世界で数年が経過した。

箒は一夏とソロモンが消えた後、自衛隊により救助されたが背中から海面に叩き落とされた事が原因で脊髄が損傷、これにより腰から下が全く動かなくなり車椅子生活を送っている。

彼女はソロモンと一夏が戦死した事がトラウマになったのか魂が抜けた状態となっており今も入院生活を送っている。

セシリアはクラス代表の一夏が戦死した事で副代表から代表に昇格、彼の一件で力不足を痛感した彼女は学園の成績トップを収め続けてイギリス代表に昇格、モンドグロツソで優秀な成績を獲得した。

鈴音は一夏が戦死した事にショックを受けるもそれを糧にして勉学とISの操縦技術向上に励んだ末に中国代表に選ばれた。

簪は姉と仲違いをしたまま学園を卒業、日本代表に選ばれなかったが優れたプログラム技術を見込まれた大企業にスカウトを受けた彼女は大学を卒業した後、そこで働いている。

千冬は一夏が戦死した事でショックを受けて引きこもりになった。その後、彼女はI S学園の教師を退職したがその後の行方は誰も分からない。

山田先生は千冬が引きこもった事で副担任から担任に昇格、彼女の優れた教えもあり彼女の元で学んだ生徒は優秀な成績を収めた者が大勢現れた。現在でもIS学園で教鞭を振るっている。

東は自身が開発した無人機と紅椿が亡霊に一方的に二度も破壊された事で千冬と箒の連絡を絶ってソロモンの行方を追い続けている。しかしソロモンは一夏が消えてから一度も姿を見せていない。

彼女は永遠に見つからない亡霊を未だに求め、彷徨い続けている。

EXオーダー編

EXオーダー1：霧纏の淑女VS黒鷲

俺はデータ収集の為にアリーナに向かっていたがその途中で生徒会長に呼び止められた。

「一夏君、突然だけど私と模擬戦しない？ 貴方……弱いから私が稽古をつけてあげる」
生徒会長は挑発を交えて模擬戦を持ちかけた。大抵の人がこれを聞くと上から目線でムカツと来るがそんな安い挑発は通用しない。

「生徒会長から模擬戦を申し込まれるのは大変光栄でございます。弱い私に稽古をつけて頂きありがとうございます。アリーナで待っています」

俺は丁寧な口調で模擬戦を受け入れ、今の段階で誰も使っていない第3アリーナに足を運んで黒鷲アーセナルの調整、今回使う武器を選定を進める。

スペシャルの武装が使えるようになったのでその試射も兼ねた模擬戦ができると思うと心が躍った。スペシャルは特殊兵装で敵に異常状態を引き起こす癖のある武器ばかりだが使いこなせたら極めて強力な物となる。

(今回はアークガンとフレームスローアを中心に使おう)

アシッドガンの『オロチ』も使用できるがアーセナルを溶かす強力な酸を有しており大気汚染が発生する可能性を懸念してこの世界での運用はしない。

オロチが引き起こす毒状態は敵に蓄積ダメージを与えるだけでなく防御力が低下する効果がある。アーセナルすらも腐食させる毒をまき散らそうものならアリーナが使えなくなるだけでは留まらないと思ったのだ。

今回使うアークガン『テンペスト』はRP、フレイムスロアー『カグツチ』をLPに格納している。因みにSWはキャノン『オーガブレイク』でAUXは追加弾倉だ。

黒鷲の調整を終えて黒鷲を装着、ピットからフィールドに飛び出した。地面に着地して手に持った武器を見た。

(この模擬戦は、面白くなりそうな気がするな)

俺はRWの突撃銃アストライオスIIとLWの太刀アメノムラクモを構えた時、生徒会長がISを纏ってアリーナに降り立った。

「二夏君、お待たせ。あら、あの時と姿が違うからお姉さんびっくり!」

「これは私の機体の仕様なので気にしないでください。

本日は宜しくお願ひします」

生徒会長が使うIS『霧纏ミステリアス・レイディの淑女』は装着者の肌が多く露出されているがナノマシンで構成された水のヴェールで機体を覆うことで防御力を確保している機体で噂による

と一人で組み上げたらしいが詳しい事は不明だ。

相手が誰であっても俺は全力で戦う。そう決意をすると同時に試合開始のブザーが鳴り響いた。生徒会長は水を螺旋状に纏ったランス『蒼流旋』に内蔵されている四門のガトリングガンで銃撃を仕掛ける。

俺はブーストで後退しながらガトリングの銃弾を避けながら突撃銃で応戦するが生徒会長は左に滑るように動いて避けた。そこから突撃銃の最適射程から攻撃を当てる為に跳躍、距離を詰めながら銃弾を放った。

最適射程とは使用する武器が最も高いダメージが与えられる距離で突撃銃は中距離、マシンガンは近距離で当てると威力が上がる。これは使用する武器によって距離が異なる。

「甘いわー!」

彼女は銃弾を体を反らして避けると同時にガトリングで反撃しながらこちらに接近。俺は咄嗟に太刀で蒼流旋による突進攻撃を防いで鏢競り合いをする。

互いに力を込めるが引き分けて仰け反るだけだった。そこから突撃銃で生徒会長を牽制するが水のヴェールラストイ・ネイルによって防がれた。

更に彼女は水を纏わせた蛇腹ラストイ・ネイル剣を鞭の如く横薙ぎに振って追撃をする。蛇腹であるが故に相手と距離があっても攻撃が届くのだ。

「なにっ!？」

蛇腹剣は黒鷲の胴部を切り裂いて耐久値を削り取った。削られた数値は大した量では無かったがこの状態は好ましくないと思った。

俺は突撃銃で牽制しつつSWのオーガブレイクによる砲撃を放つも銃弾は水のヴェールで防がれ、砲弾は受け流されてしまった。接近戦を仕掛けようにもガトリングと蒼流旋の刺突、蛇腹剣の斬撃で困難だ。

生徒会長は接近戦を仕掛けないこちらを見て勝負を決めようとガトリングで掃射をしながら瞬時加速で一気に接近。左手に持った蛇腹剣を振り回して逃げ道を塞いだ。

「決めるわ!」

彼女が接近戦を仕掛けた時、俺はこれをチャンスに変えるべく行動する。

「今こそ試す時だな!」

そう宣言すると同時にRWの突撃銃をRPに格納したテンペスト、LWの太刀をLPに格納したカグツチに持ち替えた。生徒会長は武器を持ち替えた事に一瞬、驚いた。

「武器を持ち替えた!?! でもっ!」

彼女はそれに構わず瞬時加速で急接近するもそれが仇となる。RWのテンペストのトリガーを引いた瞬間、銃口から電気が放たれた。更にLWのカグツチのトリガーも引いて炎を放った。

「えっ!？」

生徒会長は電撃と炎が襲い掛かった事に動揺するが直ぐに瞬時加速で後退しようするも何故かそれが出来ずスラストスターが爆発を起こした。俺は彼女が戸惑っている事に構う事無く容赦なく電撃と炎を浴びせ続ける。

「なにっ、どういっうこと!？」

生徒会長は異常が発生した原因を確認して愕然、霧纏の淑女はスラストスターがエネルギーを過剰に取り込んで損傷、使用不可になってしまった。

そんな事が起きていた事を知る術が無い俺は弾が尽きるまで電気と炎を只管に浴びせる。彼女が距離を離そうと動くたび、それに合わせてこちらも移動して一定の距離を保ち続けた。

生徒会長は蒼流旋の刺突で反撃するもそのダメージを気にすることなく攻撃を続ける内にテンペストの弾が無くなった。その瞬間、彼女はスタン状態になった。

「ケリをつける!」

弾切れになったテンペストを生徒会長に投げつけると同時に太刀をRWに装備してブーストで接近する。身動きが取れない彼女は横一閃の一撃をまともに受けてしまった。

機体が正常であれば水のヴェールで防御できたが制御不能に陥り、身動きが取れない

今の状態では防げなかった。これにより彼女のエネルギーは尽きて勝負が着いた。

「私の勝ちですね。ありがとうございます」

生徒会長に勝利を告げた後、戦闘データをまとめる為にアリーナから去った。

その夜、俺は自室で今回の戦闘データを確認すると彼女が纏っていたナノマシンで構成されている水のヴェールに異常が起きていた。調べると電気と炎による外部の異常な環境下に晒された事が原因だった。

「ナノマシンで構成された水のヴェールか……。アークガンとカグツチの同時攻撃を受け続けたら異常が起きてもおかしくないよな……」

ナノマシンは精密機器なので極端な高温や電気刺激に弱いと思った。この世界でアークガンの電撃とカグツチの炎を受ける事を想定した精密機器は存在しない。

アーセナルが使っているアークガンは浴びせ続けられれば大型イモータルをスタン状態にできるのでISが搭載しているナノマシンを狂わせることは造作もないと思った。

またカグツチの炎はイモータルやアーセナル戦を想定しているので極めて高い温度だ。霧纏は水蒸気爆発を起こす清き^{クリア・パッション}激情が使える。水蒸気爆発を起こせる温度までなら制御は可能と思われるがカグツチが放つ火炎の温度は想定外だったと推測した。

スラスターが爆発した理由は瞬時加速する際に後部のスラスター翼からエネルギーを放出して内部に取り込む段階でアークガンの電気とカグツチの炎も一緒に取り込まれていた。それが機体の許容量を一瞬で超えてしまったと俺は考えた。

この模擬戦を通してスペシャル武器の使用を模擬戦の時は控えようと思った。

「知らなかったとはいえ……これで勝利したのはあまり良い気分ではないな」

武器の特性が勝利に貢献していた事に複雑な気持ちになった。

俺が次に生徒会長と戦う時はスペシャルを使う事無く勝利をすると心に誓って眠りに着いた。

EXオーダー2：もしもクラス代表決定戦で一夏が白式を使ったら

一夏はこれから行われるクラス代表決定戦に備えてアーセナル黒鷲の最終調整をしている。黒鷲の装備は騎士を模したオルサという初期装備で性能は低い。それでも彼はこの装備と共に戦って来たことは確かなので信頼はあった。

「最終調整と点検、完了。これで何時でも戦える！」

一夏が黒鷲の点検と調整を終わらせた瞬間、千冬が突然ピットに入ってきた。

「織斑、いきなりだがお前が使うISをピットに置いた。早く来い！」

彼女は入室して早々、とんでもない事を発言した。千冬は弟が愛用している黒鷲ではなく彼女が独断で用意させたISを使えと言ったのだ。これに一夏は異議を唱える。

「恐れ入りますが私は貴女が用意したISを使うことはできません。未調整かつ試運転を一切していない物を使う事は大変危険だと思います。」

稼働データが目的でしたら今回は黒鷲を使います。貴女が用意したISの稼働データ収集は決定戦の後でも出来ます。

織斑先生……それでも不服ですか？」

「私に反論するな！ とにかく着いて来い！」

一夏が述べた意見に千冬は怯んだが強引に彼をピットへ引つ張り込んだ。彼女はピットに自身が用意したI S白式を一夏に装着するよう促した。

「織斑、白式を使え。これは命令だ！」

千冬は彼に白式を使うように指示を出したので一夏は渋々とそれに従って白式を装着する。

「体を動かせ、すぐに装着しろ。時間がないから初期化フオーマットと最適化フィッティングは実戦でやれ。分かっ
たな！」

「……分かりました」

彼は不満ながらも返事をして出撃した。アリーナの上空に到着すると蒼い雫ブルー・ティアーズを纏ったセシリアが待っていた。

本来なら初期化と最適化は実戦ですべきではない作業だが白式の搬入が遅くなったのでやむを得ない。尤も、白式で彼が全力で戦えるのかは疑問だが……。

「逃げずに良く来ましたわね」

セシリアは一夏を挑発するが彼は全く反応しない。彼にとって使い慣れた黒鷲ではなくいきなり用意された白式を使う羽目になったので試合が始まる僅かな時間で機体スペックの確認に集中している。

（ブータ確認。武装は……太刀がたったの1本だど!? これは正気の沙汰じゃない！

数値上では高い機動性とスピードはある。冗談じゃないぞ！ これならオルサを使った方が良くに決まっている!!）

一夏は白式のカタログスペックを見て内心で激しく憤慨する。機動性とスピードは高いものの武装が刀1本という素人が扱うには余りにも酷な代物だったからだ。

オルサで戦うことを前提としていた彼にとっては堪ったものではない。

「無視とは無礼ですわね！」

私が一方的な勝利を得るのは当たり前のこと。ですから、惨めな姿をここで晒したくなければ、今ここで謝るといふなら許してあげないこともなくつてよ」

セシリアは反応しない一夏に対して更に挑発しながらレーザーライフルを構えるが反応しなかった。

（それにしても織斑先生は素人にこんなピーキーな物を実戦でいきなり使えとはよく言えたものだ……。）

この試合が終わったら徹底的に抗議してやる!!）

一夏は目の前にいる対戦相手よりも白式を実戦でいきなり使えと言った千冬に怒っているようだ。

しかし彼がそんな事を考えていた事をセシリアは知らなかった。

試合開始を告げるブザーが響くと同時に彼女はライフルのトリガーを引くと銃口から青い一直線の光が一夏に向けて放たれた。

「くっ!?!」

一夏はレーザーを左に動いて辛うじて回避した。黒鷲を使っている彼ならここで突撃銃で反撃をするのが白式に射撃武器が搭載されていないので不可能だ。

「スピードはある。如何せん武器が刀一本とは厳しいぞ!」

一夏は白式のスピードを活かして回避しながら接近する隙を伺うもセシリアはそれを許すほど甘い相手ではない。彼は銃火器が戦いにおいて必須な物だと痛感。

それと同時に刀だけで戦っていたソロモンが極めて強力な相手だった事を改めて実感した。

「私の事を舐めていますの!?! 私のブルーティアーズで円舞曲を御覧なさい!」

セシリアは一夏が攻撃しない態度に苛ついて4つのビットを射出、彼の死角にビットを配置すると同時に攻撃を開始した。白式の性能に慣れていない彼はビットの砲撃を回避できずに全ての攻撃を受けてしまった。

「くっ!?! これではまともにならなかつくことすらもできん!」

一夏はビットの攻撃と機体の性能に翻弄されて思うように戦うことができない。黒鷲を使えば少なくとも無様な醜態を晒さず善戦していただろう。

ブーストしてレーザーを回避するがこのままでは負けるのは時間の問題だ。ビットの攻撃が終わった瞬間、セシリアは狙撃をして彼に接近する隙を与えなかった。

一夏はセシリアの攻撃をひたすら躲し続けるがこのままでは鬺り殺しされると悟った。

(ここは勝負を捨てて自爆特攻を仕掛ける!!)

彼は自棄になって白式のブーストの出力を最大にしてセシリアに突撃を敢行した。無謀だが試合を早期で終わらせるといふ点においては理に適っていると見える。これはあくまでも試合なので負けても死ぬ訳ではないと彼は思ったのだ。

「ブルーティアーズは6つありましてよ!」

セシリアが告げると同時に2つのミサイルがスカートアーマーから射出された。ミサイルは一夏に向けて迫ってきた。彼は不意を突かれたような大きな叫び声を上げた。

「なんだと!? うわあああああつ!!」

ミサイルは一夏に直撃、爆風と煙が巻き起こった。この一撃が決定打となるかと思われたが煙の中から光が放たれた。

「なんですの! まさか……貴方は初期設定で戦っていましたの!」

セシリアは一夏が使っている白式が最適化した事に驚愕をみせた。彼は今まで初期設定で戦ってここまで逃げていたのだ。自身の慢心があったとはいえ彼に秘められた

才能は計り知れないと悟った。

「エネルギーは辛うじて残っている。ワンオフ^{単一}・アビリティ^{仕様能力}の零落白夜が使えるのか。

武装が雪片式型に変化しているが射撃武器は無しか……」

一夏は最適化した白式のデータを一通り確認して溜息を吐いた。最適化して射撃武器が追加されると思ったが期待外れだった。彼は単一仕様能力の効果を確かめる為に零落白夜を発動した。

「なっ!? 白式のエネルギーが減っているだっ!!」

零落白夜を発動、雪片式型にレーザー刃が生成されると同時に自身のエネルギーが減少する。彼は慌てて解除しようとしたがその前に白式のエネルギーが尽きた。

『試合終了! 勝者、セシリア・オルコット!!』

クラス代表決定戦はセシリアの勝利だ。彼女は相手の自滅に近い勝利を得たことに啞然としていた。

零落白夜はISのシールドバリアーを斬り裂くことで相手のシールドエネルギーに直接ダメージを与えられる白式最大の攻撃能力である。しかし自身のシールドエネルギーを消費して稼動するため、使用するほど自身も危機に陥ってしまう諸刃の剣でもある。

今回の場合はエネルギーが殆ど残っていない状態で発動したのでエネルギーがあつたという間に尽きたのだ。

「ありがとうございます」

一夏はセシリアに一礼した後にピットに戻った。彼女は呆然としていたが直ぐに正気を取り戻してピットに戻った。

「織斑先生、貴女に訊きたいことが3つあります！

1つ目は初心者なのに何故、白式というピーキーな機体を与えたのか。

2つ目は自爆武器同然の刀しか装備が無いのか。

3つ目は白式は何処の企業で開発されたのか。

私が提示した3つの質問に今すぐ答えてください。答えが無い、または回答の内容次第では白式を一切使用はしません!!」

一夏は口調は冷静ながらも怒りに満ちた表情で織斑先生に質問を投げつける。

彼女は彼の質問に答えようとするが一夏の剣幕に圧倒されてすぐに答えられなかった。

「沈黙ですか……分かりました。今後、私は白式を一切使いません。

それと白式の開発元についてはこちらで調べます」

一夏はそ言い残してピットから去った。

その後、彼は白式が千冬と何者が裏で倉持技研と繋がりがあったことを突きとめた。更に白式の開発を優先した為に日本の代表候補生の機体開発を打ち切っていた事も判明した。

「こんなこと……絶対許させねえ!!」

この落とし前、必ずつけてやる!」

一夏はこの事実に憤慨した。自分の意志を蔑ろするだけでなく関係ない第三者にまで被害が及んでいたのだ。

彼はこの件を山田先生とIS学園の上層部に直接報告をした。ここに織斑先生が介入したら揉み消されると思ったからだ。

その結果、千冬は独断行動により減給と担任降格、山田先生は千冬に代わって1組の担任に昇格した。

白式は倉持技研に返却、ISの開発権限も剥奪されてしまったらしい。開発が打ち切られた専用機は後日、別の企業で開発が再開される事が決まったようだ。

これは一夏に起きうる可能性の1つだと言えるかもしれない。

EXオーダー3：福音VS亡霊

ハワイ沖で軍用に開発されたIS『福音』が試験運用が開始されようとしていた。アメリカ国籍の空母に福音が甲板にある。白銀に輝く全身装甲と大天使を彷彿させる大きな翼型のブースターが特徴だ。

「こちらナターシャ、福音の試験運用を開始します」
『了解。これより、データ収集を始める』

福音のテストパイロットを担当するナターシャ・ファイルスは管制室に報告、福音を起動する。福音はアメリカとイスラエルが共同で開発した第3世代軍用ISだ。

武装は36門同時展開可能な主砲『銀の鐘』シルバークロウである。これは高機動の射撃特化型で高速で移動しながら広い範囲を攻撃する為に開発されたISだと考えられる。

福音は甲板から飛翔、大空を自由自在に駆ける。操縦者のナターシャは福音の機動性は良好、操作性は問題ないと判断して飛行を続ける。直線飛行や旋回、体を回転させる等のアクロバティックな飛行をした。

ナターシャは予定通り福音を動かしただ後に一度、空母の甲板に着艦しようとした時、ISに異常が発生した。

「こちらナターシャ。管制室、福音に異常が発生！ 制御不能!!」

『管制室より緊急報告。こちらからも福音の制御が不可能！ ISのコアネットワークに外部からの侵入を確認!』

ナターシャは福音の異常を訴えると同時に管制室も外部ネットワークからの侵入を報告。侵入者からのハッキングに抵抗するも福音の制御を戻せなかった。

福音は制御下から外れて暴走、そのまま試験空域を離脱して日本に向かって一直線に進んだ。

（この子は一体どうなってしまうの……）

ナターシャは暴走する福音を装着したまま自分の意志を無視して空を飛び続ける。その時、後方から強烈な衝撃が背中に襲い掛かってきた。

「うううう!! 何なの一体!?!」

福音は振り向くとボロ布と継接ぎの黒い装甲を纏った禍々しい姿のロボットだ。両手に2本の小ぶりの刀とパイロンに大振りの刀が2本、合計4本の刀を持つており半壊しているようだ。前と違う点はボロ布の一部が継接ぎの装甲に置き換えられており、背中にミサイルポッドらしきボックス型の武装が追加されていた。この機体はソロモン……亡霊という異名を有している不気味な存在だ。

「何……」

ナターシャの背中に冷や汗が流れている。ソロモンは福音の背中に急降下蹴りを不意打ちで喰らわせたのだ。敵と認識した福音の攻撃システムが起動、彼女の意志に背いて反撃する。

『天を穢す醜い翼……墮ちろ！』

ソロモンは瞬間移動で突進する福音の背後に移動、RWの太刀を横一閃で振り、左翼に傷を入れた。斬撃を受けた福音は急上昇して太陽を背にする。これにより敵の視界を奪おうと試みたが無意味だった。

『甘い！』

瞬間移動で福音の背後を取ったソロモンは左踵落としを福音に叩き込んだ。福音は落下するも途中で態勢を立て直して主砲を展開、ソロモンに狙いを定めて発射した。

『その程度！！』

亡霊は迫りくるレーザーを両手に持つ二振りの太刀で斬りおとしながら瞬間移動で砲撃を全て防いだ。そこからソロモンは福音に急接近。LWの太刀を縦一閃で振り下ろし、福音の胴体に切り傷を負わせる。ソロモンは更にクロス斬りを叩き込んで福音に大ダメージを与えた。

福音は亡霊の攻撃を止めるべく全砲門を展開、体を回転させながら主砲からレーザーを発射した。ソロモンはブーストで後退しながらレーザーの嵐を刀で防ぎながら瞬間

移動で回避した。

「何なのこいつ!? さっきから福音の攻撃が全く効いていないなんて……」

ナターシャはソロモンの圧倒的な力を前に脅威と僅かな希望を抱いた。福音は軍用に開発されており出力も並みのISを凌駕しているが全く効果が無い。彼女は制御不能になった機体を亡霊が止めてくれるという微かな望みを持つようになった。

『天に唾を吐く愚者よ……その身をもって人柱となれ!』

ソロモンは背中のミサイルポッドからミサイルを全弾、福音に向けて発射した。多数のミサイルが福音に迫るが銀の鐘により全て破壊された。破壊されたミサイルにより黒い煙が発生、視界が遮られた。

「センサーに異常!?!」

福音は煙に覆われた瞬間、ハイパーセンサーから異常が発せられた。亡霊の放ったミサイルは爆発と同時にレーザーとセンサーを妨害する粒子が含まれていた。ハイパーセンサーも例外ではなく機能に異常が発生しており敵の補足が不可能になった。

「くっ……!!」

彼女の下部に強烈な衝撃がはしる。左翼と右脚、背中に亡霊の斬撃を喰らった。レーザーと視界が効かない状況での攻撃は凄まじい恐怖をナターシャは感じている。

福音は煙から脱出してそこに主砲を展開してレーザーを放った。ソロモンはレ-

ザーを受けたにも関わらずに無傷で突破、クロス斬りで福音に反撃して深い傷を負わせた。亡霊は容赦なく福音に攻撃を仕掛けようとブーストで接近する。

福音は亡霊から逃げる為に海面近くまで高度を下げて後退しながら全砲門を展開、主砲からレーザーを乱射。ソロモンは高度を福音と同じにして追跡をするが目の前にレーザーの嵐が迫る。

亡霊は前に来た船の側面の背後に瞬間移動した。その船をレーザーの嵐を避ける盾代わりにして攻撃を全て防いだ。

ソロモンの盾になった船は密漁船でレーザージャマーを搭載して機影が映らないよう細工を施した。しかしソロモンと福音の接近に気付かず、近くを通過する要因となった。密漁船はレーザーの直撃により穴だらけとなり船体が大炎上、沈没をしていく。

『近くにいたお前が悪い』

ソロモンはそう言い残して上昇、福音を探すも姿を見失った。福音の行方を追うために自身に取り込んだISのコアを介してコアネットワークに接続、福音の位置を特定した。

『見つけた。天を穢す愚者の翼……逃がさんぞ！』

亡霊は福音の座標に向けてブーストで前進した。

同時刻、ナターシャはソロモンから逃げた事に安堵するも機体の状況を確認する。福

音は深刻なダメージを受けており出力が徐々に低下している。特に左翼の損傷は致命的で通常の出力から90%近く低下を示していた。このままでは墜落するのも時間の問題だ。

(このままだとこの子は墮ちる……。どうすれば)

彼女がそう考えていた時、背後から迫る物体をハイパーセンサーが補足した。迫る物体はソロモンだ。

『逃げられると思うな!!』

ソロモンは深手を負った福音に止めを刺す為にブーレストで接近する。このままでは追い付かれてしまう。

福音の運命は如何に!?

EXオーダー4：ゼルクロアが乱入したらどうなるか

クラス代表戦は各クラスから代表1名を選出、リーグ戦方式で試合をして勝利数の多い者が優勝となる戦いである。

初戦は一夏と鈴音の試合で彼は中距離からの射撃戦に徹して鈴音を寄せ付けないようにしている。彼女が使用している機体は近距離格闘が得意で敵の得意分野での戦いは不利だと考えたのだ。戦いは佳境に入り、一夏は接近戦を仕掛けようとする。

「そろそろケリをつける!」

彼は跳躍して落下とブーストした勢いを利用、鈴音に近接戦闘を仕掛けた。その瞬間、一夏と鈴音の間にアリーナのシールドを貫通したレーザーが地面に打ち抜かれた。

その後、黒い何かが地面に衝突して大きな土煙を巻き上げた。

「何だ…」

「何なのよ一体、あたし達が戦っているのにどういいうつもり!?!」

土煙が晴れると共に落下物が黒い人型ロボットであることが判明した。そいつは両腕が切断されており、体の関節部分から激しい火花が飛び散っている事が分かる。更に装甲もボロボロで崩壊寸前だ。

ボロボロのロボットは何故か彼等を無視してアリーナの中央に何かから逃げるように移動をする。バリアの穴から巨大なレーザーが通過。ロボットにそれが直撃すると同時に光に包まれる共に塵すらも残すことなく完全に消滅した。

「何……今の!?!」

「上部からレーザー攻撃!?!」

彼等は先程のレーザーが照射された方向に目を向けた時、黒い人型ロボットに酷似した何かがあった。真紅の装甲を身に纏っており周囲に片方に4つずつ、計8つの物体が浮遊している。人型でアーセナルよりも二回り大きくゴツイ太い腕と鋭い爪、凶暴な野獣を彷彿させるような禍々しい姿が特徴だ。

「データを確認……不明だど!?!」

まさか、新種のイモータルなのか!」

一夏は乱入した敵の正体を調べたがデータの無い未知の存在で何も分からなかった。彼は新種のイモータルと判断する。

この推測は当たりで乱入者の正体は『ゼルクロア』である。ゼルクロアは最近確認された新種の大型イモータルで今までの大型種とは比較にならない戦闘能力を有している。人型ロボットを一撃で消滅させた極太レーザーはその一端に過ぎず、途方もない大きな力が秘められている。

ゼルクロアは黒いロボットを消滅させて直ぐにアリーナのフィールドに着陸、大地を揺るがす程の強烈な咆哮を上げた。

その瞬間、一夏と鈴音は身動きが取れなくなった。まるで体が麻痺しているようだ。

「機体の制御が……!?!」

「どうなってるの、これ!?!」

ゼルクロアの咆哮は範囲内にいる敵を麻痺させる効果がある。厄介な事にその範囲は広く、咄嗟に避けるのは困難だ。ゼルクロアは身動きが取れない一夏にアシッドクローの斬撃を連続で繰り出した。

「ぐわあああつ!!」

一夏にアシッドクローの連撃をまともに受けてしまった。機体の耐久値が全て削られて戦闘不能。機能を停止した彼の機体は落下して地面に落ちた。彼は停止した機体から脱出しようとした瞬間、ゼルクロアの極太レーザーにより機体もろとも跡形もなく彼は消滅した。

「いちかあああつ!!」

鈴音は一夏が目の前で死んだ光景を見て発狂すると同時にスタンが解除された。ゼルクロアは発狂する鈴音に360°ローリングレーザーを放った。これは範囲攻撃で回避は困難だ。

鈴音は回避しようとするも間に合わずにレーザーを真面に喰らってISと一緒に消えた。ISは操縦者を守る為に絶対防御を発動するがゼルクロアのレーザーは余りにも威力が強すぎて絶対防御のバリアは無意味だった。

アリーナにいた2人を排除したゼルクロアは先程のレーザーをもう一度放った。レーザーはアリーナのバリアを貫通、観客席に直撃して逃げていた生徒達はあつという間に姿を消した。床にはレーザーの痕がハッキリと残っているが血痕は見当たらない。

「嘘……そんな……。いやあああああ!!」

「一夏……!!」

管制室にいる山田先生は生徒達が死んだことに絶叫、千冬は弟の死に激しく動揺するがゼルクロアの攻撃は続く。

奴は管制室に向けて極太レーザーを照射してそこにいた2人ごと破壊した。管制室だった所は瓦礫の山に変わり、山田先生と千冬はそのレーザーに呑み込まれて完全に消えた。

強烈な咆哮を発したゼルクロアは全身から赤い誘導レーザーを放出、観客席に生き残って逃げていた生徒を一人残らず殲滅する。壊滅したアリーナから空へ移動、再び大きな雄叫びをあげて頭上に閃光を走らせた。

上空から突然、真っ赤に燃える隕石が勢いよく落下してきた。その隕石はIS学園の

敷地全体に降り注ぎ、落下地点の周囲にあつた施設を破壊、甚大な被害を齎した。

そこに教員部隊が到着。悲惨な現場を見て発狂する教師もおり大混乱の渦に包まれている。

「なんだこれは……」

「嘘でしょ……!?!」

「兎に角、我々で止めるしかない！ 行くぞ!!」

教員部隊のリーダーは皆に発破をかけてゼルクロアを包围する。しかし奴は強烈な咆哮を放つて囲っている教員部隊の動きを止めてローリングレーザーでまとめて排除した。IS学園を蹂躪、目の前にあるものをひたすら破壊して瓦礫の山に変えていく。

「これ以上はやらせない!!」

そこへ楯無が背後からゼルクロアに不意打ちを仕掛けるが誘導レーザーとアシッドクロアの連撃と極太レーザーで呆気なく散った。

彼女は水のヴェールで攻撃を受け流そうとしたが誘導レーザーにヴェールが耐えられずに崩壊、そのままクロアの連撃と極太レーザーをまともに受けてしまった。

学園最強の生徒会長ですらも止められず、世界最強のブリュンヒルデを一瞬で失った学園はものの数時間で瓦礫の山と化した。残っていた教員部隊も抵抗するも虚しくローリングレーザーとクロアの連撃で全滅した。辛うじて生存していた生徒すらも奴

は容赦なく全員を誘導レーザーで殺害、IS学園を飛び去った。

IS学園から飛び出したゼルクロアは日本の都市部に入ると同時にメテオで高層ビル等の建物を破壊。都市は大混乱となり人々は逃げ惑うが崩壊する建物の瓦礫に潰されていく。ゼルクロアは2種類のレーザーで残った建物や瓦礫を更に破壊、同時に残っている人間を容赦なく殲滅する。

邪魔するモノたちは強烈な咆哮でスタンさせてからアシッドクロアの連撃と誘導レーザーで排除する。遠距離から高性能の大陸間弾道ミサイルが多数、放たれた。

ゼルクロアは巨体に似合わない素早い動きで回避しながら誘導レーザーで弾道ミサイルを全て撃ち落とした。自身を排除しようとする戦艦や戦闘機を極太レーザーで塵に変えて砲撃する戦車はアシッドクロアで粉碎、破壊の限りを尽くした。

アシッドクロアは爪に有毒な化学成分が含まれている。これが大気中に拡散、深刻な大気汚染を日本を中心に引き起こした。

この汚染は人体に深刻な悪影響を与える上に癌や異常な皮膚や呼吸気管の炎症等の病も引き起こす。これが原因で全世界の人口の3割が命を落とした。

こうした事態に各国はゼルクロアを排除する為に大規模な連合を結成。全戦力を

持つて排除を試みるも無駄だった。あらゆる戦力は奴を前に呆気なく消滅した。

イギリスが用意した衛星兵器『エクスカリバー』の攻撃を避けて極太レーザーで反撃。それを容易く撃ち落とした。エクスカリバーは墜落、イギリスの海に落ちて周辺の街や地域は津波に呑み込まれて多くの人が亡くなった。

連合軍はこの状況に狼狽えながらも反撃をする。亡国企業と名乗っていたテロリストも組織を守るために協力。実働部隊の精鋭が全員でゼルクロアに戦うも誰一人も帰還しなかった。そして連合本部もゼルクロアの攻撃で壊滅、瓦礫の山に変えた。

天災と呼ばれた束ですらも奴の前では無力に等しく数秒で彼女はこの世から去った。彼女はゴーレムという無人ISを全て戦力として差し向けたがゼルクロアの攻撃により一瞬で全滅。

束も自らの力で抵抗するも呆気なく敗れた。最期はアシッドクロウの連撃で体を八つ裂きにされた後に極太レーザーでこの世から永遠に消え去った。

人間を根絶やしにした後、ゼルクロアは世界各地をさ迷って目に移る生命体を全滅させていった。

この世界に残っているのはゼルクロアだけだ。世界を破壊した絶対強者は天空に勝利の雄叫びをあげた。

もしもこの破壊神がこの世界に来たら破滅は免れない。

EXオードー5：イモータル総進撃（前編）

IS学園を瓦礫の山にした大型イモータル『ゼルクロア』は都市部への侵攻を開始する。人々は上空に姿を現した異形の何かに恐怖と未知に対する好奇心が生まれ、見物人たちも少しずつ表れる。

「あれ何だろう?」

「新しいISかな?」

人々は興味津々で見しており、スマホのカメラで撮影している。ゼルクロアはそれに気付いて視線を人々に移して観察。その反応を目障りと思ったのかローリングレーザーを放つて見物人を葬り周辺のビルも薙ぎ払う。

「ぎゃああああつ!!」

「逃げろおおお!!」

ゼルクロアの攻撃をみた人々は火の粉を散らすようにその場から逃げだす。しかし奴はそれを見逃す事なく誘導レーザーを発射、逃げ惑う人を容赦なく撃ち抜いて一人残らず殺害した。

ゼルクロアはアシッドクローで近くの建物や車を次々と粉砕、道路や標識を容赦なく

薙ぎ倒して街を蹂躪する。人々はこの惨劇を世界に発信しようとするが電波妨害でスマホ等の通信機器が使えなくなった。フェムトは一定以上の濃度になると長距離通信に多大な障害を及ぼす。ゼルクロアが無差別に撒き散らした粒子の濃度はその基準を10倍だ。

奴は都市部に留まることなく目についたものを無差別にレーザーで撃ち抜き、クロアの連撃を繰り返して更地に変えた。現代でこの惨状が起きたら直ぐにネットに拡散すると思われる方もいるかもしれないが粒子濃度が高すぎて通信機等のネットワーク接続できる物が全く使えない。

故に隣の県はこの事を知る術は無く政府の初動も遅れてしまった。日本の政治が行われる国会議事堂もゼルクロアの無差別攻撃に巻き込まれて施設は崩壊。その日は総理大臣がここで会議をしていた事が仇となり大臣や政府の役職者全員が一気に亡くなった。

ゼルクロアは縦横無尽に暴れまわり建物を容赦なく粉砕、逃げ回る人々をレーザーとクロアで次々と玉砕。そして自身から発した強烈な咆哮は大喝采を彷彿、周辺の建物を吹き飛ばした。

奴の破壊という名の祭りは始まったばかりだ。全てを破壊するまでゼルクロアは止まることは無い。空から無数の隕石を呼び寄せて周囲の物を瓦礫の山や荒地に変え続

ける。

そして奴は空を見上げて今までよりも大きな咆哮を発して何かを呼び寄せた。ゼルクロアはどうやら自身のいた世界からイモータルを集めようとした。

それに応えるかの様に青空が突然、黒い雲に覆われると共に世界中の上空から何かが無数に飛来し始めた。奴は咆哮を発した後に破壊活動を再開、都市部を焼け野原に変えて進撃の狼煙を掲げた。

中核を失った日本の滅亡は傍に来ているが奴は全てを破壊するまで暴れるだけだった。

アメリカの首都ワシントンに四脚を駆使した動きが特徴の大型イモータル『ガンフォート』が大地を抉りながら着地する。元々は掘削機械だというその四つ脚の先端に立派な杭が装備されている。其々の脚部に装備された機関銃から弾幕を展開。周辺の建造物に弾が命中、穴だらけにしてガンフォートは跳躍してその建物を踏み潰すと同時に着地した。

それを合図にするかのように別の都市部に大型レーザーキャノンが搭載された緑色

の同型機『RT： α 』と α のキャノン砲に羽を彷彿させるように展開された大型ミサイルを搭載した『RT： β 』、 β を赤くした『RT： Ω 』も上空から姿を現して建物を踏み潰すように着地して侵攻する。

α はキャノン砲で近づく戦闘機の編隊を消滅、 β は羽の形状をしたミサイルポッドで攻撃ヘリや残存する戦闘機を撃墜した。 Ω は地上から迫る戦車隊に自ら接近、自身の体から発する強烈な熱波で戦車内を熱して操縦者を熱中症に陥らせて無力化した。

ガンフォートは体の底部に弱点が集中している。そこに集中攻撃を仕掛ければ短時間で倒せるが Ω は熱波を放出しており下に潜り込んだ途端に蒸し焼き状態に晒される。銃弾の嵐とレーザー、ミサイルの雨に晒されたアメリカ軍の航空と地上戦力は壊滅的な被害を受けた。

『こちらアタッカー、応援を……!?!』

戦闘機のパイロットが増援を呼ぼうとした瞬間、ガンフォートから発せられたバリアに激突。派手な爆発と共に砕け散った。

全てのガンフォートはドーム型のバリアを発生させることができる。そのバリアはアーセナル等の敵を吹き飛ばす効果がある。戦闘機はこの効果で破壊され、敵からの攻撃を一切受け付けない強靱な障壁に身を包んだ。但しこのバリアを展開している間、ガンフォートは一切動けないという欠点もあるがアーセナルが無いこの世界では些細な

問題に過ぎない。

ガンフォート達は攻撃する戦闘機や戦車を寄せ付けることなく各々の武器を駆使して進撃を続ける。

ロシア都市部の上空に異形の輸送機型の大型イモータル『ナイトメア』が飛来、空中から爆弾を投下して建物を容赦なく爆撃。これにより建物が次々と崩壊、突然の攻撃に対応できずに多くの市民が命を落とした。そこから薄い緑色の同型機『RT:α』、黒と赤が特徴の同型機『RT:Ω』が航空戦力イモータルを率いて上空から侵攻。

空爆で建物を破壊、戦闘機は随伴機のイモータルが数の暴力を活かして撃墜する。ナイトメアは輸送機だがそれに合わせスピードで突進、ミサイルと戦闘機を爆砕しながら空を縦横無尽に飛んで敵を撃墜し続けた。

彼等を止める術を持つものは誰もいない。黒い空はイモータルによって支配された。

フランスの首都であるパリに空飛ぶ鋼鉄の大蛇を彷彿させる姿をした大型イモータル『ヴォルト』が現れた。その周囲に小さい飛行型のイモータル『グリッター』が大量に随伴している。

ヴォルトは自身を撃ち落とそうとするフランスの航空部隊の戦闘機を背部レーザー

砲台で撃墜、接近した戦闘機はアークガンで叩き落とす。随伴するグリッターは都市部に降りて周囲の建物を見境なく破壊、市民も問答無用で殺す。

これに加えて若干暗い緑色の同型機『RT:α』と紺色に近い黒が特徴の同型機『RT:β』、赤色が特徴の同型機『RT:Ω』も上空に出現。戦闘機を次々と破壊して制空権を支配する。

フランスの空はヴォルト率いる飛行型イモータルで覆われ、地上に戦闘機と戦車の残骸が無数に横たわっておりこの世の地獄と言っても過言ではない。

空から近づくものはヴォルトの弾幕で撃ち落とし、地上からの砲撃は随伴機で破壊する。完璧な連携を前にフランス軍は一方的な防戦を強いられた。

中国の首都である北京に巨人型の大型イモータル『リベリオン』が出現。体の所々に苔が生えており右手に青白くレーザーが走っている大剣、左手に自身の腕を覆う大きな籠手を装備している。リベリオンは右手に持った大剣で薙ぎ払い近くのビルを切り倒した。

緑色の同型機『RT:α』、黒い身体とそれを強調する赤いラインが特徴の同型機『RT:β』が姿を現して建物を思うがままに破壊する。βは大剣の薙ぎ払いを繰り返すと衝撃波が襲い掛かり、周辺の建造物や車両を破壊した。αは全身からミサイルを発射、

接近する戦闘機を叩き落とす。

地上の戦車部隊は踏みつけや大剣を地面に突き刺して繰り出す衝撃波で容易く粉碎。勢いをつけた突進で目の前にあるビル郡や戦車、高速道路を容赦なく破壊する。

リベリオンの圧倒的な力に中国の軍隊は屈するしかなかった。

イギリスの都市中心部の地中から先端に大型ドリルのついた掘削機と芋虫の形状をした大型イモータル『ドレッドノート』が勢いよく飛び出した。

ドレッドノートは地上に姿を現すと同時に市街地を鈍そうな巨体からは想像も出来ないほどの物凄い速さで移動。建物や車を次々と破壊、街を蹂躪していく。

更に近くの地表から深緑色の同型機の『RT:α』、黒と赤いラインが特徴の同型機『RT:β』と真紅の装甲が目を引く『RT:Ω』が出現すると共に街を縦横無尽に爆走。建造物を気にすることなく次々と大きな穴を開けて崩壊させた。地下に潜った彼等は地面を掘り進めて建物の基盤を破壊、これにより建造物が次々と倒壊した。

地下を進むドレッドノートにイギリス軍は手出しができずに彼等の侵攻を許すしかなかった。

オーストラリア都市部の上空にエイを彷彿させる飛行物体の大型イモータル『アビスエイター』が現れた。こいつは大型イモータルの中でも速く動く厄介な敵だ。

更にこいつは大量の随伴機を従えており彼等も都市部の破壊に加わり、手が付けられない状態になった。戦闘機で破壊しようとすれば随伴機が人海戦術で押し寄せてきて撃墜される。

制空権をあっという間に支配されたオーストラリアはアビスエイターの侵攻を黙認せざるを得なかった。

ブラジルの都市部に輸送列車型の大型イモータル『スナッチャー』が突如、出現。線路を爆走して他の列車を破壊、我が物顔で突き進む。地下鉄の線路は別個体が爆走して車両を強引に脱線させて独走する。攻撃を仕掛ければ周囲の人を巻き込む危険があるので手出しができない。

ブラジル軍は地上と地下で暴走するスナッチャーに攻撃する事ができずに彼等の所業を指を加えて見るしかなかった。

EXオーダー6：イモータル総進撃（中編）

ゼルクロアの侵攻と共に世界各地で暴れるイモータル達も破竹の勢いで進撃を続ける。

ガンフォート達はアメリカの主要都市に壊滅的な被害を与え、ナイトメアとヴォルトは空を我が物顔で飛び回って空軍を叩き落とし、ドレッドノートは地上と地面を掘り進めて地盤沈下を引き起こした。

スナッチャーは南アメリカの線路の半分を制圧してなお爆走している。イモータルの破壊活動は止まることはない。彼等は全てを破壊するまで動き続けるのだ。

この惨劇が起きている所の2か所を詳しく取り上げよう。

フランスにある企業『デユノア社』は経営危機に陥っている。第二世代の量産型IS『ラファール』を開発してヒットしたものの第三世代の開発が上手くいっていない。このまま開発結果を出せなければ開発権限を国に没収されて倒産してしまう。

そこで彼等はフランス代表候補生でデユノア社社長の娘である『シャルロット』を男としてIS学園に入學させて男性IS操縦者の稼働データを盗めと指示を出した。数週間後、IS学園に入學することが決まっている。そこにイモータルが襲来、デユノア

社にも魔の手が迫ってきた。

グリッターの編隊がデユノア社のビルに攻撃をした。更にグリッターの上位機種『スピットビー』も同時に攻撃、下部に爆弾を搭載したボマーが建物内部に入ると共に爆散した。

「何だ!?!」

「にげろおお!!」

「きやあああああつ!!」

社員たちは突然の攻撃と爆発に混乱して逃げだすがグリッター達が飛来、機銃掃射や自爆で彼等は次々と死んでいく。シャルロットはラファールを纏って応戦する。アサルトライフルやサブマシンガンを駆使して航空戦力を削るも敵の数が多すぎてキリが無い。その時、ある男の悲鳴が響き渡った。

「うわあああああつ!!」

シャルロットは悲鳴が聞こえた方向に振り向くと社長（父）がイモータルの攻撃で死んだ光景を見てしまった。父の死体に無数の銃弾で貫かれており大量の血が床に流れていた。追い打ちをかけるように父の元にボマーが群がると同時に爆散。死体は完全に消えてしまった。

会社の施設は完全に崩壊、瓦礫の山と化してしまった。全てを失い、抗う理由も無く

なった彼女は抵抗を止めてISを解除した。シャルロットは全てを悟った表情をして体を何かに差し出した。

「これで……お母さんの所に逝ける……」

彼女は安らかな微笑みを浮かべると共にグリッター達から放たれた銃弾が全身を撃ち抜いた。痛みはなく一瞬で苦痛から解放されたのだ。そしてボマーの爆発で彼女の遺体は吹き飛び、この世から去った。彼女の他人に利用され続ける人生はこうして幕を閉じた。

シャルロットは生まれた時から母が女で一つで育った母子家庭だった。育ててくれた母が突然亡くなった後、父に引き取られたが彼女の人生がそこで狂い始めた。

ISの適性が高かった彼女は父の会社で実験動物扱いをされ、父の本妻からは酷い虐待を受けており肉体と精神に傷を負っていた。シャルロットの母は本妻の子供ではなく父の浮気相手から生まれた子供だ。

IS学園の入学も社長の指示かつフランス政府も共謀していたので彼女が抵抗する術はなかった。しかしイモータルの襲来でシャルロットは肉体と精神の苦痛から解放された。

彼女を排除したイモータルの軍勢は引き続き破壊活動を続けた。フランスは数時間後に陥落、この世界から国が一つ消え去ったがこれは惨劇の序章に過ぎなかった。

日本の某所、ゼルクロアとイモータルが日本の都市を蹂躪していたがそこにある男が彼等の前に立ち塞がった。

「俺は相崎正広あいきまひろ！ 正義の名のもとに貴様を成敗してくれる!!」

彼は神様転生により別の世界で生まれ変わった男だ。前世の彼は冴えない会社員だが心の奥に鬱憤が溜まっている。休日は溜まった鬱憤を晴らす為にネットの掲示板を意図的に炎上させてその様を見て楽しんでいたがその日に心筋梗塞を発症して亡くなった。

それを見た神様（邪）は彼を何故か転生させた上で別世界に送った。転生特典として彼にチート能力を与えたのだ。正広は狡猾でISの世界に転生した彼は織斑一夏を踏み台にすることなく平穏な暮らしをしていたがそれにイライラを募らせていた。

彼は原作の京都で起きる事件でチート能力で彼と組織をまとめて殺害、変身能力で一夏にすり替わってハーレム生活をしようと計画していた。しかしイモータルの襲撃によりそれが消えた事に怒りが爆発、元凶のゼルクロアの前に姿を現したのだ。

「変身!」

《HENSSIN Change Beetle》

正広は堂々と宣言すると同時に赤いカブトムシを模した機械をベルトに装着した。すると彼の体が六角形の細かい光に包まれると同時に重装甲な鎧を身に纏ったがその直後に黒い繭の様な光に覆われた。

光が晴れるとそこにあつたのは赤いカブトムシに酷似した怪人だった。顔から胸にかけて目の中に手の指が入り込んだ腕の様な意匠がある。全身は昆虫を思わせるような禍々しい飾りや各部に甲殻類を思わせるような甲羅が見られる。

正広は仮面ライダーカブトの力を宿した怪人『アナザーカブト』に変身していた。しかし当人は仮面ライダーカブトに変身していると思ひ込んでおり鏡で見たとしてもカブトと断言するだろう。

第三者からみればアナザーカブトと指摘されるがそれでも彼は否定する。しかしこれは偽りようのない事実なのだ。

正広の歪んだ認識はその事実が受け入れられない事を証明している。アナザーカブトは正に天の道から外れた外道だと物語っているのだ。

「仮面ライダーカブトの力、見せてやるぜ!! クロックアップ!」

《Clock Up》

彼はカブトの高速移動を発動、強化されたパンチやキックでイモータルを次々と撃破

する。ゼルクロアは姿が見えないアナザーカブトに誘導レーザー、ローリングレーザーを繰り出した。

「うわあっ!?!」

2つのレーザーが直撃した正広は高速移動が解除された。カブトの高速移動は強力だが誘導と範囲攻撃は躲せずに攻撃を受けたからだ。ゼルクロアはアシッドクロアの連撃をアナザーカブトに叩き込んで変身を強制的に解除させた。

「なっ!?! まだだ……終わりにじゃない!」

変身を解除された正広は立ち上がって構えると同時に腰から丸い赤い石が埋め込まれた銀色のベルトが浮かび上がった。左側面のスイッチを押すと同時に彼は叫んだ。

「変身!」

彼の肉体は戦闘に適した肉体に変わった。金色の角と赤い目と鎧、黒い肉体が特徴の戦士『仮面ライダークウガ』に変身すると同時に黒い繭のオーラが全身を覆った。

これによりクウガの容姿はクワガタムシに近づいただけでなく人間の体型からかけ離れた大きな異形、頭に長い角が三本生えた怪人『アナザークウガ』になった。この姿は邪な心を持った彼の本質を示していると言っても良いだろう。

クウガに変身した正広は体格差を気にすることなく近接戦闘を仕掛けて強化された肉体からパンチとキックを放った。ゼルクロアはその攻撃を難なく回避すると同時に

アシッドクロアの連撃と極太レーザーによるカウンター攻撃であっさりとアナザークウガの攻撃を退けた。

「があああああっ!?!」

正広はゼルクロアの攻撃を喰らって変身が解けてしまった。それでも彼は立ち上がるうとした。しかしその瞬間、彼の全身に激痛が襲いかかった。それに耐えられずに彼は倒れて苦しみました。

「なんだこの痛みは!?!」

正広の体から酷い発疹が発生、気管支炎が腫れ上がって気道が狭くなり呼吸困難を引き起こした。彼の体に起きた病は自己免疫疾患である。自己免疫疾患とは体の免疫が異物を排除する為に分泌された物質に体が異常な反応を示す病だ。

その症状は個人によって異なるが正広の場合は前述した発疹と呼吸困難である。これは高濃度のフェムト粒子とゼルクロアのアシッドクロアに含まれる有毒成分に体の免疫が異常反応を起こした事が原因と考えられる。

彼の症状が短時間かつ身動きがとれなくなった原因はチート能力の強化である。身体能力の強化は肉体だけでなく神経や化学物質の分泌にも影響を与える。フェムト等の有毒物質を排除するために生成された分泌物が必要量を大幅に超えて生産されたのだ。

体の分泌を司る神経は自律神経が制御しており自分の意志でコントロールは不可能だ。実際、心臓を止めようと思っても止まらないのは生命活動に深刻な影響を与えるので自分の意志とは関係なく活動している。

「俺の体、俺の言う事を聞けよ！」

正広は叫ぶも症状は悪化の一途を辿るばかりだ。自身の免疫で蝕まれる苦痛に悶えているがゼルクロアは相手にする価値が無いと判断したのか彼を無視してその場から離れた。

本来であれば数時間後に正広は死ぬはずだったがチート能力の不死身により彼は死ぬ事は許されなかった。身動きが取れない彼はこの場所ですつともだえ苦しむがイモータル達にとっては知った事ではない。

こうして救世主伝説を築こうとした男は永遠の苦痛を味わうことになった。苦痛に襲われる正広を他所にイモータル達は徹底的に世界を破壊する。正広の苦痛は世界が壊れても永遠に続くだろう……。

EXオーダー：7イモータル総進撃（後編）

イモータルと人類の攻防戦が激化する。その最中、太平洋の上空に時空の歪みにより穴が開いた。そこから紫色の光が点滅している大きな球体『エクリップス』が出現。

エクリップスはそのまま進み、日本の首都上空に入ると同時に青いレーザーを放った。それは着弾と共に大きな爆発が発生、瓦礫の山を吹き飛ばして何も無い更地に変えた。

この場所は既にゼルクロアによって壊滅寸前だったがエクリップスの追い討ちにより再建が不可能となってしまう。球体から放たれる攻撃は次々と残った建物や瓦礫を破壊、荒地となってしまう。

無機質に漂うこいつは周辺にあるものに片っ端からレーザーで撃ち抜いて徹底的に破壊。ゼルクロアは野獣を彷彿させる程の極めて荒々しい動きに対してエクリップスは静かに攻撃する所が異質と表現できる。

こいつはあらゆる物を無差別にレーザーで破壊、日本中を焼け野原に変えようと進むように思える。それを阻むかのようにある男が奴の進路を立ち塞ぐ。

「日本を荒らす悪党め！ 俺が成敗してやる!!」

自己免疫疾患から復帰した正広がエクリップスの前に現れた。彼はアレルギー反応を

気合いで何とか耐えて動く。エクリプスは目の前の障害物を排除する為にレーザーを問答無用で放った。

「変身！」

爆煙が晴れると彼が立っていた所に鍛えられた紫色の筋肉質の戦士『仮面ライダー響鬼』がいた。その瞬間、響鬼の体が漆黒の炎に包まれた。

「その程度の攻撃は俺に通用しない！」

黒い炎が消えると共に醜い怪人『アナザー響鬼』に変貌していた。その姿は本来の響鬼ではなく敵対勢力の魔化魍で將軍を彷彿させ、頭部には原点の響鬼には無かった顔が存在している。

それはさながら日本の古典芸能の面を思わせる物で鬼になり損なった人間の姿とも言える。また鋭い牙が特徴的な口元はよく見るとそこにもう一つ口元が存在しておりこれは響鬼のお面をつけている様にも見える。

肩に掛けた羽衣や下着から仁王像、両肩の鬼瓦は怪物を強調する飾りとしては申し分無い。

正広の肉体に宿る精神が酷く歪んでいる事をこの怪人の姿が証明している。ある意味では彼に相応しい姿だ。

「響鬼の力、見せてやるぜ!!」

正広は響鬼に変身、赤い撥を模した武器『音撃棒 烈火』を両手に持つて跳躍する。響鬼の鍛え上げた肉体の跳躍はエクリプスのいる所に到達するには十分な飛距離だった。

エクリプスはアナザー響鬼が自身の頭上から攻撃を仕掛ける光景を確認、球体型の攻性バリアを展開してアナザー響鬼を突き飛ばした。

「なこっ!？」

突き飛ばされた正広は地面に激突、立ち上がろうとしたが無数のミサイルとグレネードが間髪いれずに襲い掛かった。爆炎と煙が舞い上がる中でもエクリプスは容赦なく追加のミサイルとグレネードをアナザー響鬼に叩き込んだ。

「舐めるなー」

爆煙を突き抜けた正広は不死鳥を彷彿させる姿の戦士『仮面ライダーオーズ タジャドルコンボ』に変身して反撃を仕掛けようとした。その時、彼の体が禍々しい漆黒の炎の様なオーラに包まれた。

オーラが晴れると正広の姿はオーズを歪めたような姿を持った『アナザーオーズ』に変わっていた。

本家より生物感のある容姿を持っており頭には鳥の翼、肩と掌には猫科の動物、脚は昆虫類の足の特徴が現れている。その姿はさながら怪人化したオーズと言える。

上半身から展開された醜い大きな翼は赤黒く染まっており歪んだ孔雀の翼を彷彿さ

せる。

正広に命を懸けて手を伸ばす者が存在せず歪んだ醜い野望を抱く彼を象徴している。

「さっさとくたばれ!!」

オーズはタジャドルコンボの必殺技『プロミネンスドロップ』を放つ態勢に入った。エクリップスはアナザーオーズを迎撃すべく重力波を展開、彼をそこに引き摺りこんで動きを封じた。

「なんだ……これは!?!」

エクリップスは戸惑うアナザーオーズに構わず大レーザーを撃ち込んだ。正広は身動きが取れない状態でまとも喰らって地面に叩きつけられた。更にエクリップスは分身を作り、2体が増えてアナザーオーズに追撃を仕掛ける。

一方が大レーザー、もう一方がミサイルと電撃を浴びせた。この一方的な攻撃を食らった正広は消滅した。それを見たエクリップスが去ろうとした時、背後から何か勢いよく

飛び出した。

「コンテニューー!」

何とコンテニューーと刻まれた黒い土管から正広が出てきた。しかも残機を示す数の表記が∞となっている。即ち、彼は無限に復活できるのだ。

「本当の戦いはここからだぜ！」

正広は気合いを込めて叫ぶがエクリップスはそれを無視して先を進む。奴の進路にある物をレーザーやミサイルで破壊する。破壊神と呼ぶに相応しい所業を淡々としていく。

「無視するな!!」

エクリップスの反応に激昂した彼はロケットの様な頭部とオレンジの複眼、体が宇宙飛行士の服を彷彿させる姿をした戦士『仮面ライダーフォーゼ』に変身、右腕にオレンジ色のロケットを装着して追跡する。その直後に彼の全身がドス黒い靄に包まれた。

エクリップスは自身を追いかける怪人『アナザーフォーゼ』を分身に任せてその場を去った。分身はアナザーフォーゼを重力波で拘束、大レーザーとミサイルの嵐とグレネードの豪雨、強烈な電撃をまとめてぶつけた。

「ギヤアアアツ!!」

波状攻撃をまともに受けた彼は墜落、変身が強制解除された。正広は立ち上がり目の前にいるエクリップスに諦めることなく挑んだ。

「まだだ！ まだ終わらんよ!!」

彼はそう叫びながらエクリップスに立ち向かうもそれは分身なので無意味だった。正広は分身と気づかぬまま永遠と戦い続けた。

彼が無意味な戦いをしている内に地球の全領土はイモータルの軍勢によりあっという間に支配された。彼等が闊歩する世界は酷く荒れており生命の痕跡すら残されていない。何故なら生存者を発見すれば空にいるイモータルが始末してしまうからだ。

空の支配者となったヴォルトとナイトメアは悠々と空を飛んでいた時、上空から何かの光が降り注いだ。それに呑まれたナイトメアは爆散して消えた。

空から放たれた光の正体は衛星兵器『エクスカリバー』から高出力のレーザーである。これがイギリス上空を飛んでいたヴォルトに命中、一撃で撃墜した。

これは元々、対IS用として作られた物だが大型イモータルにも効果がある数少ない兵器だ。今は持ち主の指示により無人で稼働しておりイモータル達を黙々と高出力レーザーで撃ち抜いた。

それに気づいた空を飛ぶイモータル達は迎撃をするもエクスカリバーのレーザーの前に散った。このままイモータル達はエクスカリバーにより殲滅されると思われるがそうはならなかった。

『グルアアアッ!!』

何かを感じ取ったゼルクロアは天に向かって激しい咆哮を放った。それは大地や海、風、地球全土を大きく震わせる程の巨大なものだ。これに何かが反応したのか地球の近くにある天体の一つが動いた。

ゼルクロアはエクスカリバーを排除する為に地球から一番近い軌道にある月を呼び寄せたのだ。奴の手によって強引に月の軌道を変えて地球の引力圏に引きずり込んだ。

月は地球に引き寄せられる過程で成層圏近くにあったエクスカリバーを破壊した。それから月は地球の海面に落下、海の水を強引に押し退けて海底最深部の地表に激突した。

この衝撃によって地球の最深部の層が剥き出しとなり、その巨大な破片が宙を舞う。これらの破片が地上に降り注いで大地に無数のクレーターを形成する。また破片だけでなく塵などの目に見えない物も離散、空を覆い尽くした。

月の衝撃を受け止めきれなかった地球は崩ずれ、原型を保つこと失く砕け散って重力は崩壊。大気が消えて破片等は散り散りとなって宇宙に放たれた。

地球がこの世界から消えた。衝突した月の中心部から異様な姿を巨大な何かが見れた。

DXMの世界で語り継がれた存在『ドミネーター』である。ドミネーターは月に眠っていたが月が地球に衝突、互いが崩壊したから目覚めた。

この世界に残っているのはドミネーターとゼルクロア、エクリプスの3体だけだ。彼等は互いに敵と認識、排除すべく攻撃を始めた。

「くっせ……。何がどうなってんだ!？」

一方、不死身の力を持つていた正広は傷一つなく生きていた。彼はイモータルの争いを目撃すると同時に攻撃を仕掛けた。

「俺を無視してんじゃねえ!!」

威勢よく突撃した彼だったが攻撃の余波で宇宙の彼方に吹き飛ばされてしまった。

正広はその衝撃で気絶した。彼の周辺が凍結し始めた。彼の体内の酸素が宇宙の低温により瞬間に凍りつき動かすことが困難になった。

正広は意識を取り戻すも凍りついた肉体に力が入らずチート能力で脱出できなかつた。彼のチート能力は精神が集中しないと発動できないが凍える冷たい環境で集中力を高めることは不可能だ。

たった一人残された生き残った彼は欲を満たせずに永遠に宇宙をさまざまに続けた。死ぬことすら出来ない彼は自己承認要求を満たせずに生きる事に恐怖、凍りついた体を動かすことができずに言葉を発せられない。地獄に等しい状況だ。

そして正広は果てしなく続く宇宙を漂っていく内に考える事を止めた。

EXオーダー8：探査オーダーI

イーグルが帰還してから数年後、オービタルから緊急指令が通達された。解放旅団のメンバー達がブリーフィングルームに集結して通達されたオーダーを遂行する。

「イーグル、到着しました」

彼がオービタルのブリーフィングルームに到着すると准将が中央に佇んでいた。どうやら一夏が最後に到着したようだ。

「よく来てくれた。早速だがオーダーの説明をする」

准将はそう言つて新設された紫色に光るモニターの前に立つて説明を始める。

「最近、イモータルが潜伏していると思われる地下施設が発見された。全解放旅団に探査のオーダーを発令している。君の力も貸して欲しいが頼めるか」

准将は一夏にそう尋ねると彼は快くオーダーを引き受けた。

「分かりました。イーグル、このオーダーを受領します。」

「一つ確認したいことがあります。僚機は連れていきますか」

「他の傭兵達は地下施設の探査に出向いている。無論、私の傭兵達も調査に出ているから連れていけない」

「一夏は仲間を連れていけない事を確認、少し考えて口を開く。

「分かりました。私一人で探査に行きます」

「すまない、頼む」

こうして一夏は准将の指示により単独で探査に乗り込むことになった。彼に待ち構えている未知の存在は何なのか……。彼は例の地下施設の入り口に到着、通信回線を開いた。

「こちらイーグル、地下施設に到着した。オーダーを開始する」

『了解しました。地下施設の大まかな構造は確認できますが詳細は不明です。気をつけてください』

一夏はフォーに現地到着を報告してオーダーを開始。部屋数は17でそれほど広い訳ではない。入口の付近に回復カプセルが設置されているもの今は用が無いので先に進んだ。

「敵の反応を確認。入口から様子を見る」

彼はリーダーに敵の反応を見つけて入口付近で大まかな状況を調べた。それによると幾つかの砲台と飛行型イモーターを発見、幸いにも敵は気付いていない。奇襲攻撃のチャンスだ。

「敵を殲滅する」

一夏は突撃銃の引き金を引き、近くの砲台に弾丸を浴びせて破壊。飛行型のイモータル『ガードスケイル』はそれに気付いて彼に攻撃を仕掛ける。

一夏はそれに動揺せず近づくガードスケイルをレーザー銃で黙々と撃ち落とした。こいつは実弾攻撃に高い耐久性を持っているがレーザー攻撃と近接攻撃に弱いのでそれらの攻撃をすれば簡単に破壊できる。攻撃は横に移動して回避しながら反撃を繰り返してあつという間に敵を全滅させた。

「敵を全て排除した。先に進む」

一夏は敵を全滅させて開いた右の扉に入った。通路を抜けた先に複数の回復カプセルが設置されているが目立った損傷が無いので左側の通路へ進んだ。

「何だ……この部屋は？」

通路の先にある部屋は不気味な黄緑色の光が部屋を照らしていた。砲台が幾つかあるものの入口付近で破壊できる配置だったので一夏は入口から攻撃して敵を撃墜した。

「敵を排除した。これより探査を行う」

敵を全滅させた彼は部屋の内部に突入すると機体に異常が発生した。この部屋は特殊な毒の成分で満たされており一定時間滞在すると機体がアシッド状態に陥ってしまう。

この状態になると機体の耐久値と防御力が低下してしまう。彼は急いでこの部屋か

らブーストで脱出、短時間だったので耐久値の減少は低かった。

「危なかった……」

イーグルは息を吐きながら呟いて先を急ぐ。次の部屋はレーザー砲台が16個設置されていた。一夏の存在に気付いた砲台は照準を定めてレーザーを放った。

「マズイ!?!」

彼は咄嗟に通路の脇を遮蔽壁代わりとして攻撃を防いだ。レーザーのダメージは低くても一斉かつ長時間照射されたら一溜まりもない。

照射が終わった瞬間、一夏はミラーージュを展開して2方向から砲台の破壊を始める。先行させた分身が囷になっている隙をついた彼は砲台の死角から突撃銃の弾丸を叩き込んだ。分身もまたミサイルや弾丸を発射して砲台に攻撃する。

「破壊した。次に行く」

イーグルは分身と共に砲台を破壊、分身を消して次の部屋に入った。そこはオレンジ色の光が灯っており強烈な熱を発している。

「ブーストができないだ?!」

一夏はそれに戸惑うも分身を呼び出して二手に別れて部屋の敵を殲滅する。この部屋に居るのは砲台とガードスケイルだったので容易に破壊した。

敵を全滅すると閉ざされていた扉が開いた。イーグルは扉の先に進んだ。次の部屋

は数本の柱の上に砲台が設置されていた。砲台は敵の侵入に気付くと砲撃をするが一夏はブーストで弾丸を回避する。

「一気にけりをつける」

彼はミラーージュを発動、分身を生成して攻撃を開始。瞬く間に砲台を破壊する。分身が両兼味方機としての役割を果たしているので効率良く排除できる。砲台を全壊すると扉が開いた。

この先は行き止まりだが部屋は他の所よりも明るいようで奥に無人機のアーセナル『ストライ』が待ち構えている。

「ターゲットはここにいたか。イーグル、目標を排除する」

イーグルは部屋に入った瞬間、ランペイジハンマーのミサイルを放った。ストライは弾速が遅いミサイルを左に動いて回避するも遅い故に追尾性能が高く、逃げ切れずに被弾。

爆発と同時に炎上状態にする黄土色の煙を展開、ストライはあつという間にスタミナ切れに陥りブーストできなくなった。彼はチャンスと見てミラーージュを発動して追撃をする。

「一気に決める！」

イーグルはRWの突撃銃を近接武器のアメノムラクモに持ち替えて斬りかかる。分

身はその間もミサイルや突撃銃の銃撃で足止めをしながらダメージを蓄積させていく。「これで終わりだ！」

一夏は横薙ぎに太刀を振るとストライの胸部と腰を繋ぐ関節部を両断、機体がある場所に崩れ落ちた。彼はストライの残骸から武器を回収して帰還した。

オービタルに戻った一夏は一連の出来事を准将に報告した。すると准将から意外な返答がきた。

「うむ……他の傭兵達の報告に類似が無い。この地下施設は何かありそうだ」

「ジョニーさん達の報告書を見た所、私とは異なる構造でしたね。准将、私はこの施設を引き続き調査します」

彼は准将や傭兵達からの報告を受けて地下施設の調査を続けると打診した。准将は一夏からの打診を承諾する。

「分かった。地下施設の調査を君に任せる。手の空いているフリーの傭兵に協力要請が出せるから必要な時にしてくれ」

こうしてイーグルは地下施設の調査を本格的に乗り出す事になった。

EXオーダー9：発狂する箒

織斑一夏が戦死してから数日後、IS世界は彼が死んだことを隠している。極秘任務で彼が死んだことが世界中に伝われば大混乱が起きるからだ。

林間学校を終えて学園に戻った生徒達の顔つきは一部を除き憑き物が取れたような爽やかな表情をしていた。その事に千冬は複雑な心境をするが生徒達はその心中を知らない。

人の死を喜ぶ者達を批判する人達もいるかもしれないが得体の知れない存在に恐怖するのは人の本能であり誰もが必ずもっている。

同時刻、意識を取り戻した箒が目を覚ました。彼女は足を少し動かそうとしたが全く動かない事に気付き内心で酷く動揺する。

「これは……一体どういうことだ!？」

箒は更に動揺して懸命に足を動かそうとするも手応えが無かった。まるで足に神経が通っていない様で不気味に思ったのだ。そこに医師と看護師が入ってきた。

「気がつきましたか」

「先生！ 私は一体……?」

医師はそう問いかけると彼女は何かを思い出したか自分の身に起きたことを尋ねた。すると医者には妙な顔付きとなった。

「今から貴女に重要な話をする。心して聞いて欲しい」

医師によると落下した衝撃で脊髄が損傷。下半身の神経が完全に切れて動かす事が出来なくなつたと告げる。それを聞いた箒は発狂。それに追い討ちをかけるように幼馴染みが行方不明になつた事も伝えた。

「そんな……私のせいで一夏が……。ああああっつー!!」

彼女は病室にも関わらず大声で叫びをあげるがスタッフが入ってきて直ぐに取り押さえられた。その後、千冬が入ると同時に医師と看護師、取り押さえたスタッフが退室する。

「本来なら懲罰を下したい所だがその体では無理なようだ……。復帰したら覚悟しておけ」

千冬は冷たくそう告げて病室を去つた。因みに箒のいる病室は特別病棟の個室で防音施設は万全なので騒いでも問題は無い。

彼女はここで自分がやった行動を酷く後悔するも手遅れだ。箒は己の力を過信して無謀な特攻を仕掛けるも武装の破壊、最新のISすらも失ってしまった。更に幼馴染みの一夏が行方不明^{戦死}したと思つて滝の様に涙を流して発狂。その果てに心が壊れて目が

虚ろになってしまった。

それから数ヶ月間は入院、リハビリを続けるも箒は無表情だった。医師から精神的な病があると判断されて入院期間が無期限で延長、IS学園からの自主退学をした。

箒の家族は見舞いに来なかった。東は行方不明かつソロモンの行方を追うことに夢中でそれ処では無く、両親に入院の件が一切伝わって来なかったからだ。

孤独感や幼馴染みを殺してしまった罪悪感に耐えきれ無くなった彼女は監視の目が緩んだ隙について首を吊って自殺した。

死体になった彼女は誰にも知ることなく密かに火葬された……。

こうして彼女の一生は終わりを告げた。

一方、一夏はISの世界にいた事をすっかり忘れているのか今日も地下施設でお宝を探す探査オーダーをしている。彼はオーダーを終えて帰還、持ち帰った資材の報告をした。

「今回のお宝は良好だ。この調子で新武器の調達を続けよう」

今回の持ち帰った武器で一番のレア物は直剣の近接武器『アルファングレイガー』である。この武器は消費メモリが他の武器よりも多いが太刀の様に軽く振れる上に直ぐ

に次の敵に攻撃可能で威力は極めて高い。

地下に眠る武器はほんの一部に過ぎないが極めて強力な武器である。この施設にはまだ解明されていない部分が多くある。

一夏は休憩をした後、また地下施設に潜る。自分がIS世界で死んだことになっていると考えていないようだ。

因みにグリーンフが死んだ後、残されたグルーミーとリグレットは捕まりテラーズは解散。犯罪者の集まりである西の七人に吸収された事で探査オーダーを中心に活動をしている。

本来なら極刑もあり得たが熟練の技術と西の七人による交渉によって合併したのだ。合併条件は彼等の監視と引き換えに刑期の短縮。

この条件をオービタルが受け入れたのだ。こうして彼等は生き残って活動を続けている。そこに1つの通信が入ると一夏の顔付きが変わった。彼が通信を終えると同時に攻撃準備を始めた。

「ゼルクロア……」

一夏は小声で呟き、アーセナルで出撃した。今日も彼はイモータルと戦う。

解説と余談

解説その1

『一夏が異世界に飛ばされた時に何故若返った』

彼が異世界に飛ばされた時に1歳前後まで若返りさせた理由は3つある。

1つ、記憶の完全なリセット。2つ、意外性を狙った。3つ、昨今で流行っている神様転生で前世の記憶関連の引き継ぎに対する疑問。

1つ目に関しては記憶喪失で十分だと思われるがこれだと何らかの拍子に思い出す可能性がある。記憶は一夏やその関係者にとっては重要なものだ。記憶が消える事は存在が消えることを意味する。若返りで記憶を完全にリセットした上でゼロから積み上げて彼の新たな始まりとした。メタ的な部分を語るなら作者にとって都合が良い『オリ斑一夏』を創造するためである。

2つ目の意外性は近年の作品で若返りが乏しいと感じたからである。異空間を通過した作用で細胞の時間が逆行すると思った。

3つ目は単純な疑問で神様転生で生まれ変わったのなら記憶はリセットされると思った。しかしその後の展開を見ると殆どの転生者は前世の記憶を何処かの段階で取

り戻している。

前世の記憶を最初の内だけ持っていて後から消えていくことは理解できるが完全に取り戻す事に違和感がある。この小説でも前世の記憶等を出すことも可能だったが1つ目の理由に反するのしなかつた。

一夏の若返りの解説はこれで終わりとする。

『一夏は何故、IS学園で人間関係が上手く構築できなかつたのか』

彼の年齢が20歳と育つた環境がクラスメイト達と全く異なっているからだ。

20歳で高校生と名乗る事に違和感を持つ人がいるだろう。しかし現代の法律を適応するなら20歳で高校生も有り得る事だが日本でその事例は極めて珍しいと言える。

その大半は定時制で通っているケースが多い。中学を卒業すると同時に高校に進学する場合は殆どで違和感があつてもおかしくはない。

彼のクラスメイトのほぼ全員が学歴は違うと言えど同世代でかつ女子高出身生徒が半数を占めているので会話し辛い事も要因と言える。更に彼の育つた環境は裕福とは言えないがそれなりの暮らしをしている。しかしIS学園の生徒達は早ければ幼少期からIS学園の入学に向けた勉強をしている。故に環境が余りにも違いすぎるのだ。

加えて一夏は18〜20歳まで傭兵として学園に入学するまでは命を懸けた戦いを

していた。彼女達とは価値観がかけ離れており話しかけにくい雰囲気形成していると考えられる。彼はクラスの雰囲気馴染めない事は既に分かっており異世界から来た自分は無闇に問題事の干渉を避ける為にセシリアの侮辱発言等は一切、反応しなかった。

メタ的な部分を語るなら原作のツツコミ所を排除したかただけでセシリアと鈴音、ラウラの喧嘩騒動を無くしたこと、シャルロットの退学処分もその一環に過ぎない。

『偽りの暮桜でラウラは何故死んだのか』

原作で一夏は零落白夜でVTの外装を切つてそこから彼女を引き摺り出して助けた。これに関してはシャルロットの支援があり、ラウラの意志を知った彼だからできたと思う。DXMの一夏はレーザーブレードしか装備していないがラウラの救助はできていた可能性はあった。

しかしこの世界の彼はラウラと話す機会是对抗戦前の模擬戦しか無く、その短時間で彼女の全てを把握する事は不可能に近い。

更に対抗戦は一夏が単身で出場しており協力者はその場にいなかった。ミラージュ

機能で分身を生成してダメージを与えつつ鎮圧部隊の到着迄に時間を稼いだ。その間、分身はラウラへ積極的な攻撃をしておりダメージが蓄積して装甲の再生速度が低下。アーセナルの損傷が酷くなってミラーージュ展開の限界時間到達と同時に鎮圧部隊が到着、一夏は撤退した。しかしVTシステムは模擬戦で一夏に敗北していた事を根に持っていたので鎮圧部隊を包囲網を強行突破して逃げる彼を追った。

この時、ラウラの肉体は今までのダメージと包囲網の強行突破で限界を迎えており虫の息に近い状態だった。VTシステムは操縦者の健康状態を無視した動きをして大きな負荷をかけるので長時間の使用は危険だと言える。

一夏のアーセナルは左腕が使用不可でそれ以外の部分も耐久値が半分以下で機体のVPもあと一撃受けたら完全に尽きる状態だった。武装もレーザーブレードしか残っておらずスタミナ切れを起こしていた。

アーセナルはスタミナ切れを起こすと完全に回復するまで上昇やブーストが一切不可能になる。この時、一夏は鎮圧部隊に後を任せて離脱しており跳躍地点までスタミナの消費を考えずにブーストしていたので無理もない。熟練のアーセナル乗りでもスタミナ切れを起こすこともあるからだ。

VTシステムが一夏に接近した時、彼は咄嗟にレーザーブレードを突き出すとブレードは運悪く彼女の心臓近くで絶対防御を貫いて皮膚に到達していた。この時、粒子兵装

を使って離脱すれば良いと思った人もいるだろう。しかしミラーージュを限界まで使うとフェムトの量がゼロになり、蓄積量が最低でも1/3に達しないと粒子兵装が使えないのだ。

フェムト残量の管理が出来ていないと指摘する人もいるが余裕が無い状態かつ限界まで使う事を強いられた状況で細かな管理が出来る人は少ないと思う。レーザーブレードはフェムトが少なくても攻撃できるが普段よりも範囲が狭くなる。運悪く、一夏はこの武器にフェムトの消費を抑えるアタッチメントを装備していたので蓄積していたフェムトでも通常の範囲で攻撃ができてしまった事も要因と言える。

メタ的な事を語るなら原作の一夏がラウラを救出した展開をこの一夏は出来ないと思ったからだ。故に彼を極限の状態にまで追い込んで彼女を殺すしかない状況にした。

『一夏は何故時間稼ぎの作戦を立案する傾向にあるのか』

彼の作戦は時間稼ぎが多い理由は増援戦力が来るからである。最初に戦ったソロモンと暮桜、福音戦においては後から増援が来ることを分かっていた。大きなリスクを負って倒さずに持久戦に持ち込んで敵を消耗させる。

それから増援部隊と合流して安全に倒す方が生き残る可能性は高いと彼は考えた。

戦場において重要な事は生き残る事で命を落とせば計り知れない損失が生じる。また周囲にも大きな被害が発生することも有り得るからこそ彼はリスクを減らす作戦を立てるのだ。

それだけでなく敵の情報を時間稼ぎと並行して取得、増援部隊に敵の情報を送って共有できる利点もある。これにより増援部隊から有効な戦法をその場で取得できる事もあり、困役の損失を避ける可能性が高まる。

仮に増援が無いとすれば彼は別の作戦を立案するかもしれないがそれはまた別の話である。

『EXオーダー2で一夏が何故自滅したのか』

私事ですがアーセナルの初期装備と白式の性能を出来る限りの範囲で再現した組み合わせを操作した。

実際に動かした結果、性能差は明らかで白式再現の組み合わせは速くて慣れるのに時間がかかった。試験場で操作したとはいえこの性能かつ初陣であれだけの動きができる彼が如何に凄い才能を有していたかと思った。

千冬は『私の弟だから使いこなせる』と一夏に言っていたがこれはその台詞に対する皮肉を示すための試合結果だ。

彼女は自分の弟だからこそ同じ戦法ができると思いついていた。外見と遺伝子が同じだけで実際の一夏は彼女が知っている彼の人物像からはかけ離れている。

例えば血縁者であっても戦い方は異なる場合も多くある。DXMに登場する双子の兄弟で結成された解放旅団『鋼鉄の騎士』のデヴァとゾアは双子だが両者の戦い方は違う。兄のデヴァは近接格闘、弟のゾアは射撃戦主体であり機体のパーツは同じだが武器の構成も大きく異なっている。

千冬の理屈が正しければ両者の装備は全く同じ構成だがそうではない。寧ろ装備が異なるおかげで互いの弱点を補える上に役割分担が容易になる。

同じ武器の構成も悪くは無いが苦手な敵と戦った時に負ける可能性が極めて高くなる。故に血縁者だと一方的に武器や装備構成を決めつけてはならない。

単一仕様能力が発現したら殆どの人は効果の確認として発動する。名前で能力の内容はある程度は推測できる可能性はあるが『零落白夜』と聞いて効果の意味は分からないと思う。

だからこそ彼は能力を発動、自分のエネルギーが急速に減ることを知るも解除する前にエネルギーが尽きて自滅した。

更に当時の一夏は千冬に関する情報を殆ど集めておらずオルサで戦う事を前提としてイメージトレーニングをしていた。前述した通り、性能と武装が異なり彼のイメトレが無意味になった。

これは彼が信用できる機体を使えないことによる精神的な動揺と機体の性能や特性を理解する時間が極めて短い上に手探りで動かしていた事も要因だと考えられる。

試合後に一夏が起こした行動だが白式の型式を調べたら開発、製造元の特定は容易にできると思う。機械部品等は大小に関わらず型式があるからだ。

この情報から更に機体を製造した企業を調べて凍結した機体がある事を突き止める事は可能だと思う。教師の独断で無茶苦茶な機体を使わされるだけでなく、第三者のI S開発を意図せず凍結させた事を知れば誰もが憤りを感じるだろう。

故に彼はその報復としてI S学園の上層部と日本政府に一連の経緯を報告した。補足だが一夏はこの事実を報告しただけで最終的な措置は法に委ねている。

現代社会は法治国家なので私刑は認められていない。だからこそ彼はそれを知った上で報告をして政府に後を任せさせた事を記載しておく。

メタ的な事を語るなら原作の一夏が初陣かつ初期設定であれだけの動きができた凄さを示す為である。

一夏に関するI S学園の評価

織斑一夏……コールサイン、イーグルと呼ばれた彼の学園生活に関する評価をここに記そう。

教員の視点で見た学園生活の評価は5段階が表すなら4が最適だ。授業態度は問題なくテストの成績も良好、礼儀正しく模範的な生徒といえる。無愛想な所を差し引けば教員の評価は好印象である。

I Sでの模擬戦においても堅実な戦術、武器の特性を熟知した戦い方の評価は極めて高い。中距離は突撃銃、近距離はマシンガン、遠距離はスナイパーライフルといった銃器の扱いを理解している。

機動も滑らかで人が直感で動かしているような挙動でカタログスペックを越える動きを見せている。極めつけは性能を変動させる特性を状況に合わせて適切に活用している。

攻める時は火力強化、素早く動く時はスピード強化、敵の攻撃回避が困難な時はバリアを展開するといった特性を自由自在に扱っている。

一方、生徒からの評判は今一だ。彼女等はポツと出の彼が自分達よりも遥かに優秀な

成績を修めている事と実技で初心者とは思えない動きを見せたこと等、嫉妬する要素の塊といえる。加えて学内唯一の男子というにも関わらず教師から優遇されていることが気に入らない生徒も多数いるようだ。

陰湿な嫌がらせを画策したとしても彼に通用するとは考えにくいと思われる。現にスパイ活動をしたシャルロットは学園の上層部と共同で容赦なく追放した彼の行いを知った生徒達は表沙汰にならず実害が生じない方法に切り替えた。

彼女達がやったことは一夏の近くでわざと彼に聞こえるように悪口を言うことだ。しかし彼はそんな下らない挑発や悪口に動揺する事は無い。

何故なら一夏はこの世界に来る前からアウトター差別を受けて慣れており相手にしてもキリが無いと分かっているからだ。シャルロットの件も彼女のスパイ活動が露見したから報告したのであつて捏造や言い掛かりは一切していない。

そんな彼の態度を気に入らない生徒達だったが報復を恐れているのか彼に手出しをしない。一夏に因縁や冤罪を吹っ掛けた所で矛盾を看過されるだけでなく自滅に繋がると理解している。

彼が学年対抗戦でラウラを殺した時は1年生の半数が自主退学、他校の編入をした。殺人犯の汚名を被った一夏だが激しく動揺はしていない。

彼が戦っていた世界で人や傭兵が死ぬことは日常茶飯事だ。過去の戦いで一夏も何

人かオーダーを裏切つて敵対した傭兵を殺した事があるからだ。しかし彼は未成年の少女を殺したから少なからず動揺はしていた。

ラウラの件に関する評価は教師と生徒の立場から見ると大きな隔たりがある。教師陣はドイツが人道に反した実験を秘密裏にしていた事を知つていてかつ抵抗しなければ一夏が殺されていたのは明白だ。彼も時間稼ぎのために奮戦していたことを考慮した結果、処罰が無いことに納得している。

それに対して生徒達は事件の裏側を知らされておらずラウラを殺害した事だけが独り歩きして殺人犯と罵りを受けるようになってしまった。

学内では影で殺人犯、人殺しがのうのうと学園を歩いているといった風評被害が横行したが彼は特に何もしなかつた。この手の輩の挑発にのつて良いことは無いことを知っている。

林間学校においては殆どを室内で過ごし、食事は別室で摂つた。これは自身が海水に浸かるとフェムト汚染の発生を伏せてカナヅチで泳げないことを伝える。

別室で食事をした件についてはラウラを殺した件で怯える生徒を考慮した事を教師に伝えると問題なく許可がでた。

翌日、林間学校の実習途中に発生した事件の極秘任務の遂行中に所属不明機と一夏の反応が消えて教師や自衛隊が搜索するも痕跡が何もなかつた。

彼は戦死したと判断された。彼の死に関して半数以上の生徒は内心で喜んでいた。ポツと出の一夏が林間学校で亡くなった事がとても都合が良いことだったからだ。

一部の生徒は千冬にその陰口を聞かれて厳しい説教を受けたらしい。

実際の所、一夏は死んでおらず元の世界に帰還しており今は最近発見された地下施設の調査を進めているようだ。

彼は I S の世界で死んだことになっていることも知らずに今日もまだ見ぬお宝を求めて地下施設の調査を続ける。